インフィニット・ストラトス　世界最強の天使

夢の翼

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二回モンド・グロッソで謎の男達に誘拐された私は一夏兄に助けられた、だがそのせいで一夏兄は右目を失った。私は兄の右目を奪った奴を許さない、その為に私はＩＳ学園に入学することにした

全てはそいつを殺す為に、たった一人の家族である一夏兄を傷つけた奴を絶対に許しはしない

一夏を兄にして千冬を妹にしたＩＦストーリーです

目次

設定 ―――――――――― 1
設定2 ―――――――――― 9
設定3 ―――――――――― 13
STAGEⅠ　ソレスタルビーイング
第1話　IS学園と最強の兄 ―――― 20
第2話　最強への侮辱 ―――――― 28
第3話　天使降臨 ―――――――― 39
第4話　部屋割り ―――――――― 51
第5話　白い騎士 ―――――――― 64
第6話　パーティーとセカンド 77
第7話　セカンド幼馴染 ―――――― 87
第8話　白い騎士と蒼い天使 ―――― 97
第9話　想い ―――――――――― 104
第10話　GNドライブ ―――――― 113
第11話　旧友とカフェ ―――――― 122
第12話　クラス代表戦！そして襲撃 ―――――――――― 132
第13話　襲撃と天使 ―――――― 140
第14話　持つ者と持たざる者 154
第15話　フランスの貴公子とドイツの黒ウサギ ―――――― 165
STAGEⅡ　輝きを追う者たちへ

第１６話　天使の感　―――――　173
第１７話　実習と実戦と過去　―　180
第１８話　シャルロット　―――　193
第１９話　彼女の決意　前編　―　205
第２０話　彼女の決意　後編　―　210
第２１話　深緑の狙撃手　―――　221
第２２話　翼と銃　―――――　228
第２３話　白と黒　―――――　240
第２４話　隣に立つ為に　―――　250
※報告　―――――――　257

設定

主人公：織斑一夏

年齢：２４歳

容姿：髪はそのままで右目に眼帯を付けて目は虚ろな感じ

専用機：ガンダムアメイジングエクシア

『世界で唯一ＩＳを動かせる男』であり第１回ＩＳ世界大会「モンド・グロッソ」で優勝し、さらに公式戦での無敗記録を持つ世界最強のジークフリート。第２回モンド・グロッソで千冬が誘拐されたとドイツ軍から連絡を受け大会を辞退。千冬を助けに向かったがその戦闘中、右目を失ってしまう。事件終結後ドイツ軍へ借りを返す為、一年間ドイツで教官を務めていた。そしてその後ＩＳ学園の教師を務めることになった。

名前：織斑千冬

年齢：１６歳

専用機：白式

世界最強の兄である織斑一夏の妹。強い兄とは違って小さい頃は泣き虫でいつも一夏の隣にいた、幼馴染の箒や鈴と出会って少しづつ強い女へと成長していく。第二回モンド・グロッソの試合を見に行こうとしていた途中、謎の男達に誘拐された。誘拐された自分をＩＳを纏ったまま助けに来た一夏に助けられるが誘拐犯達と一緒にいたＩＳに右目を奪われてしまい、その時の事を今でも思い出して右目を奪った女への憎しみを抱いている。重度のブラコンで中学一年まで一夏と一緒に風呂に入って一緒に寝ていた。

名前：篠ノ之　箒

年齢：１６歳

千冬の幼馴染であり。ＩＳの生みの親、篠ノ之　束の妹。小学生の頃から千冬と一緒に剣道をしていたがＩＳが誕生したことにより千冬と一夏と離ればなれになってしまう。そして６年後、ＩＳ学園で千冬と一夏に再会する。箒は自分と千冬に剣道を教えていた一夏に好意を抱いている。

名前：スコール・ミューゼル

専用機：ガンダムエクシアダークマター

秘密結社、亡国機業に属する実行部隊の隊長。誰もが見ても見惚れてしもう美しさを

持ち、露出が多い赤いドレスを着ている。一夏とは嘗ての恋人同士だったのだがある日。一夏の元を離れ亡国機業で世界各国のＩＳ研究施設を襲撃しＩＳコアを奪っている。一夏と自分が写った写真が入ったペンダントを首に付けている。そして唯一、一夏が勝てなかった人物でもある。

型式番号：ＰＰＧＮ―００１

機体名：ガンダムアメイジングエクシア

パイロット：織斑一夏

一夏自身が秘密裏に開発した近接戦闘用第四世代型ＩＳ。従来のＩＳとは違い露出が無く全身が装甲で包まれている。ＧＮドライブという特殊スラスターを搭載した機体でＧＮドライブから放出されるＧＮ粒子は通信機能とレーダー機能を無効化するこ

とが出来る。主兵装のアメイジングＧＮソードはＧＮビームライフルからＧＮソードへ切り替えが出来る万能武器、ＧＮソードにＧＮ粒子を纏わせる事で零落白夜に似た力を発揮する。

主兵装：アメイジングＧＮソード、アメイジングＧＮシールド、ＧＮバルカン

後付装備：ＧＮダガー、ＧＮロングブレイド、ＧＮショートブレイド

単一仕様能力：トランザムシステム

型式番号：ＰＰＧＮ―００１―２

機体名：ガンダムエクシアダークマター

パイロット：スコール・ミューゼル

一夏のアメイジングエクシアのデータを元に束が開発したエクシアの二号機。亡国機業にＩＳを提示する話で束がスコールに託した機体であり、その性能は一夏のアメイジングエクシアを上回る。背中に装備した強化バックパックユニット『ダークマターブースター』はＡＩを搭載しトランザムシステムの安定装置を兼ねるとともに、鳥型の飛行メカとして分離・単独行動が可能となっている。武装は刀身を撤去したＧＮソードにビームサーベル兼用のビームバルカンを追加した「ダークマターライフル」、撤去した刀身を手持ち式に改造した氷の剣「ブライクニルブレイド」、同じくＧＮソード改の刀身を手持ち化した炎の剣「プロミネンスブレイド」、ダークマターブースターの両翼部分を手持ち剣とした「ダークマターブレイド」、両腕のＧＮバルカンにはビームサーベルの発生機能が追加されている。

主兵装：ダークマターライフル、プロミネンスブレイド、ブライニクルブレイド、ＧＮバルカン、

後付装備：ダークマターブースター

単一仕様能力：トランザムシステム

機体名：白式

パイロット：織斑千冬

束が千冬へと送った第四世代型ＩＳ。武装は嘗て一夏が使っていた雪片弐型、一本だけ。元々は日本のＩＳ企業が設計開発していた代物だが、開発が頓挫して欠陥機として凍結されていたものを束が貰い受け完成させた機体であるため、スペックは非常に高い。第一形態時からワンオフ・アビリティーが使えるように作られている。だが燃費が悪く直ぐにエネルギー切れにない安くなっている。

単一仕様能力：零落白夜

設定２

名前：オータム

性別：女性

年齢：２４歳

専用機：アラクネ

『亡国機業』スコール率いる実行部隊の副隊長。一夏と同じ元ＩＳ学園の生徒で一夏の数少ない友人の一人。学園時代の一夏は一人の時が多く誰も近付けさせなかった彼に当時同じクラスであったオータムは気にかけ一夏と知り合う。そして一夏と知り合って行くうちに一夏に惚れた。一時期一夏と同室になった時は裸で寝ていた時が多く本人が言うには「男って裸で寝たら興奮するらしいから、一夏にこれ使ったらどう反応するか見てみたかった」と証言している。因みに友人なら裸を見られても別に気にしない

らしい。因みに一夏と一線を越えた日はスコールと一夏が恋人同志になったその日に一夏と肉体関係を・・・・。

名前：織斑マドカ（エム）

年齢：１６歳

性別：女

専用機：ＢＴ二号機　サイレント・ゼフィルス

『亡国機業』スコール率いる実行部隊の一人。密かに入手した千冬のＤＮＡから作られたクローンである。ＩＳ委員会で作られた彼女をスコールの実行部隊に保護され、それ以来命を救ってくれた亡国機業に参加。マドカの戦闘能力は極めて高くスコールにト

ランザムを使わせたこ事がある程、スコールが血の繋がった兄とその妹がいると聞かされた時スコールが持っていた一夏（学生）の写真を見せられた時に一目惚れし、それ以来一夏に会えるのを楽しみにしている。因みにスタイルは十代の女の子とは言えない程のスタイルでそのスタイルはスコールやオータムと並ぶ程。胸もかなり大きい。

名前…山田　真耶

性別…女

千冬が所属している一年一組の担任の先生。身長は平均程度だが、実際より低く見えると千冬から評されている。かなりの巨乳の持ち主で、眼鏡が似合う優しい先生。やや天然で、ドジな所がある。実は元日本代表候補で、ＩＳの操縦技術は一夏が認めるほどの高さを誇る。因みにＩＳ学園の学生時代は一夏の元教え子で世界最強に輝いた一夏

に憧れＩＳ学園に入った。当時は積極的でドジな所は学生時代からあった。

『亡国機業』実行部隊　スコールチーム

スコールが率いる実行部隊。１８～２０代の女性達で構成された部隊、戦闘能力は委員会直属のエリート部隊や国家代表軽く上回る程、規格外の能力を持つ。一夏の現役時代を知るも者や一夏に憧れた者、そして一夏に惚れた者が多く、亡国機業内では密かに一夏は彼女達のアイドルになっている。ある作戦で戦闘になるかもしれない一夏と出会えるのをマドカと共に楽しみにしている、その一部には一夏を持ち帰ろうと考えている者が少なくない。

設定３

名前：アレックス・デュノア

年齢：２４歳

容姿：ハイスクールＤ×Ｄの木場祐斗を大人にしたイメージ

専用機：ガンダムアメイジングキュリオス

シャルロット・デュノアの実の兄でＧＮドライブの基礎設計したのが彼。５年前ＩＳの輸送事件で生死不明となっていたが、それはデュノア社からＧＮドライブとその基礎設計を守る為のカモフラージュだった。その５年の間にエクシア、ダークマターと続くオリジナルのＧＮドライブを開発、そして原因は不明だがＧＮドライブの機動テスト中にＩＳを機動させてしまう。母と妹であるシャルロットを傷つけたデュノア社に復讐

を遂げた後、スコール率いるスコールチームに身を寄せる

型式番号：ＰＰＧＮ―００３

機体名：ガンダムアメイジングキュリオス

パイロット：アレックス・デュノア

アレックスが独自の研究と一夏のエクシアのデータを元に開発した一撃離脱型ＩＳ。主に一撃離脱、先制攻撃を得意とする。機動力と火力双方のバランスを考慮してアタッ

チメントを機能を搭載、状況に応じて武装の切り替えが可能。エクシア、ダークマターと同じくトランザムシステムも搭載している

武装:アメイジングＧＮサブマシンガン、アメイジングＧＮハンドミサイルユニット、ＧＮビームサーベル、アメイジングＧＮシールド、アメイジングＧＮロングバレルキャノン、テールユニット

後付装備：ＧＮダガー、アーマーシュナイダー

単一仕様能力：トランザムシステム

後、未定機

型式番号：ＰＰＧＮ―００２

機体名：ガンダムアメイジングデュナメス

パイロット：???

機体イメージは原作のガンダムデュナメスリペア

アレックスが開発した長距離狙撃戦に特化したＩＳ。特徴として額部分に精密射撃用のガンカメラがあり、ブレードアンテナが下がることで露になる。狙撃に専念する為ＡＩが搭載されており、回避運動、シールド制御、粒子制御等など多岐にわたるサポートを行う、主兵装であるアメイジングＧＮスナイパーライフルは通常の狙撃からロングレンジモードに切り替えが可能。緑色のＥカーボン装甲全てに隠し武器としてＧＮマイクロミサイルポッドが内蔵されている、近接戦になった時の用心としてＧＮビーム

サーベルが一本装備されている

武装：アメイジングＧＮスナイパーライフル、アメイジングＧＮピストル、ＧＮビームサーベル、アメイジングＧＮシールド・フルシールド、高高度狙撃銃

単一仕様能力：トランザムシステム

型式番号：ＰＰＧＮ―００５

機体名：ガンダムアメイジングヴァーチェ

パイロット：???

アレックスが開発した、艦隊戦や要塞攻略戦を想定した重砲撃型ＩＳ。４機の中では最も強固な装甲を持ち、他のガンダムに比べ二回り以上はある重厚なフォルムが特徴。そのため機動性や対ＩＳ戦能力は劣るものの、ＧＮ粒子の重量軽減効果により重量自体は通常のＩＳと同じ。防御性、火力性は５機のガンダムの中でも最強を誇るが対ＩＳ戦で使用すると被害が大きすぎる為、現段階では艦隊戦と要塞攻略戦だけ使用が義務付けられている

武装：アメイジングＧＮバズーカ、アメイジングＧＮキャノン×２．ＧＮビームサーベル、ＧＮフィールド

単一仕様能力：トランザムシステム

ＳＴＡＧＥＩ　ソレスタルビーイング
第１話　ＩＳ学園と最強の兄

――――お前が気にすることはない、お前が無事であるならこのくらい安いもんだ――――

何で・・・一夏兄はそんな優しい顔をするんだ・・・・

――――俺は世界最強《ジークフリート》だ、お前を守れるくらいの強さは十分にある――――

そん事じゃない・・・・私は・・・私のせいで一夏兄の右目を・・・・・

――――だから、お前は何の心配をする必要はない。何があろうともお前は必ず守ってやる――――

違う！私は！――――私はッ!!

「織斑千冬さん！」

「はっ」

私は目の前の先生に名前を言われて気がついた、周りを見ると他の女子生徒達が私を見ていた。

「あ！大声出してごめんなさい、次は織斑さんの自己紹介をしてもらいたいんだけど、ダメかな？」

「いえ、少し考え事をしていました。すみません。自己紹介ですね？」

「は、はい！それではお願いします！」

私は席を立ち教卓の前に立ち同じクラスの生徒達に自己紹介をする。

「私は織斑千冬、好きな物は特にない。これから同じクラスメイト同士よろしく頼む」

今は私が入る場所はＩＳ学園。兄が学んだ学園に私は入学した、私はＩＳには興味なかったのだがある事件が切っ掛けで私は此処に入学した、全てはある目的の為にそして一夏兄の隣に立ちたい為に。クラスメイト達は私の自己紹介にパチパチと拍手をしてくる。

「はい！よろしくお願いしますね！」

「はい」

私のクラスの副担任の確か、山田先生だったか。山田先生は私に笑顔で挨拶してくると教室の扉から誰かが入って来た。

「すまない山田先生、会議が遅くなってしまった」
「あ！織斑先生！」
　入って来たのは黒いスタイリッシュスーツで身を固め右目に黒い眼帯を付けた私の兄だった。
「一夏兄！」
　私は一夏兄と叫ぶとその瞬間頭に凄い激痛が私を襲った。
「此処では織斑先生だ」
　一夏兄の手には黒い出席簿を持っていた、恐らくそれで私の頭を叩いたのだろう。一夏兄、どうしたら出席簿から煙が出るんだ。
「く～～～～～～ッ！」
「山田先生ＨＲを押し付けてしまってすまなかったな」
「い、いえ副担任ですから。それより会議の方は？」
「終わった、慣れないことをさせてしまったな」
「あ、ありがとうございます・・・・／／／／」
　山田先生は顔を赤くして無表情の一夏兄を見る、くそッ！一夏兄は私の物なんだぞ！。
「さて、自己紹介が遅れたな。私が担任の織斑一夏だ、よろしく頼む」

「「「「「「きゃーーーーーーーー!!!!!!!!」」」」」」

一夏兄が自己紹介するとクラスの女子達は悲鳴のような歓声が上がった。

一夏兄はＩＳの世界大会モンド・グロッソで世界最強に輝いた人物だ、しかも日本代表だった頃には公式戦無敗の驚異の記録を打ち立てた、ジークフリートと言われ全世界の女性からは憧れの存在だ。そして『世界で世界唯一ＩＳを動かせる男』だ。

「一夏様よ!!」

「本物の一夏様だ!!」

「ずっとファンでした!!」

「大好きです！結婚してー!!嫁にしてー!!」

一夏兄は人気だな、だが残念だったな。一夏兄は彼女など結婚など興味はない！貴様らはかないもしない夢を妄想の中で楽しんでいるがいい!!。

「織斑、後で話がある。いいな？」

「は、はい・・・・」

一夏兄の目が怖い、おまけに虚ろで無表情だから余計に怖い。教室の隅で幼馴染の箒がドンマイといった顔をしている、覚えていろ箒、貴様も必ず！

　私はＨＲが終わると一夏兄に屋上まで連れられて来た、一夏兄は手すりに体を預けると私を見る。
「千冬、これはどういう事だ？」
「何の事だ、一夏兄」
「とぼけるな、俺に何も言わずどうしてこの学園に入学したんだ？」
　その事か・・・。
「決まっている。私は一夏兄の隣に立ちたい為だ、それ以外に何もない」
「俺に嘘が通じると思っているのか？千冬」

・・・・・・やっぱり、一夏兄に嘘は通じないか。
「・・・・・一夏兄の右目を奪った奴を・・・殺す為だ」
「・・・・・・・・・」
一夏兄は私を睨み付ける。私は一夏兄のその眼を見て動けなくなる。
「・・・・・千冬。俺な、お前に・・・・ＩＳに乗って欲しくないんだ」
「どうしてだ？」
「お前を・・・・人殺しさせない為に決まっている」
何故だ・・・・何故一夏兄はッ!!
「じゃあどうして！私にＩＳ学園の教師をしていると言わなかったんだ!?、私は一夏兄がＩＳに乗るのを止めると聞いたから、私は藍越学園に受験しようとした!!だが、この前。束さんに一夏兄の今の仕事を聞いたらＩＳ学園の教師をしていると聞いた!!」
「束の奴、余計な事を――――」
「だから、私は此処に入学した！一夏兄の隣に立って、そして一夏兄の右目を奪った女を殺す為にッ!!」
私のたった一人の家族の右目を私の目の前で奪ったあの女を見つけ出して、殺す為にッ!!もし間違っていたら一夏兄は死んでいたかもしれないんだ!!。
「千冬、俺はお前を守れればそれでいいんだ。この右目はお前の命を守れた代償だ、それ

にあれはお前のせいじゃない、これは俺の不注意で失ったんだ、だから――――」
「どうして！一夏兄は全部背負うとするんだッ！私は・・・・一夏兄の事を・・・・ッ!!」
「千冬！」
　私は涙を流しながらその場を去った、ダメだこんなんじゃ強くなれない。あの女を殺せない、一夏兄が私を守ってくれた様に今度は私が一夏兄を守るッ!!それを邪魔する奴は誰であろうとも・・・私がッ！。

　俺は千冬が泣きながら去った後、空を見つめる。
「俺のせいだな、千冬をあんな風に変えてしまっのは」
　あの時の千冬の顔は今でも思い出す、俺が千冬を助けた後、千冬は泣きながら俺に抱き着いて俺の事を想って泣いてくれた。
「俺って、不器用だよな――――――エクシア」
　俺は指にはめた俺の現在の専用機であるエクシアの待機状態の緑色のクリスタルが

付いたイヤリングに向けてそう言うとイヤリングは緑色に薄く光る。
「千冬、お前は俺が必ず守る、例え腕が失おうとも足が失おうともな」
俺は空に向かってそう言うと丁度学園のチャイムがなったので俺は教室に戻る為、屋上を後にした。

第２話　最強への侮辱

　あの後、私は教室に戻り二時間目の授業の準備をしていた、箒は泣いていた私に近寄り声を掛けてくる
「千冬、どうしたんだ？一夏さんと何かあったのか？」
「何でもない。目にゴミが入っただけだ」
　此奴は篠ノ之箒。ＩＳの生みの親、篠ノ之束の妹で私と一夏兄の幼馴染だ。小さい頃から一緒に剣道をしていた奴だ、私は余り箒は好きじゃない。此奴は怒ったら何してくるか分からない奴だからな、私の場合は真剣を振り回してきた事があるが当時の一夏兄の必殺技である殺人チョップで撃沈された
「何か余計な事を言わなかったか？」
「別に何も」
　此奴ニュータイプか？私の思考を読むとは
「ちょっとよろしくて？」
「ん？」
「まぁ！　何ですのそのお返事は!?　この私が声を掛けた事すら光栄に思っていただき

たい程なのですから、それ相応の反応があるのではなくて？」
　私と箒が話していると金髪の外国人が話しかけて来た。何だ此奴は、いきなり初対面の相手に話しかけておいてその態度は
「それで、お前は誰だ？」
「っ！知らない!?このセシリア・オルコットを!?イギリスの代表候補生のこの私を!?」
　私の机を叩くんじゃない、教科書が落ちるだろう
「それで、何の用だ？オルコット」
「あの〝自称世界最強〟男の妹と聞いてどんな人かと思っていましたが期待外れでしたわ」
「自称世界最強？だと、どういう事だ？」
「男のくせに神聖なＩＳで世界最強になるなんてありえませんわ、最強に相応しいのは女の方ですわ。それぐらい女である貴女には分からなくて？」
　此奴は女尊男卑の社会に影響を受けているな、それに一夏兄が世界最強なのは本当の事だ自称じゃない。此奴は世界最強になった一夏兄を男だから侮辱しているのか
「私は優しいですから、貴方の様な方でもＩＳについて学びたいと泣いて頼むのでしたら、お教えして差し上げても良くてよ？」
「断る、貴様の様な他人を見下す人間から教えてもらおうと思っていない」

「千冬の言う通りだ、いきなり話しかけておいて一夏さんの侮辱する様な貴様に誰がついて行く？」
「なっ!?何ですって!!」
するとチャイム二時間目の始まりのチャイムがなり他の生徒達は席についていく
「くっ！また後で来ますわ！」
オルコットは私達に指を向けてそう言うとその場を去る
「二度と来るなドリル女」
「そうだクロワッサン」
箒も自分の席に着いた、面倒な事になったな

そして二時間目が始まり教室に入って来た山田先生と一夏兄。一夏兄は教卓に立つ

と二時間目の話をする
「では、２時限目はＩＳの各種武装についてだが…その前にこのクラスのクラス代表を決めようと思う。クラス代表はその名の通りクラスの代表者だ、各種委員会の集まりや会議、その他にも今度の学年別クラス代表対抗リーグに参加する事になる。誰か、立候補でも推薦でも構わん、居ないか？」
　クラス代表かめんどくさいものだな、私は見せ物になるつもりわない。誰か他の奴にしてもらう
「はい！織斑さんを推薦します！」
「あ、そうだね。折角の見世物を使わない手は無い！」
「賛成！」
　ほう、言った傍から見せ物かいい度胸だ、箒木刀を出せ今すぐ此奴らを始末してやる
（私はド○えもんか!?）
　お前はいつも怒ると何処からか木刀を出すだろう
「なら織斑でいいか？いないなら織斑になるが」
「織斑先生、私はやりたくないのだが」
「推薦された以上、拒否権はお前にはない。それに生徒に殺気を放とうとしたお前を私が許すとでも？」

ばれていた！くっ！流石私の兄だ、やる！

「納得いきませんわ!!」

すると後ろからあのドリル女が今にも手袋を投げてきそうな表所で一夏兄を見ていた

「自称世界最強の妹だという物珍しさでクラスの上に立たせるなど、冗談じゃありませんわ！　そもそも、文化としても後進的な極東の島国で暮らすこと自体苦痛ですのに、私に1年間屈辱の生活をしろと仰るんですの!?」

ドリル女は自分の机を叩いて一夏兄をそう言う、此奴自分が国の代表として来ているのを忘れているのか？すると今度は一夏兄に指を向けて言う

「それに下等な男が私の教師だという事自体が苦痛ですわ！ＩＳに乗れるだけであって世界最強を語っている男が！」

「オルコットさん！織斑先生に対して何ですか！その態度は！言いすぎですよ！」

山田先生も怒った表所でオルコットに怒鳴る、最初は迷い込んだ中学生かと思っていたが先生だな

「それに世界最強と名乗っているのは自分が目立ちたいだけに決まってますわ！その眼帯だって歴戦を潜り抜けて来たという設定なのでしょ！」

此奴・・・今何て言った？

「織斑さんもかわいそうですわね、こんな男の妹だけってだけでも苦痛だと思っている違い有りませんわ、男が強かった事など所詮昔の話ですわ！」

ガタンッ!!!

「ち、千冬？」

「・・・・貴様、今何て言った？」

我慢が限界だった、此処まで一夏兄を侮辱されて黙っていられるか。

「あら織斑さん、どうかしましたの？そんな怖い顔をして」

「ッ!!!」

私はオルコットに近づき胸倉を掴むと後ろの壁に押し付ける

「なっ！何ですの!?」

「貴様に・・・・貴様に一夏兄の何を知っているッ！・・・・一夏兄の妹だからってだけで苦痛だと？・・・ふざけるなッ!!!!」

「ひっ!?」

「貴様に！・・貴様に一夏兄の何がわかるッ!!。一夏兄は私を守る為にＩＳに乗って傷ついて・・・そして右目を失ったんだ!!何も知らない貴様が一夏兄の事を知った口を言うなァァァァァッ!!!」

私は右手を拳にしてオルコットを殴ろうとする。当然だ此奴がいけなんだ、何も知ら

ない此奴が一夏兄を侮辱して見下して、そして一夏兄の傷を設定だと決めつける此奴がいけないんだッ!!
「そこまでだ。織斑」
「ッ!?」
　私の後ろに一夏兄が私の手を掴んで立っていた。私は一夏兄の方を見て言う
「何故止める！一夏兄は侮辱されたんだぞ！今まで頑張って来た事が全部偽りの真実に塗り替えられそうになってるんだぞッ！それなのに一夏兄はッ！いたっ!!」
「織斑先生だ、馬鹿者。それと教師にため口で喋るとはいい度胸だ」
　いつの間にか手に持っていた出席簿で私の頭を叩いた、くそッ！痛い凄く！私とオルコットは元の位置に戻ると一夏兄はオルコットに聞く
「オルコット、そんなに私の事が気に入らないか？」
「当然ですわ」
「――――――なら、私と模擬戦をしないか？」
「「「「「っ!?」」」」」
「お、織斑先生!?」
「何だと？」
　模擬戦、だと？一夏兄とオルコットが？

「・・・・思い上がらないでくださいまし、男の分際で!!」
オルコットは更に顔を歪めて一夏兄を見る。だが一夏兄は無表情でオルコットを見ている
「そんなに私の実力が疑わしいのなら、直接、模擬戦をした方が早い。それに」
「織斑（妹）が私の為に怒ってくれたんだ、それに応えるのは兄である。私の役目だ」
「一夏兄・・・・／／／／／」
一夏兄は少し優しい顔をして私をみる。一夏兄・・・・やっぱり私は一夏兄の事・・・
バシィィンッ!!
「織斑先生だと言ったら何度わかる?」
「ッ～～～～～～!!」
また出席簿で私の頭を!
「ですが、彼方には今専用機は無いではありませんか。専用機を持っている私とどう戦うつもりで?」
「誰が専用機を持っていないと言った?」
「・・・・ッ!まさかその指輪は!?」
指輪? 私は一夏兄の指を見る、一夏兄の指には葵い指輪がはめられていた。一夏兄はその指輪をクラス全員に見える様に見せる

「一つ言っておくがハンデはつけてやる。流石に自分の生徒にトラウマを植え付けたくないのでな」
「馬鹿にしてっ！ハンデなど入りませんわ！この私セシリア・オルコットがブルーティアーズと共に彼方を倒しますわ！」
　オルコットは指をビシッ！と一夏兄に向けて言う。一夏兄は頭を抱えやれやれといった表所をする
「山田先生、確か第三アリーナは開いていたかな？」
「今は三年生が使用していますが、もしかして本当にやるんですか？」
「出来るだけ問題は早めに片付けたい。それに何故か私がアリーナに入ると皆観客席に着くからな」
「それは織斑先生を見たいだけなんですよ・・・・ボソっ」
「ん？何か言ったか？」
「い、いえ！何でもありません！」
　山田先生は顔を赤くして敬礼する。やっぱり山田先生め一夏兄の事をっ!!
「それと、織斑、お前もオルコットと模擬戦をついでにやれ」
「え？」
「言うのが遅れたが束が面倒な物を送ってきてな、それをお前に与える事になっている」

「その面倒な物をって何ですか?」
一夏兄は『はぁ～』と言った感じで私を見る
「専用機だ、お前専用のな」
「「「「せ、専用機!?」」」」」
「専用機?何故私に?」
「さぁな」
一夏兄は『後で殺しに行く』と小さな声で怖い顔をする。束さん頑張れ
「さぁ、行くぞオルコット。今からはお前に特別授業を教えてやる」
「いいですわ!どうやら織斑さんにも専用機が来るみたいですし、一石二鳥ですわ」
一夏兄はオルコットを連れて教室を出ていった。唖然とした教室は二人が出ていった後すぐに思考が戻る
「い、一夏様の・・・戦い」
「一夏様の勇士が見れるって事だよね!?」
「私見に行ってくる!」
「あ～!私も～!」
クラスの女子達は次々と第三アリーナの方へ向かって行く。ま、まて!私も!
「み、皆さん!せ、席についてください～～～～～!」

山田先生はおどおどしながら皆を追いかけて行った。ますます小学生みたいだな

「学級崩壊だな、これは」

「そうだな、だが一夏兄の戦いを見てみたい。あれ以来どれくらい強くなったのかを」

私と箒も第三アリーナに向かう為教室を後にした

そして学園に葵い天使が降臨する瞬間を私達は目にすることになる

第3話　天使降臨

俺は第三アリーナを借りる為、第三アリーナに向かっていた。

「授業中失礼する」

「お、織斑先生!?」

「「「「「きゃーーーーーーー!!!!!!」」」」」

またか、何でいつも俺が来ると女子達は悲鳴の様な歓声を上げるんだ？

「一夏様！今日はどの様なご用件ですか!?」

「一夏様！私と今日食事をしませんか！」

「先生！私！先生の為なら!!」

何故そんなに俺が来るとお前達は興奮するんだ？それと貴様ＩＳスーツを脱ごうとするんじゃない

「いや、今日は少し第三アリーナを貸していただけないかと思いまして」

「此処をですか？何故？」

「朝からトラブルが起きましてね、それでです」

「わかりました。全員！今日の授業は織斑先生の模擬戦を見学しましょう！皆さんに

とって学ぶことがあるかもしれません！」
「「「「「「おぉーーーーーーー!!!!!!」」」」」
元気がいいな、全く。最近のガキは
「では、我々は観客席の方へ移動しますね？」
「お願いします。すみません迷惑かけてしまい」
「いえいえ、生徒達にとってはいい事ですから、フフフ♪」
三年生と担任はその場を素早く去って行き観客席の方へ向かって行った、さて
「オルコット、お前は向こうのピッドでＩＳを調整出来たら先に出ていろ」
「いわれなくても」
オルコットは相手を見下す顔をしながら向こう側のピッドへ向かって行った
「俺も行くか・・・・・」
俺は反対方向のピッドへ足を動かし向かった

そしてピッドに着くとそこには千冬と篠ノ乃、そして山田先生が立っていた
「山田先生？何故此処に？」
「生徒の皆さんが織斑先生の模擬戦を見たいと此処にやってきて私もそれで」
「そうか、全くこれだからガキは疲れる」
「あはは・・・」
山田先生は苦笑いしながら俺にそう言う、すると俺の隣に千冬と篠ノ乃が来る
「一夏兄」
「一夏さん」
「何だ？お前達、他の奴らと一緒に観客席に行かなかったのか？」
「いえ、私は・・・その・・・／／／／」
「私は一夏兄のＩＳがどんな物なのかを見てみたかっただけだ」
「そう言えば織斑先生、私、初めて聞きましたよ？織斑先生が専用機を持ってること」
まぁ、確かに言うのは初めてだったな
「一夏兄、もしかして一夏兄が前使っていたあの暮桜か？」
「いや、今は違う専用機だ」

「そうか」
　千冬はそれを聞くと下がる、篠ノ乃も同じように下がらせる。
「来い、アメイジングエクシア」
　キュイイイイイイイイン――――――
　俺は指輪から放出された緑色の粒子の光に包まれる。全身が装甲で覆われており露出が一つもなく蒼をメインとした色で白のツートン。右腕にはライフルと実体剣が合体した武器に左腕には白をメインとしたシールド。背中には白いコーン型のスラスターが装備されており、首元には葵いブレードアンテナが二本付いており、フェイスマスクには緑色のツインアイに額には葵いＶ字アンテナがついている。そして機体全体を包むマントを纏う
「ぜ、全身装甲？《フルスキン》」
「今ままで見た事がないタイプですね」
　篠ノ乃と山田先生はアメイジングエクシアを纏った俺を見ておどおどしていると、俺の隣に千冬が近づいてくる
「これが・・・一夏兄のＩＳ」
『あぁ』
　千冬は『ふっ』と鼻で笑うとフェイスマスクで顔を覆われた俺を見る

「必ず勝って来い、一夏兄」
『お前に言われる程俺は弱くないさ』
俺は千冬にそう言う笑顔を見せ俺から離れる。
《リニアボルテージ上昇、射出タイミングを織斑一夏に譲渡します》
アリーナの司令室から山田先生がアナウンスを流す。俺はカタパルトに足を乗せ腰を少し曲げる
『織斑一夏、アメイジングエクシア、出るッ!!』
俺はそれと当時にカタパルトから勢いよく外へ出た

「あ!出て来たよ!」
「あれが織斑先生のＩＳ!」
「かっこいい!!」
「あの光は何なんだろう?」

「でも、綺麗！」
　空を飛んでいると観客席には俺のクラスの生徒達と先ほどの三年生が俺を見て歓声を上げていた
『あれか・・・・』
　俺の前にはオルコットが纏ったイギリスの第三世代型ＩＳブルーティアーズが宙に立っていた
「来ましたわね」
『年上には敬語を使え、オルコット』
　まだＧＮ粒子は放出していないから、通信は出来ている様だな、オルコットは俺に上から目線でそう言ってくる
「全身装甲のＩＳですか、ですが私の勝利は揺るがないですわ（全身装甲からして防御に特化した機体、なら私のブルーティアーズの敵ではありませんわ）」
『・・・・・・・・』
――――――警告！　敵ＩＳ　射撃体制に移行　トリガー確認　初弾エネルギー装填！――――――

射撃体制に入ったか、まぁいい
『戯言はいい、さっさと来い』
「なら」
「お別れですわねっ！」
オルコットはスターライトＭｋ―Ⅲを俺に向けてレーザーを放って来た。だが俺はそれを少しだけ体をずらして避ける。狙いがあまいな、オルコットは俺が初弾を避けたことに驚いていた
「ま、まぐれですわ！」
オルコットは再びスターライトＭｋ―Ⅲの銃口を俺に向けるが
バシュンッ！
「きゃッ！」
『・・・・・・・・』
俺はアメイジングＧＮソードをライフルモードにしスターライトＭｋ―Ⅲを破壊する
『この程度か？』
「くっ！男のくせに！行きなさい！ブルーティアーズッ!!」

オルコットは俺から距離を大分取ると背中の非固定ユニットから四機のビットが放たれ俺へと向かってくる
「貰いましたわ！」
俺は地上に着地しティアーズの攻撃タイミングを読み取り、後ろへバク天しティアーズの攻撃をかわす。その間に左手の指の間に三本のＧＮビームダガーを展開しまず近いティアーズ三機にＧＮビームダガーを投稿する。ダガーはティアーズ三機に突き刺さり爆発する
『狙い打つ』
アメイジングＧＮライフルから粒子ビームを放ち最後に残っていたティアーズを破壊する
「なっ!?」
『終わらせるぞ、オルコット』
俺はイグニッションブーストでオルコットの前へと接近する
「残念ですが、ブルーティアーズは四機だけじゃありませんわ！」
オルコットは両腰からミサイルビットの砲口を向けてミサイルを放つ
『・・・・・・・』
俺はアメイジングＧＮソードをソードモードにし向かってきたミサイルをＧＮソー

ドで横へ振るう。するとミサイルは綺麗に真っ二つに斬り分けられ、俺の後ろへ行き爆発した
「そ、そんなっ!?」
『驚いている暇はないぞ?』
まずアメイジングソードでオルコットの右腕を斬り落とし、その次に左足を斬りおとす。そして最後にアメイジングＧＮソード上へ上げる
「い、インターセｐ」

ザシィィィンッ!!

俺はオルコットが展開して短剣の刃を斬り落とした、短剣はまるでチーズをナイフで切った様になっさていた。それを見たオルコットの顔は青かった
「ひっ!?」
『・・・・・・ッ!!』
俺はアメイジングＧＮソードにＧＮ粒子を纏わせるとアメイジングＧＮソードの刃は緑色の光の剣の様に輝きだす。そして光を纏ったアメイジングＧＮソードをオルコットへ振り下ろした

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!!!」

アメイジングＧＮソードで装甲を斬られたオルコットはその勢いで地上へと吹き飛ばされ、激突した。そしてＩＳが解除されオルコットを見下げてオルコットへ通信を入れる

『オルコット、お前の敗因は俺を弱いと決めつけていた事と俺がお前に敵わないと思いこんでいた事、そして――――――自分が兵器を扱っているという自覚がない事だ』

「くっ！・・・・・」

『お前が扱っているのは人の命を絶つ武器だ、それを扱っている以上、力という物をもっと理解しろ。ＩＳはスポーツじゃない、人を殺す為の兵器だ。わかったな？』

「うっ・・・・・・・」ドサッ

オルコットは気絶しそれを確認した山田先生がアナウンスを流す

《試合終了、勝者　織斑一夏！》

「「「「「「きゃーーーーーーー!!!!!」」」」」

その瞬間、観客席から大きな歓声が上がった。

私は一夏兄の戦いに目を奪われていた。一度も攻撃を喰らわずオルコットを倒した一夏兄に

「す、凄い・・・・」

「ほぼ無傷でオルコットを・・・・」

箒も一夏兄の戦いに目を奪われていた、これが一夏兄の実力なのか？

「織斑先生、ちゃんと手加減してくれたみたいですね」

「え!?」

「山田先生！一夏兄が手加減していたって！どういう事ですか？」

「織斑先生は子供相手に本気でやる様な人じゃありません。一度あの人と戦った時も織

斑先生は手加減したと言っていました」
　じゃあ一夏兄は今まで本気で戦った事が無いというのか？
「遠いな・・・・一夏兄の背中は――――――まだ遠い」
　モニターには背中から綺麗な緑色の光の粒子を放出し全身を覆うマントを羽織った、その姿は翼はないが誰もが見てもその姿は天使だった

　後に学園の新聞部がこの模擬戦を取り上げ『天使降臨!!!』と大きく学園の掲示板に張られたという

第４話　部屋割り

一夏兄とオルコットの模擬戦の後、私との模擬戦は三日後に行われると言われた、どうやらＩＳ自体の整備にまだ時間が掛るとか
「それにしても、やっぱり一夏さんは凄かったな、千冬」
「あぁ・・・・」
「どうかしたのか？さっきからそんな調子だが？」
私と箒は今日の模擬戦の事を話ながら寮へ向かっていた
「いや、一夏兄が本気がどのくらいなのか、さっきから気になっていてな」
「だが、お前は強くなるのだろう？一夏さんの隣に立って」
「勿論そのつもりだ。けど」
「あぁ～もッ！初日からそんなに弱気になってどうする!?」
箒は私の肩を掴み私の顔を覗いてくる。痛いぞ箒
「お前は必ず強くなれる！何だってお前は一夏さんの妹だ、だから自身を持て！」
「・・・・相変わらず、熱血馬鹿だな。お前は」
「なっ!?馬鹿だと!?千冬！」

「ははっ」
　私は此奴は好きじゃないが、此奴のこういう所は好きだ。自身を持てない奴に自信を持たせる所が此奴のいいところだ。私は苦笑いしながら箒と共に寮へ向かって行った

「え～と００１号室は――――――此処か、随分豪華そうなドアだな」
　私は途中で箒と別れ、今自分の部屋となるドアの前に立っているのだが、他の寮の部屋のドアより随分と豪華そうなドアの前に立っているのだが
「間違いないしな、取り敢えず鍵も貰っているし入るか」
　ガチャ
「おぉ～！凄いなこれは～！」
　部屋に入ると中は高級ホテルの様な部屋だった、ベットが二つあり起動したままにしたパソコンが机の上に置いてあった、窓の外は夕日の光で海が綺麗に映っていた

「同居人はシャワーか？パソコンが開いていると言う事は？」
　すると、後のシャワー室から誰かが出て来たな。同居人の奴か？私は後ろを振り向くとそこに居たのは
「・・・・・・織斑？」
「い、一夏兄・・・・？」
　そこに居たのは一夏兄だった。何故一夏兄が此処に？ていうか！
「・・・・・・・・／／／／／／」じー
「・・・・・・織斑、何処を見ている」
　い、一夏兄の・・・・は、裸・・・・／／／／／／。腰にバスタオルを巻いた姿の一夏兄を見たのは初めてだ！
「仕方ない、少し待っていろ。着替えてくる」
「まっ待ってくれ一夏兄!!」
　私は条件反射で一夏兄の腕を掴む。い、一夏兄の・・・は、肌の感触が・・・はぁはぁ・・・
「織斑、着替えられないのだが」
「そ、その・・・もう少しだけ、その・・・こ、このまま・・・／／／／／」
「風邪をひくのだが？」
「・・・・わ、わかった」

一夏兄の腕を放すと一夏兄はそのままシャワー室へ入って行った。もう少し見たかった一夏兄の裸を・・だが
「ふふふっ。感触はしっかり覚えたぞ・・・・ククっ♪」

ドゴオオオオオオオオッ!!!

その瞬間。私は頭に強い衝撃を受け、気絶した

俺は変態と化した千冬をチョップで気絶させると、部屋着に着替えて千冬をベットに寝かせた
「十蔵さんだな、これを仕組んだのは」
頭の中で十蔵さんが笑顔でピースをしているイメージが浮かび上がる、絶対あの人し

かいない。因みに十蔵とは、ＩＳ学園の用務員で「学園内の良心」といわれている壮年の男性だ。実態はＩＳ学園の実務関係を取り仕切っている事実上の運営者なのだが表向きは彼の妻がＩＳ学園の学園長だ

「・・・・・・・・・」

俺は気絶している千冬の隣に腰を下ろし、千冬の頭を撫でる。こんなにも大きくなったんだな、前は泣き虫だった千冬がいつの間にか泣き虫じゃなくなっていたな

「まぁ、今日泣いていたがな」

それにしても此奴。まだ１６のガキのくせに何故胸が此処まで大きくなっている？篠ノ之もそうが何故今時の小娘は皆胸が大きいんだ？

「まずい、俺まで変態になってしまう」

流石に変態にはなりたくない。既にあの馬鹿は（束）も変態だったか、中学生だった頃よく俺の下着を盗んだり、風呂に侵入していたな。まっ直ぐに無力化したがな

「ん・・・・・？」

「起きたか、千冬」

どうやら気がついた様だな、俺のチョップを受けた奴は大抵数日寝ているのだが千冬や篠ノ之の場合は直ぐに目を覚ますからな

「一夏兄、私は何をしていたんだ？部屋に入って来た所までは覚えているのだが、それに

頭がものすごく痛いのだが」
「お前は壁に頭をぶつけて倒れたのさ」
「そうか、何か忘れている様な」
「気のせいだ」
　まさかさっきの事を覚えていないとは、まぁそれはいい事だ
「所で一夏兄、此処は一夏兄の部屋なのか？」
「あぁ。此処は寮長室だ」
「やっぱり私が一夏兄の妹だからか？」
「いや、これは仕組まれたものだと俺は考えている」
「そ、そうか・・・・仕組まれていたか・・・一夏兄と二人っきり・・・／／／／／／／ボソっ」
　顔を赤くして何かこそこそしているが、まぁいいか
「それよりも。まず、お前に聞きたい事がある」
「何だ？」
「お前。俺が居ない間ちゃんと部屋は綺麗にしたんだろうな？」
「ギクッ！」
「・・・・・してないんだな？」

「・・・・・・・・・」ぷるぷる
「・・・・・・・・・」

ゴスゥゥゥゥゥンッ!!

「・・・・・・」シューーーーー
「馬鹿者が、お前はいつになったら家事が出来るようになる?」
俺は千冬にげんこつをお見舞いした。千冬はうつぶせに倒れ頭から煙を出している。
何故性格は変わっているのに家事は全く変わってないんだ、此奴は
「そ、そう言われても私は」
「言い訳はいい」
千冬は涙目で頭を押さえながら俺を見てくる
「千冬。もうすぐ風呂の時間だ、お前は早く大浴場へ行って来い」
「あっそうだったな。忘れていた」
千冬はそう言うと着替えとタオルを持って大浴場へ行こうとする
「一夏兄も行くか?」
「そうかそうか、お前は俺を性犯罪者にしたい様だな。よし」

「冗談だ！冗談！じ、じゃあ！行ってきます！」
千冬は俺の拳を見て慌てて出ていった。
「・・・・・さて」
俺は机に移動し椅子に座り、パソコンを操作する
「白式・・か・・・・」
パソコンの画面には千冬の専用機となるＩＳ白式のデータが映し出されていた
「束・・・・お前は一体・・・・何を考えている」
白式の武器は俺が世界大会で使っていた雪片二型が装備されていた。そして当然ワンオフオブアビリティー、零落白夜も備わっていた
「エクシア、白騎士、ダークマター、黒騎士・・・・まさかな」
すっかり夜になった空を見つめながら、俺は再び画面に視線を移した

そしてその頃、とあるＩＳ研究所

「撃て！撃てェェェェェェ!!」

「悪魔めっ!!!」

研究所を警備していたＩＳ部隊が目の前の不気味なＩＳにアサルトライフルを放っていた。だが全て装甲によって弾かれる

『あら、全然ね』

そのＩＳは全身装甲で赤と黒のツートンでつま先がとがっており、背中には翼をイメージしたバックパックを装備しておりバックパックからは機体に色と違い美しい緑色の粒子を放出していた。両手には外側の刃がオレンジの半透明になっている実体剣に通常の実体剣を両手に持っていた。そしてその形状はアメイジングエクシアと殆ど同じで顔で赤いフェイスマスクにオレンジ色のツインアイを持ち、そして赤いＶ字アンテナを持っていた

「貴様らの目的は何だ！亡国機業！」
『此処にあるＩＳ、インフィニット・ストラトスを・・・・・頂くわ』
「「なっ!?」」
　赤いエクシアは両手に持った剣で残ったＩＳ部隊に斬りかかって行く
「くそがーーーーー!!」
「馬鹿！行くな！」
　一機のラファール・リヴァイブが赤いＩＳにブレードで斬りかかって行き、ブレードと剣がぶつかり合う。だが
「なっ!?ぶ、ブレードが!?」
「こ、凍っていく!?」
　右手に持っていた氷の剣ブライニクルブレイドがラファール・リヴァイブのブレードに触れた途端、ブレードが凍って行きやがてブレード全体が氷で包まれてしまった。当然ブレードを持っていた両手も凍ってしまった。ブライニクルブレイドは触れた物を問答無用で凍らせてしまう効果を持つ剣
『ふふ♪』
　今度はオレンジ色の半透明の刃を持つ炎の剣プロミネンスブレイドから炎が現れ刃に纏う、炎を纏ったプロミネンスブレイドをラファール・リヴァイブへ振るい、ラファー

ル・リヴァイブの装甲を切り裂いた
「がぁぁぁぁぁぁぁ!!」
装甲を切り裂かれたラファール・リヴァイブは後ろに居る中へと吹き飛んでいき仲間とぶつかり一緒に建物へ激突する
『・・・・・・・・』
赤いエクシアはオレンジ色のツインアイを光らせると後ろから新たに二機のＩＳが現れる
「スコール、こっちは終わったぞ」
「終わったぜぇ、スコール」
『えぇ、ご苦労様。こっちも今終わった所よ』
赤いエクシアを纏ったスコールと言う女性は新たに現れた二機にそう言うと、施設に視線を移す
『さて、早く行きましょう、エム、オータム』
「了解」
「あぁ」
エムとオータムと言われた二人は施設に部へと侵入していった。スコールは空へ飛ぶと満月をバックにＧＮ粒子を放出し続ける

『遂にアメイジングエクシアが起動した、そして白騎士もいづれ・・・・・・』
スコールは手にペンダントを量子展開するとペンダントのふたを開く
『彼方と再会するのも、近いかもしれないわね――――――一夏』
そのペンダントには一夏と自分が仲良く抱き着き合っている写真が入っていた。それを見てスコールは顔を赤くし微笑みを浮かべる

その後、ＩＳコアが奪われ施設は殆ど壊滅したと政府に伝わった。そしてその施設を警備していたＩＳパイロット達は口をそろえてこう言ったという

――――天使の姿をした赤い悪魔と――――――

その頃、千冬は

「うわっ！織斑さん、胸大きい！」

「きゃ！さ、触るな！私の胸を触っていいのは一夏兄だけだ!!」

「織斑先生も入ってくればいいのに～」

「「「「ね～～～～～～～～」」」」

「クシュっ！・・・・誰か俺の噂をしているな」

一夏は部屋でそんな事いいながらご飯を作っていた

第５話　白い騎士

「なぁ、箒」
「何だ、千冬？」
「私にＩＳの事を教えてくれるという約束、どうなったんだ？」
「し、仕方ないだろう。お前のＩＳが届かなかったんだから」
「でも、基礎知識だけども教えられるはずだったと思うのだが？」
「・・・・・・・」
「それに、この三日間。剣道だけしかしなかったのだが、お前は私に喧嘩を吹っ掛けているのか？」
「ち、違う！そ、それは！」
「・・・・・・・」
　私は今箒と共に第三アリーナのカタパルトで専用機が届くのを待っている。私はＩＳの事が何一つ分からなかった。一応参考書に目を通してみたのだが、アクティブなんちゃらとか広域うんたら、など私にはちんぷんかんぷんだった。その時箒が私にＩＳの事を教えてくれると言ってきたのでその話にのり私は勉強しようとしたのだが

「訓練機などを使って練習することも出来たと思うのだが、まさか貴様。ただ剣道をしたかっただけというくだらない事を考えていただけだと思ってはいないだろうなぁ？」
「そ、そんな事・・・だ、だがＩＳに乗る前にまず手が鈍ってないかを試すのは当たり前だ！」
「全敗だったお前が言えることか？それに一度も私に勝てなかったお前が何上から目線で私にそう言えるんだ？」
「ぐはっ!!」
　箒は口から血を吐き床に倒れる。此奴は昔から何も変わってない、いつも竹刀で突っ込んでくるからそれをかわして私が叩きのめす。それの繰り返しをこの三日間でついやしてしまい、ＩＳの事を何一つ勉強出来なかった
「織斑さん！織斑さん！」
「あ、山田先生。お疲れ様です」
「お、お疲れ様です！き、来ましたよ！織斑さんの専用ＩＳ！」
　等々きたか。すると一夏兄も山田先生が入って来た扉から腕を組んで入ってくる
「織斑、時間がない。フォーマットとフィッティングは本番でやれ」
「え？」
「早くしろ！」

「サー、イエッサー！」
　無茶苦茶だぞ一夏兄！私は殆どＩＳの事勉強出来なかったんだぞ！、一夏兄と山田先生は私と箒を置いて管制室へ向かって行った
「これが・・・・私のＩＳ・・・・」
　私の前に置かれた白いＩＳだった、何者にも染められない白。私は専用機、白式に触れる
（なんだ・・・・・この懐かしい感覚は？）
　私はそんな感じをしながら白式に乗り込む、腕や足が完全に装着され私はＩＳ白式を纏った
『織斑、準備はいいな？』
「大丈夫だ、行ける」
『そうか・・』
　白式に管制室から通信が入り一夏兄が映る、私は一夏兄に大丈夫だというと一夏兄は鼻で笑うと通信を切る
「ち、千冬！」
「何だ？」
「ま、負けるなよ！」

「負けたらお前を殺しに来るから安心しろ」
「え!?」
私はカタパルトに乗り発進準備をする。すると山田先生がアナウンスを流す
《リニアボルテージ上昇、射出タイミングを織斑千冬に譲渡します!》
「わかりました。白式、織斑千冬、参る!!」
私はカタパルトによって生まれた推力と自身の加速力でアリーナへと勢いよく出て行った。すると目の前には既にＩＳを展開しているオルコットが居た

「お久しぶりですわね、織斑さん」
「どうした?この前まで人を見下していた奴が随分と優しくなっているじゃないか」
「・・・・・織斑さん。この前の貴女への無礼と織斑先生へのご無礼をお許しください。本当に申し訳ありませんでした」

オルコットは謝罪の言葉を私に言うと頭を下げる。あいつ・・・・

「いち・・・織斑先生と戦って私が間違っていたとわかりましたわ・・・・」

「・・・・・」

「私の母はとても強い人でした、その代り父はとても弱かった人でした。いつもいつもおどおどして母の機嫌を伺っているだけの人でした、そしてある日二人は私と莫大な財産を残して死にましたわ」

それで男を・・・・一夏兄の事を見下して

「でも、私は織斑先生に負けて初めて知りました。男は弱くないと、ただＩＳに乗れないだけで決して弱い存在なんかじゃないと」

オルコットはそう言うと顔が赤くなってきた、それを見た私はある事に気付いた

「ま、まさかお前・・・・一夏兄に!?」

「えぇ、私は織斑先生の事を・・・・好きになりましたわ・・・／／／／／／」

やっぱりかアアアアアアアアアアアアアア!!!!

「くそっ!どうして一夏兄は!こんなにも女に好かれるんだ!!」

それを見ていた一夏と山田先生と箒は

「あいつは何を言ってるんだ?」

「はぁ～」
「一夏さんの唐変木は何年たっても治らないな」
「ん？」

オルコットはスターライトＭｋ―Ⅲをを千冬に向けてこう宣言する
「織斑千冬さん！私は一夏様の心を撃ちぬいてみせますわ!!」
「ふざけるなぁぁ!!一夏兄は私の物だぁぁぁ!!誰にも渡さァァァァァァァんッ!!」
私はオルコットに向かって行く。ふざけるな！貴様の様な金持ちでお嬢様である貴様なんぞに一夏兄を渡してたまるかァァァァァァァ!!
「さぁ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」
「生憎、私は踊る気はないッ！」
と言ってもオルコットの狙いは正確だ、オルコットはライフルを構えながら白式の装甲にレーザーを当ててていく
「くそっ！私が白式の動きに着いてこれていないっ！」
「行きなさい！ティアーズ！」
オルコットは非固定ユニットから一夏兄に使っていたビットを射出しだした

「っ！あれは一夏兄に使っていた奴か！」
　私はビットをかわすがまた違うビットのレーザーが直撃しシールドエネルギーが減る
「装備、装備は！」
　私は装備を取り出そうと武装を検索すると一本の実体剣のブレードが表示された
「近接ブレード、これだけか！」
　しかし剣なら私にとって好都合だ。私はブレードを量子展開し両手で持つ
「遠距離型のブルーティアーズに近接ブレード一本とは、舐められたものですわね！」
「だが」
　私はビット一機をブレードで破壊しオルコットを見る。オルコットはビットを破壊した私を見て驚いていた
「あの時の戦いを見て分かったことがある。この兵器は展開している間はビットの制御に集中しなければならない。そうしなければビットを制御できない、そうなのだろう？」
「まさか、あの短時間でブルーティアーズの弱点を――――」
「これでも私は織斑先生の妹だ、これぐらいは当然だ！」
　私はブレードを持ってセシリアへ接近していった。この勝負絶対に勝つ！

「すごいですねぇ～織斑さん」
「千冬、凄いな」
管制室で千冬の戦闘技術を見て二人は驚いていた、だが一夏だけは違った
「あいつ、浮かれているな」
「え？」
「織斑の左手が開いたり閉めたりしているだろう？あれは昔からの癖でな、あれが出ると大抵のミスを犯す。癖を直せと言っているのに全くあいつは」
そんな一夏を見て山田先生は苦笑いする
「織斑先生って妹さん想いなんですね？」
「からかっているのか？山田先生」
「いえ、織斑さんも、こんなにも優しくてかっこいいお兄さんを持って嬉しいと思っていますよ？」
山田先生は母親の様な顔をして一夏にそう言うと一夏は苦笑いしてモニターに映る

千冬を見る

「私は、ただあいつを守れればそれでいいんです・・・それ以上は何も望むつもりはないさ」

「よし！このまま！」

「くっ！」

　私はオルコットのＩＳの装甲を切り裂きながらアリーナの中を駆け巡る。そしてとどめを刺そうとオルコットに再度接近しようとする。だがオルコットは何かを隠し持っている様な顔をして私を見る

「これで終わりだ！オルコット！」

「あら、お忘れかしら、織斑さん」
腰に装備した砲口を私に向ける
「ブルーティアーズは六機ありますのよ!!」
その砲口から二つのミサイルが放たれた。それを見た私は思い出した
「しまった!ミサイルの事を忘れていた!くっ!」
私はミサイルから逃げようとオルコットから離れるがミサイルは追いかけてくる。
そして
「はっ!?」

ドゴォォォォォォォォォォンッ!!!!!

ミサイルは私に直撃し爆炎の中に包まれた

「千冬!」
篠ノ之はミサイルに直撃し爆発した千冬を見て叫ぶ。篠ノ之、お前が心配することはない
「機体に救われたな、馬鹿者め」
私は鼻で笑うとモニターに新たな姿に変わった白式の姿が映っていた

私は負けたと思っていたのだが気がつくと白式の姿が変わっていたのに気付いた
「これは・・一体」
「まさか、第一形態《ファースト・シフト》!?あ、あなた今まで初期設定のままで戦っていたんですの!?」
初期設定?ファースト・シフト?分からん。やっぱり私は説明書を読んで学ぶより体で感じて覚える方が私にとってやりやすい

「ん？」
するとさっきまで持っていたブレードの形も変わっていた。この刀は・・もしかして
「雪片？雪片って一夏兄が使っていた、あの？」
そうか、束さんめ。
「私は、守る」
「ん？」
そうだ折角一夏兄の刀を受け継いだんだ、なら
「一夏兄の背中を守ってみせる。この雪片で、この白式で!!」
「っ!?」
私は一瞬でオルコットの前に雪片を持って来た。私は一夏兄を・・・・一夏兄の背中を、守る!!
「うおォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ!!!!!」
「い、インターセプター!!!!」
私は黄金の光を纏うとオルコットに斬りかかる。オルコットも短剣を展開し私に刺そうとしてくる。そして雪片と短剣がお互い体に斬られ、刺されるとブザーが鳴る
《試合終了、両者引き分け》

「引き分けか・・・・・」
「そのようですわね・・・・」
　どうやら相打ちだった様だ、勝つことは出来なかったが負けは次の勝負の糧にすればいい。いい経験になった。するとオルコットが
「今日は引き分けでしたが、次は私が勝てせて貰いますわ。織斑さん」
「それは私もだ。それよりも私の事は千冬で構わないぞ？」
「い、いいんですの？」
「構わないぞ、その代り私もお前の事をセシリアと呼ばせてもらう」
「ふふっ♪構いませんわ、織斑さん。いや、千冬さん。これからよろしくお願いしますわ」
「ふっ、一夏兄は渡さないがな。よろしくな？セシリア」
「はい！」
　私とオルコットはお互い握手を交わしクラス代表決定戦はこうして幕を閉じた

第6話　パーティーとセカンド

俺は自室でエクシアの新装備を設計していた、千冬はクラス代表のお祝いパーティに出ているため部屋に居るのは俺だけだ

「……トランザムシステムはまだ不安定のようだな、システムが完全に完成する間は――――」

俺は空間ディスプレイに蒼いコンテナの形をした大型支援装備が映し出された、その横には装備の変形後の姿が映っている

「『アメイジングＧＮアームズ』……これならエクシアの火力不足は十分に補えるな」

『織斑先生！今何処にいらっしゃいますか？』

すると山田先生が空間ディスプレイに通信してきた。俺はデータを横にずらし山田先生に返事をする

「山田先生か、どうかしましたか？」

『どうしたじゃありませんよ？織斑さん、織斑先生が来るのを待っているんですよ？』

「私は今忙しいんだが」

『ダメですよ！織斑先生！折角、織斑さんがクラス代表になったんですからお祝いして

あげませんと！』
「・・・・・わかった、今から向かう。織斑にそう伝えてください」
『わかりました、伝えておきますね？』
「頼みます」
山田先生はそう言うと通信を切る。俺は大きく背伸びをして、息を大きく吐く
「パーティーか、余り好きじゃないのだがな・・・・・仕方ない」
俺はエクシアのデータを仕舞うと部屋を出ていった。

私は今クラスの皆と共に食堂を貸切っていた、そして
「織斑さん！クラス代表就任おめでとう!!」
「「「「あめでとう!!!」」」」
パパパーン!!パパパーン!!

皆はクラッカーの線を一斉に引き火薬が鳴り、クラッカーの中身が私や隣にいる箒やセシリアの頭に乗っかる

「良かったな千冬」

「良くないわ、何故私なんだ」

私は頭に乗ったクラッカーを払いながら、箒にそう言う。そして何故私がクラス代表になったのかというと、それはセシリアとの模擬戦が終わり教室に戻ってからの話だ

『織斑。お前がクラス代表になれ、これは決定事項だ異論は認めん』

『何だそりゃあアアアアアアアアアアアアア!!!』

一夏兄は半場強制的に私をクラス代表に就任した!何故だ!何故セシリアじゃなくて私なんだと、一夏兄に言いたい。だが一夏兄は

『そうか、すまない。お前なら出来ると期待していたのだが、そうか。わかった・・・・』

『やりますっ!是非とも!クラス代表させて頂きます!!』

《引っかかったな、馬鹿め》ニヤリ

あの時の一夏兄の顔を最初は残念そうな顔をしていたが私がクラス代表を就任すると宣言した後直ぐに何処かの新世界の神になろうとした男と同じ顔をしたのを見て私は一夏兄にはめられたと気づいた

「おりむ～がんばってね～」
「本音か、あ、あぁ。頑張るよ・・・・」
「デザ～ト♪デザ～ト♪～」
　狐の着ぐるみを着た、のほほんとしたクラスメイトの布仏本音。通称のほほんさん。本音は涎を垂らしながら幸せそうな顔をしていると食堂にカメラを持った先輩が入って来た
「はいは～い、新聞部で～す！織斑千冬さんに取材をしに来ましたー！」
「取材？」
「えぇ！あの織斑先生の妹で入学初日に専用機を与えられた噂の女の子を！、あぁ、後私の名前は黛薫子、よろしくね？」
「は、はぁ・・・・」
　取り敢えず握手をして先輩を見る
「それじゃあ早速だけど質問いいかな？織斑さんはどうしてＩＳ学園に入学したのかな？」
・・・・・・・・・・
「それは、兄である織斑先生の隣に立つ為です」
「ほほぉ！兄、想いだね～！」

「私のたった一人の兄ですから、当然です」
「成程～、それじゃあ二つ目に、クラス代表になった気持ちを教えてくれないかな？」
「クラスの皆に迷惑を掛からない様にそして代表として全力を尽くすつもりです」
先輩は手帳にメモしながら私の話を正確に書いている
「それじゃあ、最後にキメ台詞を！」
「あの・・・それはちょっと」
すると
バシィィィィィ!!
「いたぁぁぁ!!」
「黛、何をしている？」
「「「「織斑先生!!」」」」
何!?一夏兄だと!?
「お、織斑先生・・・これはその～」
「私のクラスは許可を取ってパーティーを開いているのだが、貴様は私に許可を取ったかぁ？」
「す、すすすみませんでしたぁぁぁぁぁ!!!」
先輩は素早い速さで食堂から出ていった。成程、このパーティーには許可が必要だっ

たのか
「織斑先生～お菓子たべます～？」
「いや、いい。それよりも、織斑」
「はい？」
一夏兄はスーツのポケットから何かを取り出した。取り出したの小さな赤い箱だった
「昨年の誕生日に渡そうと思っていたのだが忙しかったのでな、渡すのを忘れていた」
「あ、ありがとう・・・／／／／／」
い、いいいいいい一夏兄からのプレゼント!?そ、そういえば昨年の誕生日一夏兄は来れなかったから弾達と一緒に私の誕生会をしたんだったな・・・・／／／／／／
「あ、開けていいのか？」
「構わん。だがゴミは散らかすなよ？」
「わっわかってる！」
私はプレゼントの紙を破いていき箱を開けると、中に入っていたのは鈴が付いた髪飾りだった
「か、髪飾りか？」
「あぁ、お前の好みが分からなかったからな。何かいいものが無いかと探していたら、そ

れを見つけた。」
「いいな～おりむ～」
「可愛いその髪飾り！」
「私も欲しいな～」
　確かに可愛いな、髪飾りか・・・似合うかな？
「千冬、取り敢えずつけてみたらどうだ？」
「そうですわ千冬さん。折角織斑先生がプレゼントしてくださったんですから」
「あ、あぁ・・・それじゃあ・・よいしょっと」
　私は左側の髪に髪飾りを付ける。すると皆「おぉ～」と声を上げた。ど、どうなんだろうか
「似合っているぞ、千冬」
「そうか？箒」
「千冬さん、よかったですわね！」
「あぁ・・・ど、どうだ？一夏兄」
「あぁ、似合っているぞ」
　一夏兄はふと微笑みながらそう言ってくる。
「あ～おりむ～照れてるぅ～！」

「っ！／／／／／」
「織斑さん可愛いィ～」
　くっ！貴様らにあの一夏兄の眩しい顔が見えてないからそう言えるんだ！
「さて、そろそろ時間が来ている。片づけを始めろ。・・・・山田先生、捕まえましたか？」
「は、はい、捕まえましたぁ～～～～」
「まさか、あの山田先生に捕まるなんて、不覚」
　すると途中から食堂から姿を消していた山田先生が逃走した黛先輩を縄で拘束して現れた。ていうかいつの間に指示していたんだ？
「さて、黛。一つ写真を頼みたいんだが、いいか？」
「こ、これじゃあ撮りたくても撮れませんよ～」
「・・・・・仕方ない、山田先生。拘束を解いてください」
「は、はい」
　山田先生は黛先輩の拘束を解く、先輩は背伸びをしながらカメラを持つ
「いたたた・・・さて、織斑先生も写りますよね？」
「あぁ、頼む。山田先生もご一緒に」
「い、いいんですか？」

「構いませんよ」
「じゃ、じゃあ遠慮なく」
「全員織斑の周りに集まれ」
皆、一斉に私の周りに集まり髪をと唱えたり身だしなみをきちんとし出す。一夏兄は私の隣に立ちネクタイをきちんと結ぶ
「それじゃあ～行きますよ～一＋一は？」
「「「「にーーーーー！」」」」
そしてカメラのシャッターが下りた

同時刻：ＩＳ学園前
「此処がＩＳ学園ねぇ～」
夜の学園の外にポストンバックを持ったツインテールの女子が立っていた。服はＩＳ学園の制服を着ており、緑色の目でＩＳ学園を見つめる

「千冬の奴、どれくらい強くなってるのかしら」
口を吊り上げまるで楽しそうな顔をしながらＩＳ学園へ入って行った

第7話　セカンド幼馴染

翌日。千冬と箒は一緒に学園へ登校し教室に着くと何故かクラスの女子たちが騒いでいた

「?、何かあったのか?」

「さぁ?」

千冬と箒は席に着くとクラスの女子たちは千冬の傍に寄って来た

「織斑さん、転校生の噂聞いた?」

「転校生だと?まだ入学式が終わって数日しか経ってないのにか?」

「うん、その転校生、中国の代表候補生なんだって」

「中国、か・・・あいつは元気にしているのかな・・・」

「千冬?気になるのか?」

「まぁ、一応な。もしかしたら戦うかもしれない相手だしな」

千冬はもう一人の幼馴染の事を思い出し、箒にそう言う。

「だけど、私達には織斑さんがいるもの!負けはしないよ!」

「そうそう!織斑さん強いし!」

「おりむ～がんばれ～」
　女子達とのほほんさんは千冬にそう言いながらデザートの事を考える、すると、教室のドアが思いっきり開けられた
「残念だけど、そんな簡単にはいかないわよ」
　そこに立っていたのはカスタマイズされたＩＳ学園の制服を着て、髪をツインテールにした少女が立っていた。千冬と箒、一組の女子たちは一組のドアの前に立っている少女に視線を向ける
「２組のクラス代表も専機持ちになったの。そう簡単には優勝できないわよ！」
　少女は腰に手を置き、堂々と一組に宣言する。すると千冬は立ち上がった
「お前、鈴か？」
「そうよ！中国代表候補生、凰鈴音！。今日は宣戦布告に来たんだから‼？」
　ビシッ！と千冬に指を指し、キメ顔をしてそう言う。千冬はそんな鈴を見て苦笑する。それを見た鈴は顔を赤くした
「ちょっ！何よ！」
「いや、すまん、はは！・・・・・久しぶりだな、鈴。元気だったか？」
「ま、まぁ、お、おかげさまで」
　鈴は頬を指でかくと千冬が近づき鈴の前に立つ

「それにしてもお前が噂の転校生だとは思わなかったな」
「あら？意外だった？」
「いや、お前は昔から喧嘩をする奴だったからな。イメージ的にな」
「別に！わ、私は喧嘩が好きで喧嘩をしてるわけじゃないわよ！」
　すると千冬は鈴の後ろを一瞬見ると視線を鈴から鈴の後ろへと視線を変える
「ん？どうしたのよ、後ろに誰かいるの・・・・・・・あ」
　鈴も後ろを見るとそこには出席簿を持った一夏が立っていた、一夏は冷たさを感じさせるような視線を鈴へ向けていた
「もうＳＨＲの時間だ」
「ち、い、一夏さん!?」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ」
「す、すいません……また後で来るからね！　逃げないでよ千冬！、ふん!!」
　鈴は雲の子を散らすかのように一組から自分のクラスへと戻って行った。
「何故私は逃げなくてはならないんだ？」
「千冬、あの女子とは知り合いなのか？、随分と仲が良さそうだったが」
「もしかして、千冬さんの幼馴染さんですの？」
「何故わかった？、セシリア」

「ま！本当ですの!?」
「幼馴染は私のはずだろう！」
「それは「お前達もさっさと席につかんか！」って！痛!!」
　バシン！バシン！バシン！っと出席簿で頭を叩かれた三人は頭から煙を出しながら席についた
「全く、それでは、一時間目はＩＳ実習を行う。全員ＩＳスーツに着替え次第、第二アリーナへ集合だ。いいな？」
『はい！』
「よし、では行動を開始しろ。第二アリーナには既に山田先生が準備をしている。遅れるなよ？」
　一夏はそう言うと教室を出ていき、クラスメイト達はすぐさまロッカールームへ移動を開始する
「よし、では我々も・・・って千冬？」
「箒さん、千冬さんは？」
　すると箒は千冬を呼ぼうとした時、既に千冬の姿がなかった、箒とセシリアは廊下に出て辺りを見渡すがいるのは一組の生徒だけだった
「あいつ何処に行ったんだ？」

「・・・・もしかして織斑先生の後を追ったのではないでしょうか？」
「何故一夏さんを・・・・・・まさかあいつ」
箒の脳裏にあるイメージが浮かび上がった、それは千冬が一夏の生着替えをドアの隅から覗いているイメージだった。それを見た箒は呆れた表情をした
「あの馬鹿者、死にに行ったか」
「ん？どういう事ですの？」
「まぁ、あいつの事はほっておこう。私達もロッカールームへ行くぞ」
「？は、はい」
箒とセシリアはそのままロッカールームへ向かって行った

その頃、千冬は既にＩＳスーツに着替えて一夏の後を追っていた。そのスーツ姿はとてもピッチリとしておりボディーラインがくっきりと出ており、その所為で大きな胸が

まるっきりわかる
「きついな・・・・まぁいい。一夏兄の生着替えを見れる事だし、それに私の子の姿を見た一夏兄は絶対私のとりこになるはずだ・・・・ぐふふ！」
　ＩＳスーツは外見はスクール水着のようなレオタードと膝上サポーター感じの物であり、明らかに一部のマニアにはたまらない姿である。そして千冬の場合は男性が見たら悩殺されてもおかしくないレベルの破壊力を持っている。すると一夏は教員用のロッカールームへ入る。千冬はそれを確認するとドアの傍まで早足で近づく
「・・・・よし、開いてるな・・・・・おぉ！」
　千冬はドアを少し開け中を覗くと視線の先にはロッカーの前で上着を脱いでいる一夏の姿を見た。千冬は顔を赤くしながら覗いていた
「おぉぉ！や、やっぱり一夏兄の裸姿は絶大だ！・・・・あぁ！触りたい！あの肌を！一夏兄を！／／／／／／」
「・・・・・・・・・・・」
　すると一夏はロッカーを開けて中に入っていた全身を包む様な青いパイロットスーツを取り出し肌着を脱ぐとそのパイロットスーツを着る。
「・・・・・・いつか」
「ん？」

「いつかお前と・・・・戦わなくてはならいなのかもな・・・・スコール」
　ロッカーの扉の裏に一枚の写真が貼ってあった、その写真には一夏と金髪の女性が一緒に抱き合っている写っていた。一夏はその写真に手のひらを当て、悲しそうな表情をする
「今の俺にあいつとどこまで戦えるか・・・それが俺の越えなくてはならない壁だな」
　それを見て聞いていた千冬は誘拐された日の事を思い出す
「・・・・あの時、一夏兄の右目を奪った女の髪の色は確か・・・金髪だったなぁ・・・・まさか」
「それに、あの写真の女・・・何故一夏兄と親しそうに抱き合っているんだ?・・・」
　千冬の目から光が消えていき、虚ろな目になる。自分の胸に手を当て一夏を見る
「さて、行くか」
「・・・・・・・・」
　一夏はロッカールームから出ていこうとドアへと向かってくる、千冬はドアの右側に移動し一夏に見えない様に隠れる。そして一夏はルームから出てきて左側の方へ向かおうとするが途中で止まる
「・・・・・・・千冬」
「っ!?」

「もし、お前が人を殺そうとした時は・・・俺はどんな手段を使ってでもお前を止める。それが兄としての務めだ」
「・・・・・・」
「もう少しで授業が始まる、お前も急いでアリーナへ来い。いいな？」
一夏は千冬へ振り向きもせず再び足を動かしてその場を去って行った、千冬は一夏が去って行った先を見る
「なら、私を・・・・一人にしないで・・・・私はもう・・一人はいやなんだ・・・・・」
千冬は震えた体を両手で抑え込んでいた、まるで一人置いていかれるかのように。自分を置いて更に前へと進んでいく兄の隣に立つことが出来ない自分に
「・・・・・・・・・行かなくてはな」
千冬は何とか気持ちを切り替え、アリーナの方へ向かって行った

その頃、あるホテルでは

「・・・・・・・・・」

「スコール、さっきからどうしたんだ?」

高級ホテルの様な部屋の中に髪は豊かな金髪ですらっと背が高く、大きな胸とほそりとくびれた腰に艶やかなヒッププラインを持つ女性とオレンジ色の長い髪にタンクトップにジーパンを着た女性が居た、金髪の女性はソファーに座りながら空を見つめていた、そんな彼女にオレンジ色の髪の女性、オータムはスコールに話しかける

「いや、彼と別れてから随分経ったと思ってね」

「彼って……一夏の事か?」

「えぇ、そうよ・・・・・私が初めて愛した男性だもの、気になるのは仕方ないじゃない?貴女もそうでしょ?オータム」

「ま、まぁ・・・そうだな。一夏とは学生時代、仲だったからな。・・・・・・私も好きだったけど」

オータムは頭を掻きながら、学生時代の事を思い出し顔を赤くする。そんなオータムに苦笑するスコール。すると部屋にもう一人入って来た

「スコール、帰還したぞ」

「ご苦労様、エム」

そこに現れたのは青いＩＳスーツを着た千冬と瓜二つの少女だった、大きな胸が窮屈そうにＩＳスーツに閉じ込められている
「それで、次は？」
「いえ、これから一次任務はないわ。それまで私達、実働チームは学園に忍ばせたスパイからの定期報告を聞くことになるわ」
「了解した…私は部屋に戻る」
「ええ、お疲れ様」
少女はスコールにそう言いい自分の部屋へと入って行った、少女は部屋に入るとベットへ体を預ける。部屋の中には何かが入っていた薬品が入っていた小さなカプセルがあちこちに散らばっていた
「……まだ、彼方に会うのは先になるが…彼方と会えることを楽しみにしている」
少女は手にロケットを持ってそう言うとロケットのふたを開ける。その中にはまだ右目を失ってない頃の一夏の写真が入っていた。少女はそれを見て顔を赤くする
「必ず会おう……兄さん…」
少女。マドカはそう言うとロケットを強く握り占めながら体を丸めた

第８話　白い騎士と蒼い天使

第二アーリナ

「では、これよりＩＳの基本的な飛行操縦をしてもらう」

第二アリーナについた一夏はパイロットスーツを着たままジャージを着ている山田先生と共に一組の生徒達にこれから行うＩＳの飛行操縦を説明していた、千冬は少し遅れ等の隣に立つ

「遅かったな、千冬。何かあったのか？」

「ちょっと、トイレにな」

千冬は誤魔化すように等にそう言う、すると一夏は千冬とセシリアを呼ぶ

「織斑、オルコット、試しに飛んでみろ」

「私もですか？」

「当たり前だ、お前は専用機持ちなのだからな、早くしろ」

千冬とセシリアは前に出るとセシリアはあっという間にブルーティアーズを纏った。

千冬は苦戦しているのか白式を展開出来ていない

「ぐぬぬ・・・・・」

「はぁ・・・・・・織斑、一秒掛らずＩＳを展開できるようになったら美味い飯を食わせてもいいぞ？」
「っ！白式!!!」
　一夏の話に釣られたのか千冬は目を光らせると同時に白式をあっという間に展開した、展開出来た千冬は一夏にドヤ顔を見せてくる
「織斑先生、約束通り一秒掛らずに展開出来ました。なので今日先生のご飯を・・・」
「馬鹿者め、一秒以上かかっているくせに何を言う」
「が～ん!!」
　千冬は顔を青くし地面に膝を着き落ち込む。セシリアはそんな千冬を見てオドオドしていた。一夏は呆れる様に手を頭に置く
「よし、飛べ！」
「っ！」
　一夏の声と同時に二人はＰＩＣを起動しアリーナの空を飛ぶ。しかし代表候補生であるセシリアは綺麗に飛んでいるのだが千冬はもたついている様に飛んでる
『何をやっている？スペック上の出力では白式の方が上だぞ』
「そんな事言ったって、私はまだ白式を動かしてそんな経っていませんよ」
『専用機を与えられた以上はこれぐらいの事は当たり前の様にしろ』

アメイジングエクシアのオープンチャネルで白式へ通信を入れ千冬を説教する一夏。
千冬は何とか機体を制御しセシリアの様に綺麗に飛ぶことが出来た
「千冬さん、その調子ですわ」
「やっぱりわからん、大体空を飛ぶイメージが思いつかないんだ」
「イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ?」
「う～ん」
千冬は一度反重力力翼と流動波干渉の話を一度セシリアから聞いたが何もかもちんぷんかんぷんであった千冬は感覚で覚えようと考えていたのだが中々うまくいかなかった。すると二人のオープンチャネルに一夏が通信を入れて来た
『よし、では今度は急降下と完全停止をやってみせろ、目標は地上から１０センチだ』
「了解です。では、千冬さんお先に」
セシリアはそう言うと先に地上へと向かう、セシリアは見事１０センチ丁度で完全停止させた
「凄いな・・・・私も!」
千冬もＰＩＣを動かしセシリアと同じように地上へ急降下していく
(よし!このまま・・・・・あ、そういえば)
千冬はある事に気づきながらそのまま急降下していく、そして気づいたこととは

（止まるのって、どの位前にしておくんだったけ？）
　背中の翼状の突起からロケットブースターが噴射しているイメージを浮かべていた千冬だったがその以前に止まる方法を考えていなかった、当然そのまま凄い速さで地上へ急降下していく
（まずい！ぶつかるっ!!）
　千冬は目を瞑って落ちるのを覚悟した、だが
「・・・・・あれ？落ちてない・・・・」
　千冬はそっと目を開けると途中で止まっていた、千冬は辺りを見渡すとクラスメイト達とセシリア、箒、山田先生が顔を赤くしていた
「なんだ？・・・・・・・・・・！」
『全く、世話が掛る奴だ』
　千冬が上を見上げるとそこには自分の手を握った蒼い天使、アメイジングエクシアを展開した一夏がそこにいた、背中のＧＮドライブから放出されるＧＮ粒子が神秘的な美しさを見せる。まるで天使が白い騎士に手を差し伸べているかのようなまさに幻想的な姿だった。一夏はそのまま千冬の手を掴んだまま地上へ着陸する
『織斑、今日は部屋でお前にＩＳについての基礎を教えてやる。いいな？』
「は、はい・・・・・・・・・・／／／／／」

『何故顔を赤くする?』
「だ、だって・・・・その・・・あ、ありがとうございます・・・・・・／／／／／／」
『まぁ、いい』
　一夏はＩＳを展開したまま、千冬と正面を向き合う。それを見た千冬はどうしたのかと思っていると一夏が千冬にある事を言う
『織斑、今から私とお前で軽い模擬戦を始める』
「え!?今から!?」
『一度、お前達にはＩＳはどんなものなのかを見てもらう必要があると思ってな。それにお前も一度私と戦ってみたいと思っていただろう?』
「・・・・・・・・」
『それに、俺が居ない間にお前の剣の腕がどれ位上がったのかも気になる』
　千冬はさっきまでのニヤけた表情から直ぐに真剣な表情に変わり、バスロットから雪片を展開する、一夏もアメイジングＧＮソードとアメイジングＧＮシールドをそれぞれ展開した
『山田先生、生徒達を観客席の方へお願いします』
「ほ、本当にやるんですか?織斑先生」
『はい、山田先生。前にも貴女に言いましたが、ＩＳはスポーツなんていう軽い物じゃな

いだって言う事を生徒達にも教えたい・・・・・・・ＩＳは決してスポーツなんかじゃない、これは人を殺す兵器だっていう事を』
「・・・・・わかりました」
『頼みます』
　山田先生はクラスメイト達に指示を出し観客席の方へ移動し始める、そしてグラウンドから生徒達が居なくなると同時に一夏はアメイジングＧＮソードをソードモードにしＧアメイジングＧＮソードの刃をを千冬に向ける
『千冬、俺はお前に人殺しにはさせたくない・・・・だがもし』
「ん？」
『お前がその力で誰かを守りたいと想う気持ちがあるのなら・・・・・俺とエクシアに見せてみろ』
　エクシアの緑色のツインアイが光り、それを見た千冬は苦笑する
「わかった・・・・けど、私は一夏兄だけを守る為にこの力を使いたい、それと同時に一夏兄を傷つけようとする奴を・・・絶対に許されない・・・・そう誓ったんだ、あの時に」
『・・・・・・・・・・』
　すると管制室から山田先生のアナウンスが入る

《織斑先生、準備できましたか？》
『・・・・・・あぁ、いいぞ』
「こっちも大丈夫です」
二人はそう返事をすると、お互い武器を構える。そして始まりのブザーが鳴り響いた
『アメイジングエクシア、織斑一夏』
「白式、織斑千冬」
『目標を！』
「いざ尋常に！」

「『勝負!!／駆逐する!!』」

アメイジングＧＮソードと雪片を構えた二人は勢いよく剣を持って激しい剣の打ち合いを始めた。

第９話　想い

一夏と千冬の模擬戦が始まって数分が経過していた。一組の生徒や管制室にいる箒とセシリア、山田先生は二人の戦いに目を奪われていた

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

千冬は高速で一夏に近づき雪片を振り下ろすも素早くかわされ、一夏はライフルモードで千冬へ粒子ビームを放つ。が千冬も粒子ビームの攻撃を避けると再び一夏に雪片を振り下ろす。一夏はアメイジングＧＮソードをソードモードに切り替え、雪片を受け止める

『やるじゃないか』

「くっ！」

『お前が初めてだ、此処まで俺と戦えてこれた操縦者は』

「くそぉっ!!」

一夏は左手にＧＮショートブレードを展開し逆手に持つと下から千冬へ斬りつける、それを見た千冬は一夏から距離を取った

「手加減してるくせによく言うな、一夏兄っ!!」

『ガキ相手に本気に成程、俺は馬鹿じゃないからな』
千冬は一夏が話している隙に雪片で斬りつけてくるが一夏はひらりとかわすと千冬の背中に回し蹴りをすると、ライフルモードに切り替え粒子ビームを放ち白式に直撃した
「ぐあっ!!」
『もう終わりか?』
「くっ!まだだ!」
一夏は千冬を挑発し、ＧＮソードの刃を向ける。それに対し千冬は落ちる途中で体制を建て直し一夏に接近する
「行くぞ!イグニッションブースト!!」
瞬時加速『イグニッション・ブースト』を発動し一夏の目の前に来る。一夏は『同じ手をまた』と思いながらＧＮソードで雪片を受け止めようとする、だがそれを見た千冬は口を吊り上げた
「そこだ!!零落白夜!」
『っ!?』
千冬は上から雪片を振り下ろすと見せかけて体を下へしゃがませその一瞬の隙に零落白夜を発動しエクシアの腹部の装甲を斬りつけた

「どうだ！」
『ちっ!!』
　一夏はすぐさまＧＮソードで千冬を斬りつけようとするが千冬は直ぐに一夏から離脱し再び光の刃を展開した雪片を向けてくる。斬りつけられた腹部にはヒビが入っておりアメイジングエクシアのシールドエネルギーが半分以上削られた
『まさか、お前がそんな戦い方をするとは思わなかった』
「そうだろう・・・・もうエネルギーが尽きるな・・・・・」
　千冬は白式のシールドエネルギー残量を見て舌打ちをする、もう２００は切っており雪片は光の刃を閉じ元の実体剣に戻る
『・・・・・・千冬、少しだけお前に俺の本気を見せる、いいか?』
「・・・・・・あぁ」
　千冬は一夏を警戒し雪片を構える、一夏は地上へ着地すると千冬も同じように地上へ着地した、それを見た一夏はアメイジングＧＮソードを千冬に向けた
『――――――トランザム』

単一仕様能力：ＴＲＡＮＳ―ＡＭ

エクシアの緑色のツインアイが光ると同時に機体全体に細かい赤いラインが走るとエクシア装甲が真紅の光を纏った。そして

ザシィィィィィィィィィィンッ!!!!!

「「「っ!?」」」
「「「「え!」」」」
「え・・・・・・・・?」
『・・・・・・・・・』

山田先生や箒、セシリア、そして一組の生徒達は何が起きたのか分からなかった、エクシアが真紅の光を纏ったところまでは見えていた。しかしいつの間にかエクシアが立っていた場所には既にエクシアの姿はなく、次にエクシアの姿を見たのは白式の直ぐ後ろだった。エクシアは既に真紅の光から元の色に戻っており、腕にはアメイジングG

Ｎソードを右へ振っている姿だった。千冬も何が起きたのか分からずにいた、そしてアラートが鳴り響いたのに気がつきモニターを見るとシールドエネルギーがゼロになっていたのだ。千冬は力尽きる様に地面に座り込む
「い、今・・・・一夏さんは・・・何をしたんだ?」
「多分・・・・ワンオフ・アビリティーの能力ですわ・・・・・けどこれは」
「・・・・・・・・」
　管制室にいた箒達はアメイジングエクシアの力を見て驚愕していた、ワンオフ・アビリティーを発動したと同時に白式のシールドエネルギーがいつの間に尽きその後ろにいつの間にかＧＮソードを振って立っていたエクシア
「な、何も・・・見えなかった・・・何も」
『・・・・・・・・・』
　エクシアは千冬の前に移動すると千冬の首元にＧＮソードを突き付ける、それを見た一組の生徒達と箒達そして、千冬は驚いた
「お、織斑先生！何を!?」
「一夏様!!」
　管制室に居た箒達も同じように管制室のマイクを使って一夏に話しかける
《い、一夏さん！何をする気ですか!?》

《織斑先生!!》

『・・・・・・・・』

「い、一夏・・・・兄?」

目の前にいる蒼い天使は何も答えず白い騎士へ剣を向ける。千冬はその姿を見て恐怖していた、逃げろと体の本能がそう言う、千冬は涙を流しながら殺気を放つ蒼い天使――――エクシアを見上げる。

『これが・・・・人の命を絶つ武器の力だ、千冬』

「え・・・・・・・?」

『今、お前は死という恐怖を体で心で感じたはずだ・・・・お前が人を殺そうとした時、その殺されようとされている者と今同じ気持ちを・・・お前は感じたはずだ』

「・・・・・・・・・」

千冬は一夏の言った言葉を理解したのか自分が持っている雪片を見る、小さい頃初めて刀を持った時、一夏が同じことを言った事を今思い出した、千冬は雪片を手から落としてしまう

『いいか?千冬。力とは何の為に使うのかどんな時に使うのかを理解しておけ・・・力の器となるのは己自身だ・・・・もし力の使い方を誤れば、お前はその力に飲み込まれる、そこら辺を一から考え直せ』

「・・・・・・・・・・」

白式は限界に達しＩＳが解除されると一夏もエクシアを解除し地面に膝待着いている千冬に手を伸ばす

「なぁに、お前はまだ１０代の小娘だ・・・時間はいくらでもある。使い方はこれから学んで行けばいい、そうだろう？」

「・・・・・・・うん・・・そうだな・・・私は、死という感情を感じたことがなかったから・・・此処まで・・・」

「お前は今日、死という恐怖を感じた。ならその恐怖を糧にして、乗り越え。力を使え。そうすれば、お前はこれからもっと強くなれる。俺よりもな」

「・・・・・・・・・はい!!」

千冬は泣きながら一夏に抱き着き、顔を一夏の腹に押し込む、一夏はそんな千冬の頭を撫でながらオープンチャネルを開いてアリーナ全体に聞こえる様にする

「お前達、これが女にしか使えない世界最強の兵器だ。ＩＳはスポーツではない、これは人の命を絶つ武器であり力だ、お前達がＩＳに乗るならそれ相応の覚悟を持て！、ＩＳに乗って力を持って後悔しない様に、後悔すれば今まで傷つけて来た者達に対しての侮辱になる。それを忘れるな」

一夏はオープンチャネルでそう言う観客席に居た一組の生徒達は一斉に立ち上がり、

大きな声で「はい!!!」っと応えた、それを見て一夏は苦笑すると千冬を背中に乗せピッドの方へ歩き始める
「い、一夏兄!」
「織斑先生だ、馬鹿者・・・・・・・わるかったな」
「え?」
「少しやり過ぎたと思ってな・・・怖かっただろう?」
「・・・・・うん、だけど。よかった」
「ん?」
「私はただ一夏をの右目を奪った女へ復讐する事しか考えていなかった・・・家族を傷つけられた怒りと憎しみに囚われていたんだと、今・・・そう感じたんだ・・・・ありがとう」
「・・・・これで、お前はもっと強くなれる。いずれ俺を越えるだろう」
「そうか?・・・・・」
「あぁ、俺にダメージを与えたのは〝あいつ〟を含めてお前が二人目だ」
「あいつって?」
「ふん、内緒だ」
「・・・・けち」

「ははっ」

千冬は顔をプクーと膨らませそう言うと一夏は笑うと二人の前に一組の生徒達と管制室にいた三人が明るく二人を出迎えた

復讐に囚われていた白い騎士の少女は蒼い天使の兄に心を救われ、真の力を見つけ始める。それは誰かを傷つける力ではなく、誰かの笑顔を大切な人の笑顔を守る為に

第１０話　ＧＮドライブ

授業が終わり、昼休みに入った千冬達は学園の食堂で食事をしながら今日の模擬戦の事を話し合っていた

「千冬。どうだった？一夏さんと戦って」

「兎に角、動きと剣裁き。射撃が早かった、あビームを避けても直ぐに懐に入り込まれて斬ってくるがそれを避けてもビームの雨が降ってくるの繰り返しだった。流石は一夏兄だよ、世界最強の名は伊達じゃない」

「織斑先生が現役時代の映像を見させてもらいましたが、凄かったですわ。世界最強《ジークフリート》・・・その実力はまさに世界最強ですわ」

「あぁ・・けど、あの時一夏兄が最後に使った、あの紅い光は何なのだろうか」

一夏が千冬に少し本気を見せると言って使った、アメイジングエクシアの　単一仕様能力、ＴＲＡＮＳ―ＡＭの事が三人は気になっていた。発動した直後に白式のシールドエネルギーを一瞬でゼロにしたあの単一仕様能力に

「一夏さんのＩＳの単一仕様能力は相手のシールドエネルギーをゼロにする能力なのか？」

「いえ、それは考えられませんわ。ＩＳには外部からのコントロールは強固なセキュリティーによって守られておりますわ、それにもしそれが単一仕様能力なら態々動く必要がないはずですわ」
「じゃあ、あれは一体何だというのだ？」
「恐らくですが、機体性能を一時的に大幅に上げる能力だと思いますわ。目に見えない程の速度と威力を出すにはそれしか考えられませんわ・・・・後一つ気になる事が」
「あの緑の粒子の事か？セシリア」
「はい。あの粒子には通信機能やレーダー機能を妨害する事が出来るみたいなのですが、それだけではないと思いますの」
　セシリアはアメイジングエクシアの動力源になっているＧＮドライヴの事を二人に話し始めた
「一瞬だけですが、織斑先生の機体が紅い光を纏った時に背中のスラスターから緑の粒子が凄い勢いで放出されているのが見えましたわ」
「確かに一瞬だが、私も見えたな・・・・まさかあのスラスターには何らかの力を持っているのか？」
「あくまで可能性ですわ。・・・でも、あれほどの性能を持った機体を政府が黙っていないと思いますわ。ビーム兵器の実装化に零落白夜に似た能力を発現出来る大型実体剣。

現段階ではビーム兵器の実装は不可能と言われておりますし」
「何故ビーム兵器の実装が不可能なんだ?」
「まずエネルギーの消費が激しく、ビームを撃った後の冷却に時間が掛るというデメリットがありますの、銃口も高出力のビームに耐えきれなくて溶解し大破するほど」
　現段階での技術ではビーム兵器の実装は不可能と判断されエネルギー消費や冷却必要がないレーザー兵器の実装が決まったのである。だがアメイジングエクシアの場合はビームなのに関わらずそれを実装化、連射速度に威力、並びにビームを刀の様に固定し近接格闘武器への転用も可能にしていた
「大丈夫なのだろうか、一夏さん」
「ふ～ん、大丈夫じゃないの?あの一夏さんだし」
　箒の言葉に返事をする千冬の知り合いである鈴がいつの間にか千冬の隣に座りながらラーメンを食べていた
「「うわっ!」」
　突然現れた鈴に驚いた三人は大きな声を出してしまい、席を立ってしまった。鈴は「何驚いてんのよ」と言いたそうな顔をしながらラーメンのスープをレンゲですくい飲む
「り、鈴!お前いつの間に!?」

「さっきから声かけてんのにあんた達、一夏さんの話に夢中だったらしいからあんたの隣に座っていたんじゃない」
「そ、そうだったのか・・・すまん鈴」
「わかればいいのよ」
　鈴は最後のラーメンのスープを飲み干すとお腹をさすった
「所でさ、千冬。あんた元気だった？」
「まぁ、おかげさまでな。そう言うお前も元気だったか？」
「当たり前でしょ？あたしなんだから」
　すると
「お前達、隣空いているか？」
「「お、織斑先生!?」」
　そこに和食定食が乗ったプレートを持った一夏が箒達の前に立っていた、千冬以外の三人は驚いた表所をして一夏を見ていた
「あぁ、空いてる。ていうか一夏兄、いつも食堂でご飯を食べているのか？」
「だから教師に溜口を使うなと言っているだろう。・・・まぁ、いつもは弁当を作っているのだが今日は作り忘れていたのでな、仕方なく此処に来たんだ」
　一夏は千冬にそう言いながら席につくと箸を持って料理を口へ持っていく

「あ、あの織斑先生・・・お久し振りです！」
「あぁ、久し振りだな凰。元気にしていたか？」
「は、はい！」
「それなら構わん、所でお前達、さっき何を話していたんだ？」
「織斑先生の専用機の事で」
一夏は専用機の事を話していたと箒から聞くとコーヒーを飲む
「そうか」
「織斑先生。あの紅い光は何なのですか？私たちには先生の機体が紅くなるところしか分からなくて」
「ワンオフアビリティーなのですよね？」
「あぁ、『ＴＲＡＮＳ―ＡＭ』というシステムだ。機体内部に蓄積された高濃度の圧縮粒子を全面開放する事により、機体スペックを３倍にまで上げる事ができるエクシアのワンオフアビリティーだ」
「き、機体性能を３倍!?」
それを聞いた代表候補生であるセシリアと鈴は『ＴＲＡＮＳ―ＡＭ』の能力を聞いて驚いた声を上げる。一般的には高機動パッケージという装備で機体性能を上げるのだがアメイジングエクシアの場合はそれなしで機体性能を上げる事が出来る

「だが、『ＴＲＡＮＳ―ＡＭ』にも機体性能を上げる分、限界時間は存在する。大量のＧＮ粒子を消費するというその性質上、稼働時間には時間制限があり稼動限界時間が過ぎると大幅な機体性能低下が生じる」
「詰まり、諸刃の剣。という事って言う事か？一夏兄」
「まぁな、だが『ＴＲＡＮＳ―ＡＭ』は任意でのシステムの解除を可能にする。あの時の戦いの時にわかっただろう？」
　エクシアが白式を斬りつけた後『ＴＲＡＮＳ―ＡＭ』が消えた事を千冬達は思い出した、益々エクシアというＩＳとそれを動かす一夏に三人は惹かれていく。そして一夏は食べ終わると席を立つ
「お前達も早く済ませろよ。授業に遅れたらグラウンド十週だからな？」
「待って！」
　すると千冬は席から立ち上がり、一夏を呼び止めた
「何だ？」
「・・・・一夏は・・・ガンダムで、何をするの？」
　それを聞いた一夏は苦笑すると、虚ろな目で人差し指を口元へ持っていく
「秘密だ」
「「ぐはぁ!!!」」

一夏のミステリアス感を出すイケメンフェイスを見た千冬達は口や鼻から血を吹き出し、机へと倒れ込んだ。それを見ていた鈴は「一夏さん・・・変わってないな～」とあえて声に出さずに心の中でそう言った

「ん？まただ、何故血を出して倒れるんだ？」

「それは織斑先生が鈍感だからですよ・・・・」

「まぁ、いいか。凰、早く教室に戻れ授業が始めるぞ」

「え？いいんですか？あの三人ほっといて」

「どうせ直ぐに立ち上がるだろう。いつもそうだしな」

一夏は鈴にそう言うとその場を立ち去って行った、鈴は気まずいまま、血を流している三人を見て「あんた達も大変ね～」と思うのであった

そしてその夜。一夏は学園の地下に設置された関係者以外立入禁止の研究室の様な場所に山田先生と居た
「織斑先生、本当によろしいんですか?」
「構わん、政府に伝えろ。『ガンダムのデータと武装の提示はしない』と」
エクシアの存在を知ったＩＳ委員会が一夏の専用機、アメイジングエクシアの提示を要求してきたのである。今の一夏の顔はとても怖い表情だった、そんな一夏の顔を見ながら山田先生はキーボード動かし委員会へ返信する
「どうしてＩＳの情報を提示しないのですか?このままだといずれ委員会が直接此処へ」
「兵器に心を奪われた連中に私は従う気はない。それに争いの種をばら撒くなど以ての外だ」
「恐らく、既に各国にガンダムの情報は伝わっています。もし何処かの国から襲撃を受けたら」
「真耶、俺を誰だと思っている?元世界最強の座に輝いた、元ジークフリートだ。学園の

一つや二つ守ってみせるさ。後」
「関係のない者を巻き込もうというのなら――――――――駆逐するまでだ、俺とエクシアで」
指にはめられたエクシアの待機状態が薄らと光を放った
「織斑先生・・・」
「――――――――人を殺す兵器としての力から、人と人が互いに手を取り合って分かり合える未来を掴み世界を変える力へ変える――――――――それが俺がＧＮドライヴを創った目的だ」
「人の心の光・・・・可能性の光・・ですか?」
「・・・・あぁ。世界を変えてしまったのが俺と束の罪ならば、その罪は再び世界を変える事にしか償えない・・・例え世界を敵に回しても」
一夏は暗い部屋で腕を組んでモニターに映る、アメイジングエクシアとダークマター、そして白騎士と黒騎士のデータが移し出されていた

第11話　旧友とカフェ

一夏ＳＩＤＥ

千冬との模擬戦から大分経ちクラス代表戦の日が着々に近づくなか、俺は日曜の休日を使い俺の行きつけのカフェに来ていた。此処のコーヒーは中々の味で気にっている

「こう満喫できるのは、久し振りだな。最近は色々な事があったからな」

今日の新聞を読みながら俺がそう口にしていると

『次のニュースです。昨日ＩＳ委員会直属の研究施設が何者かに襲撃事件が発生しました。研究施設は全壊、警備していたＩＳ小隊も全滅したという事に政府と委員会はテロに対して全力で対処すると――――』

「亡国機業《ファントムタスク》・・・遂に動いたか」

亡国機業。第二次世界大戦中に生まれ、５０年以上前から活動している謎の秘密結社、主にＩＳの強奪が目的で真の目的は今だに不明なまま、まさに亡霊の様な組織だ。ニュースにまで出て来ると言う事は奴らはもうそこまで近づいて来ているという事だ

(目的は白式とエクシアの奪取・・・・と言ったところか――――そしてあいつも)

俺の脳裏に一人の女性の姿が浮かび上がる。〝世界でたった一人俺を倒した女性〟

で俺が初めて心を許した女性
「スコール・・・・・・・」
俺の元から離れて消えた、彼女が亡国機業にいることは知っている、そしてその実行部隊の隊長である事も。そんな事を思い出しいると
「ご合席、よろしいでしょうか?」
「ん?」
思考を戻し声がした方へ顔を向けると、そこに居たのはタンクトップに所々破けたジーパンを着たオレンジ色の髪の女性が俺の前に立っていた。それも俺の知っている奴だった
「っ・・・・オータム?」
「ハハ!喋り方が違ったからビビっただろう?一夏!」
そこに居たのはＩＳ学園で共に過ごした、男馴染みの喋り方をした。俺の元同級生で俺の数少ない友人のオータムが俺の反応を見て笑っていた。オータムは俺の前に足をテーブルに掛けながら両腕を後頭部に持っていく
「どうしてお前が此処に?」
「仕事の帰りにどっかで飯でも食おうと街をぶらぶらしてたら偶然お前が此処に居るのを見つけてよ」

「確か『みつるぎ』というＩＳ装備開発企業に就職したんだったな、お前」
「あぁ、でもお前がＩＳ学園の教師してると聞いたときは笑いが出たぜ。あんな不愛想で話しかけると切れるナイフのごとく教師やクラスメイトを沈めていた奴がよ」
　オータムは苦笑しながら俺の手に持っていたカップを奪い取るとそのまま口をつけて飲み始める、あ、俺のコーヒー・・・・・・・
「自分で頼め」
「いやだね、どうせ無料券とか店の女定員から貰ってんだろう？」
「勝手にあっちから俺に無料券を渡してくるから、貰って使ってるだけだ」
「はぁ～、お前の唐変木は相変わらずだな～スコールもお前のその鈍感さを攻略するのも大変だっただろうよ」
「む？」
　唐変木？鈍感？何を言ってるんだ？、オータムの奴
「それよりも・・・・・・スコールの事は残念だったなぁ」
「・・・・・・・お前もか」
「あぁ、私ん所に政府の奴らが来てよ。「スコール・ミューゼルの事をついて詳しい情報を」とか言ってきてよ」
「・・・・・・・・・」

「まっ。スコールの事はあまり知らないって言ってやったよ」
　やっぱりな
「はは・・・・お前ならそう言うと思ってたよ」
「たりめぇだろ。兵器に魂を奪われた連中にしゃべる事なんてねぇよ」
　オータムはそっぽ向いてそう言う。でも俺の左目の事は気にならないんだな。するとオータムは立ち上がると背伸ばして息をはく
「さてと、私はそろそろ行くぜ。仕事があるからな」
「そうか、頑張れよ、オータム」
「おめぇもな、一夏。それとさっきからお前を覗き見してる奴が居るぜ?」
　俺はオータムが視線を向けている先を見るとばれない様にしているのか、電中に身をひそめながら顔を出した千冬がいた
「ガルルルルル・・・・・・・・・」ゴゴゴゴ
「お前の妹は元気だなぁ?・・・・ひひ」
「全くあの馬鹿は・・・」
　後で絞めてやらねばな、あいつの教育の為に・・・なるかは分からんが
「なぁ、一夏――――」
「なんｄ・・・むぐっ!!」

オータムが俺の名を呼んで振り向こうとした瞬間。両手で無理やり俺の顔を掴むと強引に自分の方へ振り向かわせれると、俺の唇に柔らかく温かい何かが触れた。思考が戻り状況を確認するとオータムが俺の唇にキスをしていた。それも俺の唇に押し付ける形で

「ぷっはぁぁ！・・・・久し振りの私のキスはどうだった？一夏」

「お、お前なぁ!!／／／／／」

オータムは俺から離れまるで悪ガキの様な顔をして俺を見てくる。俺は急にキスをしてきたオータムに焦りながらオータムに怒鳴りつける。

「じゃあなぁ！教師頑張れよ～、先・生♪」ニヤニヤ

「あ！おい！」

オータムは高笑いしながら凄い速さで逃げて行った。あいつ逃げ足だけは昔から早かったからな。にしても

「・・・・・柔らかかったな／／／／／」

ただコーヒー味というのは伏せてだ。あと普通のキスではなくディープだったな、あの舌を絡めてくる奴の

「いちかにいいいいいいいいいいいいいいいいウオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!」

するとあの馬鹿（千冬）が顔を赤くしながら俺へ殴りかかって来た。俺は拳を構え

「・・・・・ふんっ!!!」

ゴスウウウウウウウウウウウウンっ!!!!!

「ぐほっ!!!!」

思いっきり千冬の頭を殴り着け、千冬を叩き潰し、千冬は頭から煙を上げながら俺の足下へ倒れた

「・・・・・・・・」シュュュュュュュュュ・・・・

「ふぅ～・・・・さて行くか」

俺は残ったコーヒーを飲みほし、千冬を担ぎカフェを後にしようとすると

「あ、あの！／／／／／」

「ん？」

振り向くとそこには俺がカフェに来る日いつも俺に無料券を渡してくる、女性が俺の後ろに立ってた

「こ、これ、ど、どうぞ／／／／／」

「あぁ、いつもすみません」

俺はいつもの様に無料券を受け取り、ポケットの中にしまう

「ま、また来てくださいね？／／／／」
「はい。また来ます、今日は騒がしくしてしまい、すみませんでした」
「い、いえ／／／／」
「では、また」
俺は女性に謝罪すると、千冬を持って学園へと帰った

一夏ＯＵＴ

オータムＳＩＤＥ
私は一夏と別れると、私達実行部隊の新たな隠れがになったホテルへ帰り、部屋に入

ると
「・・・・・なんだこりゃ」
「あぁ♡・・・・・いい体してるぅ♡」
「さ、流石世界最強・・・・一撃で・・・・イッテしまった・・・」
部屋の床を血の海にして倒れている、実行部隊の隊員達が鼻から血を流して倒れていた。すると私の前にバスローブを羽織ったスコールが現れた
「あら、オータム。お帰り」
「あ、あぁ…ただいま…なぁ？スコール、これなんだ？」
「さっき学園に忍ばせたスパイからの情報と一緒に送られて来た〝おまけ〟を見てね」
「おまけ？なんだそりゃ」
「これよ」ピッ
手にもった投影ディスプレイを起動しモニターを見ると、そのモニターには全身を包むような青いスーツを着ようとしている一夏の写真があった、それも上半裸のだ
「これ見てあいつら、あーなったのか？」
「えぇ。私達ファントムタスクには女性しかいないし、それに一夏はファントムタスク内では〝アイドル〟だもの」
「でもよ、明らかにイッテる奴も数名いるけど」

下着が濡れてる奴とか、自分の胸を揉んでる奴とか・・・・・下着の中に手を突っ込んで激しく動かしている奴とか

「本格的やばいな・・・・こりゃ。・・・そういえばエムはどうしたんだ?」

「・・・・」

スコールは親指で部屋の方へ指し、私はドアを少し開け部屋の中を覗くと

「はぁ・・・／／／／はぁ・・・／／／／。流石兄さんだ・・・なんていう体をしているんだ、はぁ／／／／」

「・・・・・・・」グルルルル・・・・・

部屋の中は一夏の写真ばかりで、壁や天井、タンスやあらゆる所に一夏の写真が張り巡らされた、エムは全裸の状態で自分の股に手を突っ込んで激しく動かしながら一夏の写真が張られた抱き枕を抱きしめながら息を上げていた。それを見た私は口をカパーと開け、目元を黒くさせた（無意識に）

「私や貴女は彼と一線を越えてるから、大丈夫みたいね♪」

「そう言う問題じゃねぇよ、スコール。マジでやばいってこれ・・・・」

本格的に私達ファントムタスクがテロリストからエロリストになっちまう!!、ただの痴女が集まったテロリストってどういうテロリストだよ!?

「それにしても、一夏ったらまた、たくましい体になったわね。そうは思わない?オータ

ム」
「スコール。頼むから私達はテロリストだっていうことを忘れないでくれよ」
「ふふ♪」
スコールはこの状況を楽しむ様に微笑む。私はもう一度一夏の写真に目を向ける
「・・・・確かに、たくましくなったな／／／／」
あの野郎・・・眼帯にイケメン教師に世界最強とか、色々と頑張りやがって。でも
「お前が元気そうでよかったぜ？――――一夏」
私はそう写真向かっていうと、私は自身のＩＳの整備をする為、別の部屋へ向かった

第１２話　クラス代表戦!そして襲撃

「織斑先生。もう少しでクラス代表戦、一回戦が始まります」
「そうだな。真耶、各システムチェックを頼む」
「はい!」
　クラス代表戦当日、一夏は山田先生と共に管制室で各システムの点検をしていた。今日代表戦で使われる、アリーナの観客席には全校生徒や各国の政府の人間達が来ていた。一夏は腕を組みながらアリーナを見つめる
「やっぱり心配しますか?織斑さんの事」
「いや、あいつならやれるさ・・・ちゃんと力の使い方を理解しているのなら」
「信じてるんですね」
「うちの生徒だからな、当然だ」
「あはは・・・・」
　一夏はあえて生徒と答え、それを聞いた真耶は顔をひきつっていた。するとアリーナのカタパルトから白式を纏った千冬と赤紫色のＩＳを纏った鈴が出て来た
「では、これより。クラス対抗戦、一回戦を開始します!」

真耶はマイクに向かって開始の合図を始める。両者それぞれ武器を構えたのを確認した

「では、始め!」

ブザーが鳴り響くとともにクラス代表戦が始まった

開始のブザーと共に先に動いたのは千冬だった。開始と同時にイグニッション・ブーストで鈴の懐へ一気に入り込んだ。

「先手必勝だ!!」

「なっ!?ちょっ!」

鈴は慌てて手に持った双天牙月で千冬の雪片を受け止めた。鈴は一度千冬から距離

を取り、千冬から離れる。だが千冬はそれを許さんとばかり鈴へ再び接近する
「逃がすかっ！」
「たくっ！いきなり突っ込んでくるとか、あんたおかしいわよ！」
　すると鈴は両肩部の非固定ユニットが上下にスライドしそこから銃身が現れた
「喰らいなさい！龍砲！」
　そのユニットから何かが圧縮された何かが放たれ、それは白式に直撃し千冬は地上へ叩き落とされた
「がはっ！・・・な、なんだ今のは」
　千冬は雪片を地面へ突き刺し立ち上がるが、鈴はまたユニットから目に見えない何かを放ってきた
「ほらほら！さっきまでの余裕はどうしたのよ！」
「くっ！」
　千冬は急いで体制を立て直し地上を高速で動き回る。だが弾丸が見えない為、どうよければいいか分からない千冬は雪片を振り回しながら目に見えない弾丸を切り裂いていく。それを観客席から見ていた箒とセシリアは驚いていた
「何だ！今のは!?」
「『衝撃砲』ですわね。空間そのものに圧力をかけて見えない砲弾を打ち込む兵器です

わ」
「じゃあ、あの機体もセシリア同じ」
「中国の第三世代型ＩＳ。『甲龍』、燃費と安定性を第一に設計された機体。それにあの衝撃砲、射角の制限がほぼゼロに等しいですわ」
「つまり、死角がないと？」
「そうですわ。それに弾丸事態が見えないという事も考えると」
「千冬・・・・・」
観客席から千冬を心配する箒とセシリア。すると千冬が地上から離れ空を飛行し始める
「小賢しい、真似をしてくれるな鈴」
「あら、そう？」
「だがっ！」
千冬は再び鈴へ接近する。鈴は衝撃砲を放ちながら千冬から距離を取ろうと後ろへ下がる。だが千冬は目に見えない衝撃砲をかわしながら鈴の懐へ入り込む
「また同じ手を！」
「――――――どうかな？」
「っ!?」

千冬は雪片を振り下ろすと見せかけて体を下へしゃがませその一瞬の隙に零落白夜を発動する、それは一夏との模擬戦の時に使ったあのフェイントを使だった
「零落白夜、発動!!」
「何?!」
青い光の剣へ姿を変えた雪片は甲龍の右肩の衝撃砲を斬りおとした。切り落とされた衝撃砲は爆発し千冬はイグニッション・ブーストですぐさま鈴から離れる。一撃離脱が決まった
「よくも・・・私の甲龍を!ていうか、あんた!フェイントとかそういう騙す奴しないキャラじゃなかった!?」
「人は変わるものなのさ、鈴」ドヤ〜
「何かあんたがそれいうと、腹立つわね。何よそのドヤ顔」イライラ
千冬は人をイラつかせる様なドヤ顔で一夏がいる管制室へ視線を向ける、それを見た鈴はイライラをつのらせる
(どうだ?一夏兄、私のこの『騙し討ちブレード雪片』の技は)
管制室から見ていた一夏の目はまるで可哀そうな子を見ていそうな目で千冬を見ていた
「あいつ、絶対あの技にダサい名前を付けただろうな」

「た、例えばどんな・・・・」
「『騙し討ちブレード雪片』とかだろうな」
「それは・・・・確かにちょっと・・・・」
　一夏がそんな事を言っているのに気づかず、管制室へドヤ顔を向ける千冬であった。
作者も『それはないだろう・・・・』と落ち込んでいるかもしてない
「千冬、あんたに私の本気をみせてやろうじゃない。・・・そしたら一夏さんにいいとこ見せられるかもしれないし」
「ん？」
「な、何でもないわよ！行くわよ千冬!!」
「あぁ！来い！」
　鈴は本気を出すと宣言すると双天牙月を持って千冬へ斬りかかって来る。千冬も雪片を構える。そして二人の剣と刀がぶつかる瞬間

ズドオオオオオオオンーーーーーーーー!!!!!!

「「っ!?」」
「な、何だ!?」
「何ですの!?」
　いきなりの大爆発ともくもくと立ち上がる黒煙。突然の事態にアリーナ内の観客達はパニックに見舞われた。アリーナのシールドが何者かに破壊されたのだ、すると爆発で起こった炎と黒煙の中から高出力レーザーキャノンが千冬と鈴へ放たれた
「鈴!!」
　千冬は鈴をお姫様抱っこしてレーザーキャノンをかわす。レーザーキャノンは観客席の方へ直撃し爆発を起こした。爆発した観客席のシールドが破壊され、大きな穴が空いた。そこに居た生徒達は何が起きたのか分からなかった、だが黒いＩＳを見た瞬間、生徒達は悲鳴を上げた。同時にアリーナ全体に非常事態警報が鳴り始めた
『緊急事態発生!緊急事態発生!全生徒は直ちに避難してください!繰り返します!』
「千冬!あんたは後退しなさい!早く!」
「鈴はどうするつもりだ!?」
「私が時間を稼ぐから、それに教員部隊もその内に突入してくるはずよ」
「だったら私も手伝う、数は多い方がいいだろう?」
「何言ってんのよ、あんたは!死にたいの!?」

「っ！来るぞ！」

黒いＩＳは千冬達二人へ巨大な腕を上げ接近してくる。二人はそれを迎え撃つため武器を構える

「行くぞ！鈴！」

「代表候補生の足引っ張るんじゃないわよ、千冬！」

二人は雪片と双天牙月を持って黒いＩＳへ斬りかかって行った

第13話　襲撃と天使

「織斑先生!二人が襲撃者と戦闘を開始しました!」
「・・・・・・・・」
アリーナ全体に避難警報をならし全生徒をアリーナから避難させて、二人もアリーナから脱出させようと山田先生は二人にオープンチャネルを開いた
「織斑さん、凰!今すぐアリーナから脱出してください!教員部隊が突入し制圧しに来ます!」
すると千冬が山田先生に返事を返してきた
《だったら!私達が時間を稼ぎます、まだ避難し終えてない生徒達が沢山います!》
「ですが!」
《私達の事は心配ないです!――――――っ!鈴来るぞ!》プツン
「織斑さん!?織斑さん!」
千冬との通信が切れた山田先生は焦りながら千冬へ再びオープンチャネルを開こうとするが、何かに妨害されオープンチャネルが開けなくなってしまった
「織斑先生!!二人への通信が途切れました!?」

「あぁ、わかっている。山田先生、避難状況は?」
「現在、BブロックとDブロックが避難完了していますが。A，C，Dのブロックの扉がロックされて避難が出来てない状況です!突然の襲撃に生徒達はパニック状態です」
　映像には突然の襲撃に混乱している生徒達が閉じ込められているブロックの映像が管制室のモニターから確認できた
「政府への救援は?」
「ダメです。何者かに妨害されて通信ができません!」
「ちっ!」
　政府への救援要請が出来なくなった事に一夏は舌打ちした。すると管制室にセシリアが入って着た
「織斑先生!」
「オルコットかそちらの状況はどうだった?」
「まだ半数以上の生徒と政府関係者が取り残されています。」
「敵ＩＳはアリーナのシールドを一撃で破る程の威力を持つレーザー兵器を使用しています。もし避難できていない生徒達にでも当たれば」
「死者が出るのも時間の問題だろうな。・・・オルコット!」
「はい!」

すると、一夏はセシリアを呼ぶと管制室を出ようと歩き出す
「今からお前には私の指揮下に入ってもらう。いいな？」
「了解しました！お任せ下さい！」
「よし、山田先生、此処は頼みます」
「ですが、アリーナに繋がるドアはロックされて開きませんよ!?」
「開かないのなら、〝こじ開ければいい〟――――――行くぞ、オルコット」
「はい！」
一夏はセシリアを連れ管制室を後にしアリーナへ向かって行った

その頃、千冬達は襲撃してきた黒い全身装甲のＩＳに苦戦を強いられていた。千冬は再度黒いＩＳゴーレムへ接近するが

「くそっ！」

大型の為動きは鈍いがその分反応が早く、両腕の拡散レーザー砲を放ってくる。千冬はレーザーをかわしながらまたゴーレムから距離をとってしまう

「あーもうっ！何なのよあんたは！」

鈴も衝撃砲でゴーレムへ狙いを定め衝撃砲を放つが軽く避けられてしまう。

「鈴！落ち着け」

「だって！」

「冷静さが欠けているぞ！代表候補生なら冷静さを保て！」

「うっ！」

「兎に角、私達は生徒達の避難が完了するまで時間を稼げればいい。後は一夏兄たちが何とかしてくれるはずだ」

するとゴーレムは再び巨大な腕を上げ千冬達へレーザー砲の砲口を向けてくる

「奴のレーザーキャノンをどうにかしない限り接近戦は無理よ！」

「やってみなければわからん！行くぞ！」

　千冬は再度ゴーレムへ接近戦を掛ける。先ほどと同じようにゴーレムからレーザーが放たれるが千冬は次々と自分へ向かってくるレーザーを雪片で切り裂きながらゴーレムへ接近する。そしてついにゴーレムの目の前までたどり着いた
「もらったぁぁぁ!!」
　千冬は零落白夜を発動し光の剣をゴーレムの腕を斬りおとそうとするが。もう片方の腕に顔を掴まれてしまう
「がっ！」
「千冬?!」
　千冬を掴んだゴーレムは反対側の観客席の方へ投げ飛ばした、鈴はそれを見て双天牙月でゴーレムへ斬りかかるがクルりと回ったゴーレムはその巨大な腕を振り鈴を投げ飛ばした
「キャァァァァァ!!!」
「鈴！・・・くそっ」
　ゴーレムは千冬へ体を向けるとレーザーキャノンを放つ。千冬はレーザーをかわし鈴の元まで後退し鈴を立たせる
「鈴、立てるか?」
「ええ」

千冬は鈴に肩を貸し共にゴーレムへ武器を構え警戒する、すると千冬はゴーレムへ疑問を抱いていた

「鈴。あのＩＳ何か変じゃないか？」

「どういう事よ」

「奴は私達が攻撃しようと時だけ私達に攻撃してくるが、こうやって私達が話している間だけあいつは攻撃してこない、変だと思わないか？」

「そ、そういえばそうよね。何でかしら」

ゴーレムはまるで二人を観察しているかのようにピクリとも動かない

「それにあの機械じみた動き、まるでロボットその物じゃないか？それに奴からは殺気も感じない」

「まさかあいつが無人機だというの？そんな技術あるわけが・・・」

『ＩＳは人が乗らないと動かせない』だとしたらそれを可能にできる人物は極限られる

「いや、もしかしたら〝あの人〟なら・・・っ!?」

「来るわよ！」

ゴーレムは千冬達へ高出力レーザーキャノンを放とうとする。あのアリーナのシールドを一撃で破壊したレーザーだ。あんなものをまた放たれたら避難が出来ていない生徒達に当たってしまう。そう考えた千冬達は急いでゴーレムを止めようと接近する

「鈴！まずいぞ！」
「私達が楯になってでも！」
　千冬は鈴の前に出て零落白夜を発動し雪片をゴーレムへ構える。零落白夜の対象のエネルギーをすべてを消滅させる能力を利用しレーザーキャノンをそれで切り裂こうと考えた。そしてゴーレムから高出力レーザーキャノンが放たれた
「鈴、覚悟はいいな？」
「此処まで来たんだから、出来てるわよ」
　そして徐々に高出力レーザーキャノンが千冬と鈴をロックし千冬達は覚悟を決めた、その時
『千冬!!!』
「っ!?」
　何事だと思い、千冬と鈴はハイパーセンサーで中継室の方を見た。そこには箒の姿があった。そこにいるであろう審判とナレーターはすぐ横で気を失っているのがわかる
『女なら…女なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとする！』
「バカ！お前、何を!?」
「あんたどういう神経して・・・はっ!?」
　肩で息を切らしながら、千冬に向けて喝を入れる。しかしその声を聴き、ゴーレムは

高出力レーザーキャノンを放った
「しまった!?」
「千冬!!」
二人は箒の想定外の行動によって気を取られ居る間に既に零落白夜の光は消え元の雪片に戻ってしまった。詰まり白式のエネルギー切れたのだ。そして高出力レーザーキャノンは真っ直ぐ千冬と鈴へと向かって行き鈴はエネルギーが切れた千冬を守るように覆い被さった、その時

空から緑色の光の粒子が降り注いだ

「「っ!?」」
すると自分たちへ放たれたレーザーキャノンが空から現れた一つの影に真っ二つに切り裂かれた。切り裂かれたレーザーキャノンは左右へ落ち爆発した。そのレーザー

キャノンを切り裂いた者の正体は
『すまない。無事だったか？二人とも』
　そこに居たのはアメイジングＧＮソードにＧＮ粒子を収束させ緑色のツインアイを光らせるアメイジングエクシアの姿だった
「一夏兄!!／一夏さん!!」
　二人は一夏の姿を見て驚きの声を上げた。そしてゴーレムはアメイジングエクシアの姿を確認するとエクシアへ接近してきた。二人はゴーレムへ武器を構えるが一夏が腕で静止させる
『お前達は生徒の避難を、此処は私に任せておけ』
　一夏はそう言うとＧＮドライブからＧＮ粒子を放出しアメイジングエクシアはＧＮソードを後ろへ引きながらゴーレムへ接近する。ゴーレムは巨大な腕が届く距離まで来るとその腕でアメイジングエクシアを殴りかかってくる
『動きが単純だ』
　一夏はそのままゴーレムへジャンプし体をクルクルと高速で回しゴーレムの腹部に蹴りを入れた。ゴーレムはアメイジングエクシアの蹴りを喰らいゴーレムは後ろの方へ蹴り飛ばされた
『・・・・・・・・』

ソードモードからライフルモードに切り替えゴーレムへ粒子ビームを放つ、ゴーレムは腕で粒子ビームを受け止め、体を起こすと空へ飛ぶが一夏がそれを許さない

『行かせると思うか?』

ゴーレムの飛ぶ先にＧＮブレイドとＧＮショートブレイドの両方を持ったアメイジングエクシアがそこにいた。アメイジングエクシアは二本の剣を振るいゴーレムの右腕と左足を斬りおとした。斬られた右腕と左足からオイルの様な物が勢いよく吹きだした

『やはり殺気が感じ取れないと思っていたが、無人機だったか』

「む、無人機!?」

「やっぱり」

鈴は驚き千冬は納得した表情で一夏とゴーレムの戦いを見ていた。そして一夏はゴーレムの頭を右腕で掴むと左腕に装備されたＧＮバルカンをゼロ距離で放った。ゴーレムの体中に小さな穴が空いていく

『・・・・・・』

一夏はゴーレムを上へ投げ

『狙いは?』

「完璧ですわ!!」

アリーナのカタパルトからスターライトＭｋ―Ⅲを構えたセシリアがゴーレムへＭｋ―Ⅲの最大出力のレーザーを放った。レーザーはゴーレムを貫通し地上へ落ちていくとゴーレムの赤い複眼から光が消えゴーレムは機能を停止した

『終わったか・・・・』

一夏は地上に着地すると千冬達も元へ駆け寄った。

『無事で何よりだ。お前達』

「い、いえ!そんな」

「まぁ、その…さっきは助かった、ありがとう。一夏兄」

『気にするな。お前達は先に《ピピピピ!!》っ!?』

――――――警告!ロックされています!――――――

一夏はアメイジングエクシアが映し出したモニターを見て後ろを振り向くとそこには下半身がなくなって右腕がないボロボロのゴーレムが高出力レーザーキャノンを向けていた。一夏はそれを見てＧＮダガーを二本展開し投擲しようとした時、ゴーレムの周りに青い小型のビットの様なものが現れビットはゴーレムをレーザーで貫いていきゴーレムは爆発を起こした

『……あれは』

一夏はふと上を見上げると、そこには一機のＩＳが飛んでいた。全体が青でカラーリングされ形状は蝶の様なデザインをした機体で顔は白いバイザーで覆われていた。ゴーレムを破壊したビットはそのＩＳの周りに集まり待機した。それを見たセシリアはまるでありえないものを見ているかのような顔をした

「そ、そんな…ＢＴ二号機サイレント・ゼフィルス…どうしてあの機体が此処に」

一夏はそのＩＳの所まで飛ぶとアメイジングＧＮソードをサイレント・ゼフィルスへ向ける

『貴様は誰だ?』

「……ふふ」

サイレント・ゼフィルスの操縦者は一夏の問に笑うとビットがアメイジングエクシアへ向かってきた。一夏はサイレント・ゼフィルスから距離を取りＧＮダガーを四本を投擲し四つのビットを破壊し残り四機となったビットはライフルモードで撃ち落としていき、最後の一機をソードモードで切り裂いた

『…逃げたか』

気がつくとサイレント・ゼフィルスはいなくなっていた。一夏はＧＮソードの刃を収納し青い空を見上げる

『亡国機業……か』
一夏はそう言うとＧＮドライブを動かしＧＮ粒子を放出しながらアリーナへ帰還していった

そして一夏から逃げたサイレント・ゼフィルスの操縦者、織斑マドカはスコールと通信をしながらステルス機能を使って脱出ルートを通っていた
《ご苦労様、エム。おかげで無人機の破壊に成功したわ》
「それで、今回の任務は終わりか？」
《ええ、次の機会はＩＳ学園の文化祭でしょうし、これで任務は終わり》

「そうか…」
《それで、どうだった？一夏は》
「あぁ。強かった、流石兄さんだ。私のビットをたった数秒で全機破壊したよ」
《ふふ♪、そう》
マドカは顔が隠れたバイザーの中でとてもうれしそうな顔をしていた
（織斑一夏…顔は見えなかったが、いつかあなたと）
「エム、これより帰還する」
マドカはスラスターを吹かすと高速で空域から離脱していった

第１４話　持つ者と持たざる者

　サイレント・ゼフィルスが離脱した後、一夏はゴーレムの残骸を教員部隊に任せエクシアを解除し管制室へと戻るとＩＳ委員会の人間が来ていた。山田先生はオドオドとした表情で管制室に戻って来た一夏を見る
「織斑一夏君、ご苦労だった。流石はジークフリートだ、腕は鈍ってない様で」
「俺をその名で呼ぶなと何度言ったらわかる？委員会共」
　一夏は半ば敵意を込めた目で委員会の人間を見る。
「それにしても、君のＩＳ・・・確か、ガンダム。だったかな？とても素晴らしい機体だ。従来のＩＳとは違い装甲は全身装甲、並びにビーム兵器の小型化、実に素晴らしい」
「・・・・・・・・」
「そしてあのコーン型のスラスターから放出さらる、光の粒子。実に興味深い、通信機能とレーダー機能を妨害出来ると言うじゃないか」
「言いたいことがあれば、はっきり言ったらどうだ？」
　すると委員会の男は「ふむ」と言うと一夏に手を差し出す
「単刀直入に言おう、織斑一夏、君のＩＳのスペック、全てのデータを我々に提供してい

ただきたい、ガンダムが量産されればＩＳは更に進化する」
　男は両手を広げてそう一夏に言うが一夏は
「断る」
「・・・・何？」
「断ると言った。先日もそちらからのデータの提供は断った、俺の元に来ればデータを提供してもらえると本気で思っていたのか？」
「貴様！委員会に逆らうｎ・・・ひっ!!」
「・・・・・・・・」
　男の隣にいた女性が一夏に怒気を放ってくるが一夏がその女性に視線を向けると女性は震え始めた、まるで化け物を見ているかの様に
「・・・なめられたものだな、まさかこの俺がお前らの様な人間に大人しくガンダムのデータを提示すると思もわれていたとはな・・・調子に乗るなよ」
「「っ!?」」
「束の夢を笑い、束の作った夢の力を人殺しの兵器に変えた挙句。兵器に心を奪われ、その所為で多くの子供が兵器を扱うようになった・・・・」
《たばねさんね～！あのそらのむこうにいきたいんだ～！》

《そうなのか?》
《うん!だって、あのそらのむこうになにがあるのか、たばねさんしりたいんだ～!》

一夏は小さい頃の事を思い出すとアメイジングＧＮソードを展開しＧＮソードの刃を委員会の三人に向ける。国際問題になってもおかしくないのにも関わらず一夏は委員会の三人に完全な敵意と拒絶を与えている
「俺はいずれ、ＩＳを・・・・束の夢だった、『宇宙進出』の力としてＩＳを本来の姿に戻す。それが俺と束の罪にして夢だ。・・・・それを邪魔す奴は・・・俺が全て破壊する」

一夏がそう言う委員会の三人は蜘蛛の子を散らすように管制室から逃げて行った。
一夏を一息つくとアメイジングＧＮソードをイコライザへ収納すると管制室にある椅子へと座る
「あ、あれでよかったんですか?」
「別に構わん。・・・・それよりも被害状況は?」
「えっと・・・・Ｆブロックと Ｃブロックの防御シールドが全壊であとは何も」
「そうか・・・・死者は出てないんだな?」
「負傷者は何人か」

すると一夏は椅子から立ち上がると管制室の扉へ歩いていく
「・・・・・山田先生、此処は任せます」
「どちらへ？」
「馬鹿どもの所へですよ」
山田先生の方へ振り向きそう言うと管制室から出ていった

その頃、千冬達は医務室のベットに横たわっていた。千冬は腕や足に包帯を巻いてセシリアから心配されていた
「千冬さん、大丈夫ですの？」
「あぁ、大丈夫だ。かるい打撲ですんだんだ、それほど心配する必要はないぞ」

「ですが！」
「ちょっと!!何んであたしを無視してんのよ！」
　千冬の隣で同じように頭に包帯を巻いて寝込んでいる鈴はセシリアへ怒鳴りつけるが
「あら？居ましたの？二・組の鈴さん」
「こォ、この女・・・・いつか殺す」
「おっほほほほ！」
　セシリアは寝込んでいる鈴を上から眺めながら笑い、鈴は殺意に満ちた視線を向ける。すると箒がセシリアの隣に来る
「千冬、怪我は大丈夫か？」
「大丈夫だ、それより箒。さっきの事だが」
　すると医務室のドアが開けられそこから一夏が入って着た。いつもの黒いスタイリッシュなスーツを着て千冬の元へ来た
「織斑、凰、怪我は大丈夫だったか？」
「い、一夏兄！・・・あ、うん。だ、大丈夫だ」
「わ、私も、だ、大丈夫です・・・・」
「そうか、ならよかった。それとオルコット、よくやってくれたな」

「い、いえ・・・そんな大したことは／／／／」
セシリアは一夏からよくやったと言われセシリア顔を赤くし両手で自分の顔を隠す。
一夏はセシリアの横にいる箒の前へ来る
「篠ノ之」
「は、はい――――――」

パシィィィィィィィィィィ!!!

「っ!?」
「え?・・・・・・・」
「い、一夏兄!?」
一夏は箒に向かって平手打ちをした。いきなりのことで箒は後ろへ倒れ尻餅をついた。千冬達も一夏の行動に驚いた表情をしていた。
「何故叩かれたか、わかるか?」
(まさか・・・・あの時の事か?)
ゴーレムとの戦闘の時、箒が中継室を占拠し審判とナレーターを気絶させて自分達に叫んでいた事を千冬は思い出した、一夏は箒の胸倉を掴み無理やり立ち上がらせる。箒

は今だに状況が理解できていない様に見えた
「えっと・・・・あの」
「もう一度聞く。篠ノ之、何故叩かれたか、わかるか？」
「・・・・・・・・・」フルフル
「・・・・・・・・・」

パシィィィィン！

一夏は首を振る箒にもう一度平手打ちをした。箒の頬は更に赤くなり腫れ上がる、一夏の顔はいつもの無表情とは違い怒気が込められた表情で箒を見下げていた
「・・・・・篠ノ之、あの無人機のとの戦闘の時、何故中継室を占拠し千冬達の戦闘の邪魔をする様なことをした？」
「っ!?」
「もう一度聞く、何故あんな無謀な事をした？」
「・・・・・・私は・・・私は自分に出来る事を」
「それがこれか？」
「・・・・・・・・っ」

一夏は箒を椅子に医務室の椅子に座らせ、一夏は立ったまま箒を見下げる。
「もし、あの時救援が間に合わなく、織斑や凰が無人機の対処に間に合わなかったら、どうなっていたと思っている?あの場に居たお前が気絶させた審判とナレーターが死んでいたところだったんだぞ」
「そ、それは・・・・」
「・・・・・お前が力を求めるのはわかる、だが今のお前には力がない」
「・・・・・・・・・」
『力がない者が戦場に出るな』とは言わない。だがな篠ノ之」
「「「っ!!!?」」」

「味方を・・・そして関係のない人間を殺すような真似だけはするな」

覇気と怒りの感情が一夏から放たれる。するとセシリアと鈴が突如として倒れた、千冬と箒は二人が倒れことに意識を向いてる暇はなかった、立っているだけで精一杯だった。一夏はそのまま医務室のドアノブに触れる所で一夏は口を開く
「千冬」

「あ、あぁ・・・・」
「オルコットと凰が気がついたら、『すまない』と言っててくれ」
一夏はそう言うと医務室から出ていった

その夜、学園地下の研究室で襲撃したゴーレムの残骸を山田先生と共に解析していた。その暗い部屋の中でゴーレムの解析をしているが
「山田先生、どうだ？」
「損傷が酷く解析が出来ませんでした、コアも完全に破壊されており、修復は無理かと」
「・・・・・それで、サイレント・ゼフィルスの行方は？」
「わかりません、学園のハイパーセンサーから突然消滅しましたので、しかしあのＩＳは一体何の目的で」

「わからん。だがこの無人機の破壊が目的だったことはわかった」
　投影ディスプレイにビットでゴーレムを破壊するサイレント・ゼフィルスと自身のアメイジングエクシアが戦っている映像が映し出されている、一夏はそれを見ながら山田先生は一夏に話しかける
「織斑先生、あのＩＳの裏には・・・・・もしかして」
「山田先生、あなたの考えている通り、サイレント・ゼフィルスを送り付けて来たのは恐らく『亡国機業』だろう。あれ程の腕を持つテロリストと言ったら奴らしか考えられん」
「それと、織斑先生」
「ん？」
「あの・・・・委員会の方々にあんな態度とって・・・よかったんでしょうか」
「なんだ？心配してくれるのか？」
「と、当然ですよ！も、もし！織斑先生の目に何かあったら！」
　一夏は山田先生の焦った顔を見て苦笑すると、山田先生の肩をトンっと叩く
「心配するな、何があろうとも俺がこの学園を守る。委員会が来ようとも俺は奴らに屈したりしない、もし奴らが裏の人間を使って生徒を襲うような事があれば・・・・下手をすれば世界を敵に回すかもしれんがな」

「どんな奴が来ようとも、この学園に指一本触れさせやしないさ」

第15話　フランスの貴公子とドイツの黒ウサギ

千冬ＳＩＤＥ

「なぁ～千冬～」

「なんだ？弾」

「何でお前、俺んちにいるんだ？」

「偶々、お前の家の前を通りかかったからな久し振りにお前に会おうと思って」

襲撃事件から数日が経ち私は山田先生に外出届を出して家の様子を見に行く途中、中学の友人だった弾の家を通りかかった為、こうして弾の部屋でテレビゲームをダラダラとやっている

「あぁ～！また負けた！」

「これで二勝一敗だな、弾」

因みに今プレイしているゲームは『Ｉ　Ｓ／Ｖ　Ｓ』《インフィニット・ストラトス／ヴァーストスカイ》発売日当日に完売し百万本セールスを記録した超名作ゲームだ。ゲームのデータは第二回モンド・グロッソのデータが使われている、流石に一夏兄のデータはないが

「それよりもさ千冬！ＩＳ学園ってやっぱ女の子しかいないんだよな！」
「それはそうだろう、例外は一人いるが」
「畜生！いいな～一夏さん、俺もＩＳが動かせればな～」
「ボッチになるのが確実だぞ、弾」
「ですよねー・・・・そういえば鈴の奴も来たんだろ？」
「あぁ、相変わらずだったよ。あの中国娘は」
　すると、弾の部屋のドアが勢いよく開けられドンっ！と鳴り響いた
「おい愚弟！いつまで部屋にいるつもりだ？飯が出来たって言ってんだろうが」
　そこには弾と同じく赤い髪にバンダナを巻いて肩まで伸びた髪をクリップで挟んだだけの状態でショートパンツにタンクトップというラフな格好をした女性がいた。タンクトップに閉じ込められた大きな胸が窮屈そうに見える
「ね、姉ちゃん・・・か、帰ってたのか」
「たりめぇだろうが。・・・・久し振りだな千冬ちゃん」
「お、お久しぶりです・・・蘭さん」
　この人は弾の姉の五反田　蘭さん。一夏兄とは昔からの知り合いで中学校時代はよく一夏兄とぶつかりあったらしい（主に喧嘩が）今は世界各地を旅していると弾から聞いてはいたが

「千冬ちゃんも食って行けよ、味は落ちてねぇからよ」
「は、はい。お言葉に甘えて・・・ハハハ」(;・ω・)
正直に言うと私はこの人が怖い。初めてこの人と出会った時、弾を壁にめり込ませて笑っていた、あれは怖かった、正直一夏兄と並ぶかも知れないと心の底でそう思った。蘭さんが此処までグレたのは一夏兄による悪影響だと思われる、すると蘭さんはそのまま階段を下りて行った。下りて行ったのを確認すると私は弾に今の気持ちを伝える
「弾」
「なんだ、友よ」
「やっぱり、お前の姉さん、怖いな」
「とほほ・・・・」
その後、食堂でご飯を食べながら蘭さんに一夏兄の事やＩＳ学園での事を話すと「私もＩＳ学園の教師になろうかな～」と蘭さんが恐ろしい事を言ってきた。やめてください、そして教師にならないでください！また来ないでください！鬼二匹は私の学園生活が！

そして次の日いつもの様にホームルームが始まるはずだったが、山田先生の言葉にクラスメイトがざわめき始めた
「ええぇと、ですね。今日はなんと転校生を紹介します！しかも二人です！」
「ん？」
「「「えええええっ!?」」」
こんな時期にまた転校生か？まぁ世界各国からＩＳを学ぶ少女達が集まる学園だ。
こんな事は当たり前なのか？
「では、入って来てください！」
すると教室のドアが開いた
「失礼します」
「・・・・・・・・」
クラスに入って来た二人の転校生を見て、ざわめきが止まる。一人は銀髪に左目に眼帯を付けた少女だ、そしてもう一人は
「シャルル・デュノアです。フランスから来ました、この国では不慣れな事が多いかと思

いますが、みなさんよろしくお願いします」

その転校生の一人は一夏兄と同じ男だったのだから――――――

「お、男?」

クラスの誰かがそうつぶやいた

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――――」

人懐っそうな顔。礼儀正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ねている。印象は『貴公子』といった感じだ、特に嫌みのない笑顔が眩しい

「「「きゃあああああああああ――――――っ!」」」

来たぞ!うちのクラスの合体技。ソニックヴェーブ・ボイスが!教室の窓がヤバい、どんどん亀裂が入って行ってる!一夏兄は無表情で手元に持っている本を眺めていた、何!?ソニックヴェーブ・ボイスが効いてないだと!?ていうか普通に本を読んでいる!?

「騒ぐな、静かにしろ」

「「「っ!!」」」サッ!!

凄い。一夏兄のたった一言でクラスメイト全員黙った。一夏兄いい加減その本閉じようよデュノアが涙目だよ全然相手にされてなくて泣いてるよ!?

「うっ・・・・」

デュノアやつ・・・可哀そうに全く興味を示さない一夏兄に泣くのを我慢してるよ

「皆さん、お静かに!まだ自己紹介は終わってませんよ!」

そうだまだもう一人いたな、二人目の男性操縦者の登場で忘れかけていた

「・・・・・・・・・」

輝くような銀髪。ともすれば白いに近いそれを、腰近くまで長くおろしている。綺麗ではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという印象がある。そして左目には眼帯。医療用のものではない、一夏兄と同じ黒い眼帯だ。

「・・・・・・・・・」

本人は腕を組んだままクラスの女子達を下らなそうに見ている。だがそれもわずかなことで、今は視線をある一点に向けている――――――本を読んでいる一夏兄にだけ視線を向けていた。すると一夏兄はその視線に気づいたのか手元に持っている本を閉じると椅子から立ち上がり椅子に本を置く

「・・・・挨拶をしろ、ボーデヴィッヒ」

「はい、教官」

教官？

「此処ではそう呼ぶな、私はもう教官ではない。ここではお前は一般生徒だ、私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ボーデヴィッヒはそう答えると足をかかとで合わせて背筋を伸ばし――――――敬礼をした。あれはどう見ても軍人の立ち振る舞いだ

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「「・・・・・・」」」

クラスメイト全員、沈黙している。流石のクラスメイト達も気づいたのか？

「あ、あの・・・以上ですか」

「以上だ」

ボーデヴィッヒの視線が私を捕える。ボーデヴィッヒはそのまま私の机の前に来る

「貴様がッ！」

パシィンっ!!

「え？・・・・・」

「・・・・・・・・」

いきなり、叩かれた。それも無駄のない平手打ちだった

「認めるものか、貴様があの人の妹など・・・認めるものか！」

これがラウラ・ボーデヴィッヒとの初めての挨拶だった

ＳＴＡＧＥⅡ　輝きを追う者たちへ

第１６話　天使の感

「いきなり何をする!!」
　千冬は思考を現実に戻し自分に平手打ちをしたラウラに席から立ち上がり言う
「・・・・・・・・・」
　ラウラは千冬の言葉を無視し自分の席へ向かおうとする。すると
「おい。初対面の相手にいきなり暴力を振るうとはどういう事だ」
「・・・・・・・・」
　ラウラは声が聞こえた方へ顔を向ける。そこには怒気を放つ箒が立っていた、千冬がいきなり殴られた事に腹が立ったのだろう。ラウラは興味がなくなったのか再び前を向いて先に進もうとする
「おい！聞いているのか!!」
　箒はラウラの手首を掴んだ。するとラウラは箒の腕を振り払うと後ろへ引き制服の右袖の隙間から黒いサバイバルナイフを取り出した、それを見た箒はサバイバルナイフを持った方の腕を掴みラウラを投げ飛ばす

「ほう」
　投げ飛ばされたラウラは冷静に体制を立て直し綺麗に着地すると箒を睨み付ける。ラウラはサバイバルナイフを逆手に持ち変える
「『アイキ』か面白い！」
「篠ノ之流だ！こい!!」
　等々箒も何処から出したのか分からない木刀を手に取りラウラと睨み合う。そして二人が武器を構えた瞬間
「うぅっ!?」
　武器を構えた二人の後ろ首を誰かが鷲掴みした。二人は突然後ろ首を掴まれ動きが止まってしまった。箒とラウラはその体制のままクラスメイトの顔を見る。全員見てはいけない物を見てしまった様な顔をしており、千冬やセシリアは箒と視線が合うと目を逸らした
「おい」
「・・・・・・・」（；・ω・）
　二人はそのとてつもなく低い怒気を聞きゆっくりと後ろを見る。まず先に見えたのはしわが一つもない綺麗な黒いスタイリッシュスーツ。今はＳＨＲ当然そこには先生

がいる、当然〝先生〟も二人は恐る恐る上を見上げた、その顔を見た瞬間、顔から大量の汗が出て来た。そこには『鬼』が立っていた

「きょ、教官・・・」

「い、一夏さん・・・」

二人はそれぞれ、その『鬼』と化した先生の名を言う

「織・斑・先生だっ!!!」

ゴスゥゥゥゥゥゥンっ

ゴスゥゥゥゥゥゥンっ!!!!!!!!!

鬼と化した一夏は首を掴んでいた両手を拳の形にし二人の頭に『カーディナル・ストライク・ナックル』（貫く鬼教師の拳）を二人の頭に容赦なく殴り着けた

「「――――――」」バタン

昔のドラ○もんの漫画にあった、ジャ○アンがのび○の顔を拳で陥没させた場面の様に一瞬陥二人の頭が没した様に見えた一組と巨乳眼鏡教師。二人は頭に大きなたんこぶが出来たままそのまま倒れた。一夏は手を数かい叩くとクラスメイト達を見る

「では、これでＨＲを終わる。全員第二グラウンドへＩＳスーツを着て集合、今日は二組と合同でＩＳ模擬戦を行う。山田先生」

「は、はいいいい！、で、では皆さん！つ、次は実習ですので第二グラウンドへ集まってください!!」
　山田先生はそう言うと皆猛ダッシュで教室を次々に出ていく。残ったのは千冬とセシリアだけになった
「さて、どうしたものか」
　一夏は頭のたんこぶから煙を出して気絶している箒とラウラを見る。するとラウラがゆっくりと立ち上がろうとした、頭を押さえながら痛みを耐えている
「うっ・・・きょ、教官・・いきなり何を」
「此処では織斑先生だ。私はもうお前の〝教官〟ではない。授業の支度をしろ、いいな？」
「・・・・・はっ！」
　ラウラは複雑そうな表情するが、持ち直し一夏に敬礼するとラウラも教室を出ていった。ラウラが出ていったのを確認すると千冬は一夏に話しかける
「いち・・・織斑先生、ボーデヴィッヒとはどんな」
「お前も早く第二グラウンドへ行け。私は先にデュノアを連れて行く、山田先生。すみませんが篠ノ之をお願いします」
「い、イエッサー!!」

（（何故に英語？））
「うむ、では、付いて来いデュノア」
「うぅ・・・は、はいぃ」
何故か英語で返事をし一夏に敬礼する山田先生。そして先ほどまで全く興味を示さなかった半泣きのデュノアを連れ教室を出ていった

一夏は男子専用の更衣室へシャルルを連れ廊下を歩いている。シャルルはそんな無言の中一夏に話しかける
「あ、あの織斑先生」
「何だ？デュノア」
「あの、驚かないんですか？」
「何がだ？」
一夏は前を向いたまま廊下を歩く、二人目の男性ＩＳ操縦者なのに驚かないのかと
「僕も先生と同じ男性操縦者なんですよ？」
「驚く必要があるのか？」

「い、いえ!」
　一夏とシャルルが話している内にロッカールームにたどり着いた。二人は部屋に入りそれぞれロッカーの前に立ち一夏はブレザーを脱ぐと次にカッターシャツのボタンに手を持っていく
「時間がない、急いでお前も着替えろ」
「うわっ!／／／／」
　シャルルは一夏のシャツを脱いだ一夏の体を見て手で顔を隠す。一夏はそんなシャルルを見て一夏は向こう側のロッカーに指を指す
「・・・・・お前は向こうのロッカーを使え」
「えっ!?い、いや!大丈夫ですよ!た、ただ・・・その・・・／／／」
　シャルルは遠慮するように一夏に言おうとするが、次に一夏が言った言葉に顔を青ざめることになる
「安心しろ、お前が〝小娘〟であることなど、当に気づいている」
「っ!?」
　それを聞いたシャルルは青ざめた表情で、一夏を見る。自分の正体が既に一夏が気づいていた事にシャルルは心臓をバクバクさせていた。一夏は着替え蒼いパイロットスーツに着替えるとロッカーの扉を閉めロッカールームを出ようとする

「デュノア、一つ言っておく。貴様が何の目的で此処に来たのかは大抵予想がついている、もしお前が生徒を人質にして目的を達成しようするなら、私は貴様を容赦なく無力化する」

「・・・・・・・・」

「言いたいことがあれば、私の部屋に来い。話しは聞いてやる、教師としてな」

一夏はそう言うとロッカールームから出ていった。出ていったのを確認したシャルルは腰が抜けた様に冷たい床に座り込む

「・・・・・・流石・・・ジークフリート・・・見事に見抜かれたてたなぁ」

シャルルは立ち上がり特注で制作した男性用ＩＳスーツを着るとロッカーを閉める

「・・・・お母さん、僕あんな優しい人に・・・助けを求めても、いいのかな・・・・お母さん」

専用機の待機状態であるオレンジ色のペンダントを強くに握りしめながら震えた声でそう言う

「・・・・いかなきゃ」

このまま授業に遅れる訳にもいかないとシャルルは急いで第二グラウンドへ向かっていった

第１７話　実習と実戦と過去

「全員列になって並べ！」
　第二グラウンドへ何とか遅刻せず到着した一夏はグラウンドに集合していた生徒達を並ばせる、すると遅れてシャルルが来る
「デュノア急いで並べ、お前は一組の列の一番後ろだ」
「は、はい！」
　シャルルは一夏の指示に従い一組の一番後ろに並ぶ
「では、これより格闘及び射撃を含む実戦訓練を行う」
「はい!!」
　一組と二組の合同授業の為か千冬達を省いた生徒達は気合を入れた返事をする
「今日は実際の戦闘を見てもらう。オルコット、凰。前にでろ」
「「はい！」」
　一夏に指名されたセシリアと鈴は一夏の前に出てくる
「織斑先生、それでお相手は誰なんですか？わたくしは鈴さんとのお相手でも構いません」

「ふん、それはこっちに台詞よ。返り討ちにしてあげるわよ」
「慌てるな、馬鹿共。お前達の相手は――――――ん？」
キュピィィィィィィイン・・・・・・
一夏は○ュータイプ的な直感で上を見上げる、すると青い空から一筋の光が現れる。空気を切り裂く様な音を出しながら何かがこっちに落ちて来る
「あああああーっ！――――――ど、どいてくださ～いっ！」
その正体は深緑のＩＳを纏った一組の副担任の山田先生だった、一夏はそれを見て溜め息をつくとアメイジングエクシアを起動し纏うとＧＮ粒子を放出し山田先生の元へ飛翔する
（っ!!こ、この感覚は・・・まさか!?）
アメイジングエクシアを纏った一夏が山田先生の元へ飛んで行くのを見た千冬は一夏と同様○ュータイプ的な直感を感じると自身も白式を纏い一夏の後を追いかける形で飛翔した。それを見た鈴とセシリア、箒は驚いた表情で千冬へ叫ぶが今の千冬には三人の声は聞こえていなかった
「やらせはせんっ！やらせはせんぞぉぉぉぉ!!」
『っ!?』
千冬の変わった声をオープンチャネルで聞いた一夏はとっさに横へ避けると千冬は

そのまま
「えっ!?お、織斑さん!?えっ!?ちょ！」

ドーーーーーーン!!!

頭から山田先生と激突した

「貴様は終わるまでそこで反省していろ!!馬鹿者!!」
「・・・・・・・・」シュュュュュュ・・・・
山田先生と激突した千冬は頭に一夏に殴られただろうと思われる大きなたんこぶから煙を出しながら正座をしていた、何とか山田先生は無事だったが
「山田先生、怪我はありませんでしたか？」

「は、はい！何とか」
「後できちんと言いつけておきます」
　一夏は小さく頭を下げると次の行動に移る
「さて、織斑の事は後にして。オルコット、始めるぞ」
「え？二対一・・・で、ですか？」
「流石にそれは・・・・」
　セシリアと鈴は引きつった顔で山田先生の方を見るが、一夏はそんな二人に対し
「安心しろ、私の〝元〟教え子だ、お前達じゃすぐに負ける」
「っ!?」
『えええええっ!!?』
「あはは・・・／／／／」
　それを聞いたセシリアと鈴は瞳に闘争心を燃やし始めた。そんな二人の目を向けられている山田先生は頭を掻きながら惚けた顔をする
「そ、それは本当なんですの!?山田先生!!」
「マジ!?」
「は、はい。そうなんです、いや～・・・／／／／」
「それに山田先生はこう見えて元日本代表候補生だ、甘く見ていると足元をすくわれる

ぞ」
「む、昔の話ですよ・・・代表候補生止まりでしたし」
　山田先生は元ＩＳ学園の卒業生で元一夏の生徒で、その後日本代表候補生選抜試験に合格し日本代表候補生となった。すると、セシリアと鈴はお互いＩＳを展開し山田先生の前に出る
「では、始め!!」
　号令と同時にセシリアと鈴は空へ飛翔する、それを一目で確認した山田先生も飛翔する
「手加減は致しませんわよ!」
「織斑の元教え子の力ってのも興味あるしね!」
「い、行きます!」
　言葉こそいつもの山田先生だが、その目は鋭く冷静なものへと変わる。先制攻撃として先に鈴が空間圧兵器である龍砲を放つが山田先生はそれをいとも簡単にかわす
「さて・・・・デュノア」
「は、はい!」
「山田先生が使用している、ＩＳの解説をしてみろ」
　空中での戦闘を見ながら、シャルルはしっかりとした声で説明を始める

「山田先生が使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代開発最終期の機体ですが、そのスペックは初期第二世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七ヵ国でライセンス生産、十二ヵ国で正式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え《マルチロール・チェンジ》を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多い事でも知られています」

「あぁ、一旦そこまでいい――――終わるな」

シャルルの説明で戦闘がどうなっていたのか忘れていた生徒達が改めて戦闘がどうなっているのか空を見上げと、山田先生の射撃がセシリアを誘導し鈴とぶつかる所に左腕に内蔵されたアンカーワイヤーを射出しセシリアと鈴をワイヤーで拘束した

「ちょ！あんた何やってんのよ!?」

「鈴さんこそ――――」

二人が言い争ってるうちに山田先生はグレネードランチャーを量子展開し呼び出すとセシリアと鈴へグレネードを放った。グレネードは二人へ直撃し爆発、煙の中から二人が地上へと激突した

「くっ！・・・うぅ・・あんたねぇ何面白いように回避先読まれてんのよ・・・・」
「り、鈴さんこそ！ばかすか衝撃砲を撃つのがいけないんですのよ！」
「ぐぐぐぐぐ・・・・っ！」
「ぎぎぎぎぎ・・・・っ！」
　凸と凸を強く押し付け合い睨みあう二人
「さて、これでお前達にもＩＳ学園教員の実力が理解できただろう。以後は敬意を払って接するように、いいな？」
「はい!!」
　一夏は一組と二組の生徒達にそう言うと次の指示を出す
「専用機持ちの織斑、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒは八人グループを作って実習を行う。各グループリーダーはお前達専用機持ちがやること、いいな？では、分かれろ！」
　その後シャルルの所に殆どの女子が詰め寄って殆ど実習が出来ないのは、また別の話

千冬ＳＩＤＥ

「あぁ～痛い目にあった・・・・」

放課後後私は一夏兄にこっぴどく説教された後寮への道を歩きながら私は実習の時に殴られた所を撫でながら歩いていた

「大体、私がカバーしてあげたのだから別にいいだろうに・・・・ラッキースケベも回避できたわけだし」

本当なら感謝されたい。そう思っていると〝あいつ〟の声が聞こえた

「何故、こんな所で教師などと!!」

「やれやれ」

曲がり角の方からボーデヴィッヒの声が聞こえ、木の陰に隠れながらその場所を見ると、そこにはボーデヴィッヒと腕を組んだ一夏兄がいた

「何度も言わせるな。私には私の役目がある、ただそれだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

如何やらボーデヴィッヒは一夏兄の今の現状に不満を抱いている様だった、ボーデ

ヴィッヒは更に続ける
「お願いです、教官！我がドイツで再びご指導を、此処ではあなたの能力は半分も生かせれません！」
「・・・・」
「大体、この学園の生徒など教官の教えるにたる人間ではありません」
「何故だ？」
「意識に甘く、危険感に疎く、ＩＳファッションか何かと勘違いしている、そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど――――――」
「だか、こうして生徒達にＩＳはファッションでもなければスポーツでもない。ただの人殺しの兵器だと教えているつもりだが？」
　一夏兄はボーデヴィッヒに顔を向けずそう言う。確かに一夏兄はＩＳはスポーツではなく人を殺す兵器として認識しろと教わった。一組の殆どが皆ＩＳをスポーツという競技用から兵器と意識を変えた
「ですが！」
　すると学園のチャイムが二人の会話を終わらせるかのように鳴り響いた
「さて、もう寮に戻る時間だ。早く自分の寮へ戻れ」
「・・・・・・・・・」

話を切り上げた一夏兄がそう言うとボーデヴィッヒ黙ったまま早足で去っていった。
一夏兄は「はぁ・・」とため息をつくとその場に座る
「そこの、女子。盗み聞きか?異常性癖は感心しないな」
「・・・・・・やっぱり気づかれてたか」
「俺は誰だと思ってる?お前を育ててきた兄だぞ?」
「っ・・・・・・」
まぁ確かに私は一夏兄に育てられて生きて来たからなぁ、私はそう思いながら一夏兄の隣に座る、目の前には綺麗な夕日が明るく照らされている。私は一夏兄の肩に頭を預ける
「・・・・・なぁ一夏兄」
「何だ?」
「ボーデヴィッヒが・・・あそこまで、私を敵視しているのは・・・・あの事件の事なｎ」
私がまだ話してる途中で一夏兄は私の頭に手を置いた
「っ・・・・」
「お前が気にする必要はない、これは俺の問題だ」
「けど!」
「・・・・・・ボーデヴィッヒは、俺達とは違って、あいつはずっと一人だったんだ」

「え?・・・・・・」
「ボーデヴィッヒは人工的に作られた人間で、両親を持たず『戦う為の道具』としてあいつは生きて来た、それが存在意義だと言ってな」
「戦う・・・為のだけの道具・・・・・」
「そうだ、ありとあらゆる兵器の操縦方法や戦略などを体得し、良い成績を収めてきた。だが、ＩＳが出て来てから、あいつの人生は変わった」
「・・・・何があったんだ?」
「・・・・・ドイツ軍には『越界の瞳』《ヴォーダン・オージェ》というＩＳとの適合性向上のために行われる処置が施されたのだが左目が金色に変色し、能力を制御しきれず以降の訓練では全て基準以下の成績となり。このことから出来損ないのレッテルを張り付けられた。私が初めてドイツ軍に来て最初の訓練を行った時、あいつは一人物陰の隅で座り込んでいたんだ、周りの小娘共は何の気にもせずな」
　何て奴らだ・・・それが、人間がやることなのか?ボーデヴィッヒは軍の為に頑張って来たんだろう?なのに、そのヴォーダン・オージェの能力が制御しきれなかったってだけで、出来損ない扱いをするなんて・・・・・あいつはそんな奴らの中で生きて来たのか
「当時のボーデヴィッヒは他人とのコミュニケーションがうまく出来なかった、俺でも

あいつを立ち直らせるのに苦労した、そしてあいつは徐々に成績も上がり強くなっていった」
「そうだったのか・・・・」
一夏兄のおかげでボーデヴィッヒはまた部隊最強の座に再度上り詰めたのか
「だが、その分。俺はあいつに〝呪縛〟をかけたのかもしれん」
「呪縛？」
「あぁ・・・『力』とは一度手にしたら手放すことはそう簡単には手放せん、だから俺はあいつに『力』という更なる強さを求める〝呪縛〟をかけてしまったのかもしれないんだ」
力・・・更なる強さを求めようとする呪縛・・・・
「・・・・さて、もうこれぐらいにしよう。これ以上話したところで何も変わりはしない」
「一夏兄・・・・」
一夏兄はそう言いながら立ち上がると、再び私の頭を撫でて来る
「ボーデヴィッヒの事は俺に任せろ、お前は・・・お前が今なすべきと思った事をなせ、今はそれだけを考えておけばいい」
「なすべきこと・・・・・？」

すると一夏兄のアメイジングエクシアの待機状態の指輪に投影ディスプレイが投影された、それを見た一夏兄はその場を去ろうとする
「千冬、今日は山田先生の所に泊めて貰え、私はデュノアと話がある」
「ええ!?そ、そんなっ！」
「早く寮へ戻れよ、じゃあな」
一夏兄は私に背中を向けながら手を振って去って行った、残された私は徐々に沈んでいく夕日を見つめる
「力と強さを求める呪縛・・・・か、私もそうなったら、どうなるのだろうな・・・」
私は立ち上がるとその場を去った

第18話　シャルロット

一夏ＳＩＤＥ

「19時前か」

千冬は篠ノ乃の部屋に移動して、俺はデュノアが来るのを待っていた。もしあいつが今自分がしていることが嫌なのなら、ここに来るはずだ

「にしても、どこかで見た事がある顔だったな」

最初にデュノアを見たとき誰かに似ていると思った、何処かは忘れたが会った事があるとそう思った

「ん？」

すると俺のスマートフォンから着信音がなった。スマートフォンを手に取り画面を見る、・・・・ナターシャ？

「もしもし」

『ハロー！一夏、久し振りね』

電話の相手はナターシャ・ファイリス。ＩＳ学園で共に過ごした俺とオータム、そしてスコールの友人だ。学生時代は俺達の中で一番テンションが高かった女だ

「久し振りだな、ナターシャ。元気だったか？」
『そう言う彼方こそ、元気？』
「あぁ。元気だ」
『ならよかったわ！』
　ナターシャの奴、如何やら相変わらずのようだな
『久し振りに彼方の声が聴きたくてね、大丈夫だったかしら？』
「大丈夫じゃなかったら電話に出ないさ」
『ふふ、彼方って面倒事は早めに終わらせたいタイプだものね』
「誰だってそうだろう。それで？そっちは大丈夫なのか？アメリカのテストパイロットをしているのだろう？」
『ええ。今テストが終わった所だったのよ、久し振りに彼方の学生時代の写真を見つけて久し振りに連絡してみようと思ってね。それで先生はどう？上手くやっていってる？』
「まぁ、何とかな」
　俺は椅子から立ち上がり部屋のベランダへ移動し夜の空を見つめる
『スコールの事は大体聞いたわ、まさか彼女が亡国機業に入ったなんて』
「・・・お前もまさか」

『えぇ。オータムと同じよ』
「・・・・・・・・」
『スコールが何故亡国機業に入ったのか解らないけど、一体彼女に何があったのかしら』
「さぁな」
　スコールが何故亡国機業に入ったのか、それはスコールの恋人であった俺でも分からない
『それから、一夏。彼方のＩＳ・・・確かガンダムだったかしら？』
「あぁ、そうだが」
『気を付けなさい』
　急にナターシャの雰囲気が変わった
「・・・どうした？」
『私今米軍の基地にいるのだけれど、米軍の奴等、随分と彼方のＩＳの事を調べているらしいのよ』
「ほぉ・・・・」
『もしかしたら彼方のＩＳを奪取するつもりなのかもしれないわ、あれ程の高性能な機体を欲しがらないはずがないから』
「だろうな」

いつか俺のＩＳを奪取する奴らが現れるだろうと予測していたが、まさか米軍とはな
『だから、気を付けなさい。恐らくちゃんと訓練された特殊部隊よ』
「あぁ。了解した、だがナターシャ、余り無茶はするなよ?」
『あら、心配してくれるの?嬉しいわね』
「お前こそ、俺がそんな奴らにやられるとでも?」
『そうだったわね、でも一応彼方も人間よ。人は必ず失敗する生き物だから、注意しなさいって事』
「わかっている、だがどうしてその特殊部隊の事や俺のＩＳの奪取してくる事を知っている?」
『イーリが彼方のファンでね、偶然米軍のお偉いさん方が彼方のＩＳの話をしているのを盗み聞きしてらしくて私にその事を伝えてくれたのよ』
「ファンって・・・」
イーリとはアメリカ基地で知り合ったナターシャと同じテストパイロットの女性らしい。俺はやはりまだ、珍獣扱いを受けているのか?それともアイドルか何か?
「取り敢えず、感謝するとイーリス・コーリングに伝えておいてくれ。いつか会ったときは礼をさせてもらうと」
『了解よ、それと私にはないの?』

「・・・・感謝する」
『どうも♪』
俺はナターシャにそう言うと彼女は楽しそうに返事をする
トントントン
「っ?」
《お、織斑先生・・・ぼ、僕です。デュノアです》
如何やら来たようだ。俺は部屋に戻り窓を閉めると緩んでいたネクタイを整える
「すまない、少し切るぞ」
『あら?何か用事が出来たの?』
「あぁ・・・・スコールの事は余り喋るな、いいな?」
『わかってるわ、彼女には借りがあるもの。それじゃあ、またね一夏。バーイ』
「あぁ。じゃあな、ナターシャ」
『一夏。スコールの事が飽きたら私の所にいらっしゃ♪それか愛人でもいいわよ♪、私は彼方の事を諦めた訳じゃないから♪』
「おい、コラ」
『うっふふ♪バァーイ♪』
ナターシャはそう言うと電話を切った、全くあいつは。スマートフォンを机の上に置

くと俺は部屋のドアを開ける、そこにはもじもじとしているデュノアが立っていた
「来たか、デュノア」
「は、はい」
「すまなかったな、少し友人と話をしていてな。入れ、寒かっただろう?」
「だ、大丈夫です!」
俺はデュノアを空いた椅子に座らせ、向かい合う様に座る
「さて、では聞こう。シャルル・デュノア、お前が男として此処に来た理由と目的を」
「はい・・・・」
デュノアはそう返事をすると自身の目的を話した
一夏ＯＵＴ

そしてその頃。静かになったＩＳ学園校舎の前に怪しく動く複数の影がいた
「いいか?今回の目的はシャルロット・デュノアの始末と織斑一夏のＩＳの奪取だ」
黒く肌が密着したスーツを着たリーダーと思わしき女性がその場にいる戦闘員に言うと戦闘員達は小さく頷く
「あの小娘の正体と目的がばれてしまった以上、あの小娘に用はない。全てはデュノア社の為だ、いいな?」
女性はそう言うとその隣で地下通路に続くゲートのセキュリティーを解除していた兵士がゲートを解除した事を合図する
「いくぞ、続け!」
そう言うとリーダーとその兵士たちはＩＳ学園へ侵入した

一夏ＳＩＤＥ　２

「これが、僕が・・・父から受けた命令と目的です」

「・・・・やれやれ」

デュノアの目的、いや父親から受けた任務は千冬の白式と俺のエクシアのデータかＩＳの強奪だったらしい。デュノア社が経営難になっているのは私でも知っている、設立当初から技術・情報力不足に悩まされ、未だ生産できるＩＳが第２世代止まりであることから経営危機に陥り。経営危機の回避のための苦肉の策として、デュノアを男装させ広告塔および第３世代以降のＩＳのデータ収集のためにＩＳ学園へ送り込んだ・・・・全くもってふざけている

「それで、お前はこれからどうする気だ？」

「織斑先生にばれた以上、僕はフランス政府もこの真相を知ったら黙ってないだろうし代表候補生を降ろされて当然牢屋行きです・・・当然の報いですよ」

デュノアは顔を沈めて痛々しくそう答える

「お前はそれでいいのか？」

「いいも悪いもないですよ、僕には選ぶ権利はない・・・仕方がないんです」

「そう言う事を私は聞いてるんじゃない、お前自身はどうしたいと聞いている」

「僕は・・・僕は・・・うぅ」
　デュノアは泣いている顔を俺に見せない様に両手で顔を隠す、俺は椅子から立ち上がりデュノアの頭に手を乗せる
「安心しろ、お前をフランス政府に突き出す気はない」
「え・・・・?」
　顔を上げて何故?といった顔をする
「私と千冬はな、両親に捨てられて生きて来た」
「っ!?」
「その時の私はまだ中学生であいつ（千冬）は小学生になったばかりだった、施設でお世話になりながら・・・・いや、殆どが私の手で織斑を育てて来たのも同然か」
「どうして、ですか?」
「私は両親に捨てられた時に私の中で何かが壊れたんだ。『他人を信用するな』『身内だけを信じろ』そう言う思考が俺を突き動かした。近づいて来る者は遠ざけさせ、突き放してきた、此処に入学するまでは」
「・・・・・・・・・」
「何度突き放そうとしても何度も近づいて来る奴らがいた、最初は『此奴らもどうせ裏切るに決まってる』そう思い込んでいた、だがそいつら俺にもう一度『他人を信じる』心

を貰った・・・・いいか?デュノア」
「は、はい」
　俺はデュノアの肩に手を置く
「お前もいずれ私や山田先生の様に大人になる、だからこそ今のお前の様な大人の道具にされる子供を増やさない為にも、そして・・・次の世代に生まれてくる子供達の未来を悪い方向へ向けかねない様にお前達はそんな大人たちよりも強くならなければならない」
「強く・・・」
「自分で決めろ、お前が何をしたいのか。どうしたいのか」
　デュノアはズボンを強く握りしめて俺の顔を見る
「僕は・・・皆と一緒に・・・・い、いたいです・・・」
　それでいい。お前が進みたい道があるのならその道を進め、他人に決められた道ではなく己が信じた道をそして、その答えを
「ふ・・・・・・」

――――キュイイイイイイイ・・・・――――

「っ!・・・・(成程、そう来たか)」
「お、織斑先生?」
「デュノア、少し野暮用が出来た。お前は此処に居ろ外には出るなよ?」
「は、はい・・・(や、野暮用?)」
俺はデュノアにそう言うと、部屋の外に出る。そして懐からワイヤレスイヤホン型のインカムを片耳に付けると山田先生に通信を入れる
《は、はぁ〜い、や、やまだですぅ〜・・・むにゃむにゃ》
前々から思っていたが山田先生は寝る時間が早すぎるのでは? いや、それよりも今は
「山田先生、如何やら学園内に客が来た模様だ。直ぐに他の先生方にも連絡を」
《え?・・・ま、まさかし、侵入者ですか!?》
「あぁ。しかもご丁寧にステルス機能を搭載したＩＳも数機いる、急いでくれ。先に私が迎撃する、山田先生も急いでくれ」
《りょ、了解です!!》
「頼む」

通信を切ると俺はそのまま寮の廊下を走り出す、まさか堂々とこの学園に入ってくるとは余程自身がある様だな

「この学園には指一本と触れさせはしない」

一夏ＯＵＴ

第19話　彼女の決意　前編

「・・・・・・・・」

ＩＳ学園地下通路を進む黒いスーツを着た男達とその男達の前を進むＩＳを纏う四人の女性達が真っ暗な通路を進んでいた、装着しているＩＳ『ラファールリヴァイブ』ステルス仕様機試験型を纏っている。彼女達の目的は千冬の白式と一夏のアメイジングエクシアのデータ並びにその奪取、そしてその任務を失敗したシャルロット・デュノアの始末であった。

「よし、此処から右に曲がったら織斑一夏がいる寮のはずだ。全員油断するな?」

リーダーの言葉を聞いた女性三人と男性戦闘員は静かに頷く、そして通路の角を曲がろうとした時だった、突然暗い通路の先から光輝くレールガンが高速で飛んで来た

ドシュュュュュュュュュュ!!

「っ!?ぐぁぁぁッ!!!」

リーダーの隣に立っていたリヴァイブを纏っていた女性にそのレールガンが直撃し、

吹き飛ばされ壁に激突した。リーダと他の戦闘員達はそのレールガンが放たれた方をハイパーセンサーを使い見ると、そこには漆黒の機体が佇んでいた

「貴様ら何者だ?」

　そこに立っていたのはドイツの第三世代型ＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏ったラウラ・ボーデヴィッヒだった、右肩に装備している大型のレールカノンからは煙が上がっていた

「ドイツのシュヴァルツェア・レーゲンだと!?」

「まだトライラル段階のはずだ!?」

　ボーデヴィッヒは不気味な笑みを浮かべるとレールカノンを工作員達に再び向ける

「この学園に何の用があるのかは知らないが、教官を狙ってきたのであれば。殺しても問題あるまいッ!」

　再びシュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンから火が噴いた

一夏ＳＩＤＥ

アメイジングエクシアを展開し地下通路を進んでいる。先程から爆発音が鳴り響いているようだが一体誰が戦っている？

『兎に角急がなくてはな』

すると別の通路の入り口からラファールリヴァイヴを纏った山田先生とその他の先生方が合流してきた。山田先生方は俺の後ろをついてくる形で進む

「織斑先生、状況は」

『私より先に誰かが侵入者と戦っている様だ、恐らく専用機持ちの誰かだ』

「そんな・・・一体誰が」

『それよりも、他の教員達は？』

「はい！万が一の際に備えて少数の先生方が学園上空で待機しています」

『さすがだな・・・見えて来たな』

山田先生と話している内に通路の先に戦っているＩＳの姿が二機捕えた。あれは・・・ボーデヴィッヒか。倒れているＩＳ三機と気絶している歩兵部隊がいる様だな

『山田先生、先行する』

「了解です！」

ＧＮドライヴからＧＮ粒子の放出されスピードを上げていく。アメイジングＧＮソードをライフルモードで侵入者のラファールリヴァイヴに狙いを定めトリガーを引く

『狙い撃つ』

アメイジングＧＮソードから粒子ビームを放ち、ビームはリヴァイヴの背中の固定ユニットと胸部に直撃しユニットは爆発し中破し胸部の装甲が無くなりＩＳスーツが丸出しした状態になった

「っ！教官！」

『下がれ、ボーデヴィッヒ！』

俺はボーデヴィッヒにそう叫ぶとボーデヴィッヒは素早くその場から離れ俺はアメイジングＧＮソードをソードモードに切り替えラファールリヴァイヴの左腕を斬りおとすと操縦者の首筋にＧＮソードの刃を突き付ける

「ひっ！」

『此処までだ』

操縦者は怯えた表情でそのまま固まってしまう

『山田先生、侵入者の拘束をお願いします』

「了解です、皆さんお願いします」

「「「了解」」」

気絶している男達と気絶してＩＳが解除されている三人を拘束し始める。しかしそのうちの一人が目を覚ましグレネードランチャーを量子展開すると地上へ続く扉を破壊した

「ガンダムがダメなら・・・あの小娘だけでもッ！」

『っ！待て！』

グレネードランチャーで扉を破壊し地下通路を爆風で包まれる。爆風が晴れるとそこにはその女の姿はなかった、くそっ！

『諦めが悪い・・・・山田先生！ここ頼みます！』

「任せてください！ボーデヴィッヒさんも手伝ってください！」

「・・・・・了解した」

ボーデヴィッヒは納得いかない様な表情をするが、大人しく山田先生達と共に工作員達の拘束にかかる、奴の狙いはデュノアだ追わねば。ＧＮ粒子を放出し穴が空いた場所から飛び出した

一夏ＯＵＴ

第２０話　彼女の決意　後編

「あれが、ＩＳ学園か…テレビでしか見た事ないけど結構大きいな」
　ＩＳ学園から遠く離れた展望台から白いカッターシャツの上に黒いコートを羽織った、豊かな金髪の髪を持ち整った中性的な顔立ちの男性が展望台からＩＳ学園を眺めていた。その表情は何処となくシャルロットに似ていた。
「……元気にしてるかな、シャルは……ん？」
　すると男性の視界に二つの光が見えた。一つは青い光と緑色の星屑の様な光だった。夜の空を順応無人に飛び回って緑色の光が青い光を追っている様に見えた
「あの光……そうか……一夏君、君は遂に手に入れたんだね…君だけのガンダムを」
　男性はそれを見て微笑む、女性が見たら見惚れてしまいそうな笑みを浮かべる。微笑んだと同時に風が男性の豊かな金髪を撫でる。
「僕も行ってみようかな、久し振りに会いたいし……それに僕は死んだ人間と扱われるのはちょっとあれだしね」
　男性はその場から飛び降りた。飛び降りたと同時に彼の体を緑色の粒子が覆い尽くす。その光はエクシアが放出する〝ＧＮ粒子〟と全く同じ光り出た。

『こんな僕を見たら、どんな顔するだろう……ね？キュリオス』

緑色のツインアイが光ると同時に高速でＩＳ学園へと向かって行った

一方その頃

バン!!バン!!

「クソッ!!…クソックソッ!!!」

『・・・・・・・・』

シャルロットを暗殺しに来たデュノア社の刺客をアメイジングエクシアを纏った一夏が追いかけていた。デュノア社の女は五五口径アサルトライフル《ヴェント》でアメ

イジングエクシアへ乱射するが全てかわされていく。焦ってきているデュノア社の女は緑色のツインアイを光らせソードモードにしたアメイジングＧＮソードを展開しているエクシアの姿を見て恐れていた

「化け物がッ！……化け物ぁぁぁぁぁっ!!」

近接ブレード《ブレッド・スライサー》を呼び出しアメイジングエクシアへ斬りかかる。だがその行動は近接特化型のエクシアにとってそれは哀れな行動だった

『ほう……この私に近接戦闘を仕掛けるか……いい心がけだ。……だが』

ザシィィン……！

「なっ!!?」

『ここから先は……私の距離だ』

《ブレッド・スライサー》の刃を斬りおとした一夏は腹に膝蹴りを入れ顔のバイザーを掴むとＩＳ学園の外へ放り投げ、ＧＮソードを折り畳みライフルモードへ切り替えラファールリヴァイヴのシールドエネルギーを削って行く。

「ぐぅっ…！ぐぁぁっ…！」

『・・・・・・・・』

一夏は無言のままＧＮライフルを撃ち続ける。そして相手のラファールのシールド

エネルギーがゼロになったとモニターに表示されるとラファールは学園の外にある海岸へ墜落した。
「うっ……！」
『さて、これでお前達の目論見は失敗したな？』
「くっ…！」
　するとＩＳ学園から山田先生を含めた三機のラファールリヴァイヴがやってきた。ラファールは着地すると山田先生が一夏に近づく
「織斑先生、全ての侵入者の拘束、完了しました」
『ご苦労様でした、では――――――っ!?』
　一夏は何かを感じとりその場から一本下がるとラファールを纏っていたデュノア社の女の体をワイヤーに繋がれたオレンジと白のクローよ様な物に捕まれた
「うっ…!?い、いやぁぁぁっ!!!」
　女はそのままクローに捕まれた状態で上へと引っ張られていく。一夏達も女が引っ張られていく方を見る、そこには一機のＩＳが居た
「あれって……もしかして…！」
『・・・・・・・』
　白とオレンジのツートンの全身装甲で両足には鋭く尖った戦闘機の両翼の様な羽が

付いており、背中の黒いバックパックからはＧＮ粒子が放出しており、その両側には白とオレンジで塗装された二門のロングバレルキャノン。女を掴んでいるクローには細長いシールドを左腕に装備しており右手にはサブマシンガンの様なライフルを持っていた。そして額にはオレンジ色のＶ字アンテナを持ち緑色のツインアイを持っていた、その姿は正しく一夏と同じガンダムだった

「「ガンダムっ!!?」」

『……ガンダム』

　そのガンダムはクローで掴んだ、女の顔を自身の顔の近くまで近付ける

『そのマーク、あなたはデュノア社の社員かい？』

「あっ…た、たすけ……て…！」

『もう一度聞くよ、君はデュノア社の社員かい？』

　女は怯えた表情で涙を流しながら頷く、それを見たガンダムは『そうか』とただ一言言うと女の顔を離しそのまま前に吊り下げた状態で前に出すと

『悪いけど、君には此処で死んでもらうよ。勿論唯では殺さないよ』

「っ!?お、お願いよ…！こ、殺さないで…!!し、死にたくな――――っ!?な、何よこれ…!!?」

女を掴んでいたクローの奥から鋭く銀色に光るニードルがその姿を現した。ニードルはゆっくりと女の腹部へと伸びていく。女は必死にもがこうとしたが両腕はクローによって挟まれており動かせなかった

『どうだい?、一方的な暴力になす術もなく、命をすり減らしていく気分は?」

「い、いやぁぁぁぁぁぁ……!!!だ、だれかぁぁぁっ!!!やめてぇぇぇぇ…!!」

『それは命乞いって奴かい?　最後は何?ママかい?それとも恋人?フフっ…今頃、走馬灯で、子供の頃からやり直してる最中なのかい?』

「アッー、アッー!!!、ー!やめてぇぇ!アッアッ、アッー!!!」

じわじわとニードルは女のＩＳスーツに食い込んでいく、ガンダムは楽しんでいる様に精神的に女を追い詰めていく。

「やめてくださいっ!もういいでしょう!?」

そんなガンダムの行いに山田先生がガンダムと女の前に飛翔してくる。だが、ガンダムは女から山田先生に視線を向ける

『あなたは何を言ってるんです?この女はこの学園の生徒を殺そうとしてたんでしょ?自分達の生徒に危害を加える様な大人をあなた方は許せるんですか?』

「で、ですが…」

『それに、僕はね……デュノアそのものが許せないんだっ!!』

グシャアアアアアア
!!!!

遂にニードルが女の体を貫通した。女は涙を流した状態で目を開けたままぶらんと前へ倒れた、それを見てガンダムは空高く亡き骸となった女を放り投げると背中の二門のロングバレルキャノンの砲口を向け巨大な粒子ビームを放った

ドガアアアアアアアアン
!!!!

ラファールは大きな爆発を起こし大破した。ＩＳコア共々破片となって海の藻屑となっていく、その光景を見ていた一夏と山田先生、そして二人の教員は羽根つきのガンダムを睨み付ける。するとガンダムは今度は一夏の方へ顔を向けた

『やぁ、久し振りだね、一夏君。君とは５年ぶりかな？』

『……やはり、お前は』

するとバイザーを部分解除し素顔を見せる。その顔を見た山田先生達は驚いた、何せパイロットは

「「お、男!?」」

「ふふ」
楽しげに笑みを浮かべるそのガンダムのパイロット、一夏は彼の顔を見て驚くが直ぐに元の無表情へと戻る。一夏もバイザーを解除し素顔を晒す
「やはり生きていたか……〝アレックス〟」
「うん、運悪く生きてたよ。一夏君」
アレックスと呼ばれた男性は一夏の顔を見て笑みを浮かべる
「それにしても相変わらずのようだね、君は」
「それはお互い様だと思うが？」
すると山田先生が地上へ戻り一夏に聞く
「織斑先生、あの人は一体……」
「……奴の名はアレックス・デュノア……俺のエクシアのＧＮドライブの開発を共にしていた……科学者だ」
「デュ、デュノアって…！まさか……デュノアくんと同じ!?」
「ん、くん？……一夏君、どういう事だい？」
「はぁ……道理で何処かで見た事がある顔だと思ったがお前の妹だっか……はぁ…」
「妹…まさか……っ！」
一夏は頭を抱え深くため息をついた、アレックスは咄嗟に学園の寮へハイパーセン

サーで拡大し見返していくと、一夏の寮長室の窓からこちらを窓越しに見ていたシャルロットの映像が写った
「……っ!……シャル…そうか……シャルはあいつに……でも、よかった…っ」
アレックスは５年ぶりに見た妹の姿を見て少しばかり涙を流した。アレックスは手で涙を振り払うと一夏に視線を戻した
「一夏君……妹を…シャルを頼む。僕にはまだやるべきことがあるから」
「……やるべき事とは?」
「デュノア社の……壊滅だっ!」
アレックスはそれだけを言うと両足にＧＮブースターを展開し大量のＧＮ粒子を放出させ離脱していく
「織斑先生!追いましょう!」
「無駄だ、あのスピードじゃ並みのＩＳでは追いつけまい」
一夏はそう言い山田先生達を止める。エクシアならばあの程度のスピードには追いつけるが一夏はそうはしなかった

《妹をお願いね、一夏君》

「全く……お前はいつも……大切なものの傍に居てはやれないのか、アレックス」
ＧＮ粒子が舞うなか一夏は鼻で笑うのだった

「お兄ちゃん……」
寮長室の窓から見ていたシャルロットは力が抜けた様に膝を着いて座り込む、ただシャルロットは兄が生きていた事に涙を流していた
「お兄ちゃん……生きててくれたんだね……」
シャルロットは制服のポケットからペンダントを取り出す、ペンダントを開けるとそこには幼い頃のシャルロットと母親、そして兄のアレックスが写っていた
「また…会えるよね?……お兄ちゃん」

シャルロットは力強く、ペンダントを握りしめながらアレックスが飛び去って行った空を見上げるのであった

その数時間後、デュノア社の悪行が暴露されデュノア社は倒産、施設と豪邸は何者かによる爆撃により壊滅したという

第21話　深緑の狙撃手

「ふぅー・・・・・・・」

アイルランドのとある街にある墓地の前で一人の男性が片手に煙草を持って吸っていた

「・・・・・・・」

クリーム色のロングコートを着ており肩まで伸びた茶色の髪にエメラルドグリーンの瞳を持つその男性は目の前にある大きな黒い墓地を眺める。

「あれから数年・・・か」

男性は「はぁ・・」とため息をつくと煙草を捨て足で踏みつける。だが男性が此処に居るのはある理由があったからだ、するとその男性の背後から近づく者がいた、男性は気配を感じたのか後ろに来た人物に言葉を投げかける。

「あんたか?俺を呼び出したのは」

「…ライル・ディランディ…いや、〝深緑の狙撃手〟と言ったほうがいいかな」

「っ!?」

深緑の狙撃手と聞いたライル・ディランディは後ろを振り返る、そこに立っていたの

は。
「・・・・・・何もんだ、あんた」
「僕の名はアレックス・デュノア、通りすがりの科学者さ」
白衣を纏いニコっと表情を浮かべたアレックスを見てライルは懐に隠している拳銃に手を伸ばし何時でも撃てるようアレックスに構える。
「……委員会の人間か？」
「生憎、僕は委員会の人間じゃない。君のその異名を知ってるのは、まぁ科学者の情報収集として受け取ってほしい。それとこんな所で拳銃を出すのは良くないと思うよ？」
「くっ」
確かに此処で拳銃を出すのは良くない、今はアレックスと彼以外の人間はいない。だがいつ人が通るかわからない以上此処で騒動を起こしてはいけない。男性は警戒を続けるまま拳銃を懐に戻す。
「まぁいい、要件は何だ？」
それを聞いたアレックスは白衣の内側から白に緑色のラインを持つ拳銃を取り出す。銃口の下には水色のレーザーサイトが装備されており持つ所には天使の羽をイメージさせた様な黄色と青のデカールが張られていた
「それは何だ？見た事ない形状のようだが」

「これはね、ＩＳだよ」
「……なんでそんなもんをあんたみたいな科学者が持ち歩いてんだよ」
「もちろん僕が設計して開発したＩＳだし、何より僕が〝デュナメス〟を持ち歩いてのは〝デュナメス〟が君を求めているからといってもいいのかな」
「……何の冗談だ、そりゃ」
　求めてる？人殺しの超兵器が？ライルはそう言った目でアレックスを見る。アレックスは「まぁそうだよね」と苦笑するもアレックスの目は決して笑ってはいなかった。
「ＩＳは女性にしか動かせない、だがイレギュラーな存在はどんなものであろうと存在する」
「織斑一夏だろぉ？雄一ＩＳを動かせる男性ＩＳ操縦者で世界最強の座を取ったあの」
「まぁそうだね、世界でたった一人の…でもそれが一人じゃなくなってるんだよ」
「おいおい、まさか二人目とは三人目とかいるって言うんじゃ……まさか」
「ふふ」
　アレックスは首に掛けているオレンジに白のネックレスを見せる。そのネックレスこそがアレックスの専用機アメイジングキュリオスの待機状態のネックレスだ。
「……まさか、俺もＩＳが動かせるって言うんじゃねぇよな？」
「さぁ、それは解らないけど。デュナメスが君を求めている以上、動かせるかも知れな

い」
「そのデュナメスって奴を俺に渡して、どうしようと?」
　それを聞いたアレックスは空いた手をライルへ差し伸べる。
「僕に協力して欲しい。この腐った世界を元の世界に戻すために」
　ライルは腕を組み壁に背中を預け何かを考える。そして次に目を開けるとライルはアレックスの目を見る
「なら、そのデュナメスとやらとあんたのそのＩＳで勝負しねぇか?」
「勝負?」
「まだあんたを信用したわけじゃない、だから戦いで俺を信用させてみろって言ってんだよ。それなら文句ないだろ?」
「……まぁそうだね」
　ライルに聞こえよう小さくそう言葉を言うと、アレックスはデュナメスの待機状態である銃をライルへ投げ渡す
「いいよ、それに君のその狙撃の腕にも興味があるしね。それで、何処で勝負するのかな?此処じゃ流石にね」
「バカヤロウ、誰がこんなところでドンパチするって言ったよ。――――――この先にある無人の草原がある、そこだったらいいだろう」

「ははは、わかってるよ。じゃあ行こうか」
　ライルは此処まで乗って来た車にアレックスを助手席に乗せると平地へと向かって行った

　１０分足らずで目的地である草原に到着した二人は車から降り草原に足を踏み入れる。
「じゃあ始めようか、展開の仕方はさっき教えたとおりにだよ」
「あぁ」
　ライルは待機状態である銃を片手に持つ。
「行くよ、キュリオス」

「来な、デュナメス」

キュィィイイイイイイイイン

アレックスとライルの体を待機状態であるアメイジングキュリオスとアメイジングデュナメスからＧＮ粒子が放出し包み込む。そしてＧＮ粒子が空へと消えていくとアメイジングキュリオスを展開したアレックスとアメイジングデュナメスを展開したライルが立っていた

『・・・・・・・』

全体が緑と白のツートンで両肩には半透明の大型シールドが装備されており両ふくらはぎにはホルスターが装着されている。腰部に白と緑に分けられたバーニアがありバーニアの左右に一本ずつＧＮビームサーベルが装備されている。額には緑色のＶ字アンテナを持ちライトグリーンのツインアイを自分の存在を表すかのようにツインアイが光る。

『ガンダムアメイジングキュリオス』

『ガンダムアメイジングデュナメス』

『アレックス・デュノア』

『ライル・ディランディ!』

名を言いきるとキュリオスはＧＮドライブからＧＮ粒子を放出しデュナメスへと向かって行く。

『目標へ飛翔する!』

『狙い撃っ!!!』

アメイジングＧＮサブマシンガンとアメイジングＧＮスナイパーライフルを展開し銃口を向けたと同時に粒子ビームが吹いた。

第２２話　翼と銃

「っ！」
　アレックスとライルが戦い始めた丁度その頃、部屋でソファーに座って優雅に紅茶を飲んでいたスコールが何かを感じ取り手に持っていた、紅茶をテーブルに置くとそのまま窓のほうへと歩き出した。
「お、おい！スコール！どうしたんだ!?」
　隣に座っていたオータムは立ち上がりスコールへ呼びかける。
「オータム、悪いけど少し出かけてくるわ」
　そういってスコールは部屋の窓を開けるとガンダムエクシアダークマターを展開し右手にダークマターライフルを量子展開し装備する。
「スコール・ミューゼル、ダークマター。出るわよ」
　ＧＮドライブからＧＮ粒子が放出されるとダークマターはそのまま青い空へと飛翔した。その時のスコールの目は赤い目ではなく、〝金色に輝く眼〟へと変わっていた。

アレックスＳＩＤＥ

『目標へ飛翔する！』

『狙い撃っ!!!』

僕の目の前に立っている深緑の機体、ガンダムアメイジングデュナメスを展開したライル・ディランディは右手に展開したアメイジングＧＮスナイパーライフルを片手で持って僕へその銃口を向けた。僕も同じように右手に展開したアメイジングＧＮサブマシンガンをデュナメスへ向け引き金を引いた。同時に放たれた粒子ビームが直撃し眩しい閃光が視界を塞いだ。

（けど！）

僕はそのまま今頃視界がゼロであろうデュナメスへ向かって左腕のアメイジングＧＮシールドをクローモードに変形させ眩しい閃光の中を移動する。

（これで！）

閃光が晴れ視界が見えてくる、だがクローを突き出した先にはデュナメスの姿はなかった……まさか…ッ！

『俺を嘗めんなよッ！』

いつの間にか僕が居た場所の上にアメイジングＧＮスナイパーライフルを今度は両手で構えて浮遊していたグデュナメスの姿があった。

『やっぱり！』

するとアメイジングＧＮスナイパーライフルからロングレンジの粒子ビームが勢いよく撃ち出された、だが僕はそれをクローモードのシールドをすぐさまそっちに向けロングレンジをシールドで受け止める。

『流石、深緑の狙撃手！相手の動きを読むのが早い！』

『ターゲットの動きを予想して狙い撃つのが、スナイパーの基本だ』

そして今度はアメイジングＧＮスナイパーライフルを収納し脹脛のアメイジングＧＮピストルを抜いた。

『そう簡単にはやられはしないよっ！』

『はっ！上等!!』

サイドアーマーからＧＮビームサーベルを抜きビーム刀を展開しアメイジングＧＮ

サブマシンガンを乱射しながらデュナメスへ向かっていく。デュナメスも両手に持ったアメイジングＧＮピストルを構えて粒子ビームを撃ってきた。お互いビームを交わしながら青い空をメビウスの輪を描くように飛んでいる。

『これがＩＳから見た世界か、中々いいけしきが見れるな。こりゃ』

そういいながら正確な射撃をしてくるデュナメス、シールドを前に突き出しそれを何とか防ぐ僕は隙が出来たところにアメイジングＧＮサブマシンガンを乱射する。

『だろう？けど、僕らが見ている世界はそんないい世界じゃないんだけどっね！』

一気にデュナメスの懐へ入りＧＮビームサーベルを下から上へ斬りかかる。『ち！』とそんな舌打ちが聞こえると左手に持っていたアメイジングＧＮピストルを上へ投げるとＧＮバーニアからＧＮビームサーベルを逆手に持って僕のＧＮビームサーベルを受け止めた。

『俺に剣を！』

『これなら自慢の射撃は出来ないだろう？』

『そうかいっ！』

するとフロントアーマーが左右に開いた、僕はそれを見てすぐさまデュナメスから離れるとフロントアーマーから複数のＧＮミサイルが放たれた。あのＧＮミサイルは着弾した目標の内部に粒子を送り込んで破壊するようになっている特殊なミサイルだ。

それは対ガンダム戦も想定して開発したモノだから受ければダメージは大きい。アメイジングＧＮサブマシンガンとＧＮビームサーベルでミサイルを撃ち落し切り裂ていく、だが、そんな中彼は既にミサイルに気を取られている僕にアメイジングＧＮスナイパーライフルを遠くから僕へ構えていた。

『今度こそ……狙い撃つぜぇぇぇ!!!!』

今度はロングレンジではなく、通常の粒子ビームを放った。粒子ビームは真っ直ぐ僕へ向かってきていた。

『くっ!』

顔と左肩の間に粒子ビームが通り抜け、何とか交わしたが次から次に粒子ビームが飛んでくる、このままじゃ彼に接近出来ない。……まだ使いたくなかったけど彼にはこれを使うだけの強さと価値がある!

『トランザム!』

単一仕様能力：ＴＲＡＮＳ―ＡＭ

キュリオスの単一仕様能力である『ＴＲＡＮＳ―ＡＭ』を発動した、キュリオスの機体全体が赤く光り輝き出しバーニアから放出されるＧＮ粒子も勢いよく放出される。
『な、なんだありゃ!?』
『いくよ、キュリオスっ!!』
僕はすぐその場から高速でデュナメスのもとへ向かっていく、今頃トランザムを発動し赤い光を纏ったキュリオスを見てライル・ディランディは驚いているだろう。
『これで決める!!』
『くそっ！』
ＧＮビームサーベルをデュナメスに斬りかかった、デュナメスは手に持ったアメイジングＧＮピストルで何とか受け止めた。
『単一仕様能力って奴か！マジかよ!?』
『君にはトランザムを使うだけの価値と強さがあると見たんだ、さぁ、どうする!!』
『うっ…ぐぅ……ッ!!』
僕はＧＮビームサーベルを強く押していく、押されているデュナメスは何とか押し返そうとするが、デュナメスは徐々に押されていく。

『負けられねぇな……負けるわけには…ッ!!』
　するとデュナメスの装甲に赤いラインが走り出した。そうか……やっと君もっ!!。
『いかねぇんだよォォォォォ!!!!』

単一仕様能力…ＴＲＡＮＳ―ＡＭ

『トランザムッ!!!』
　デュナメスはトランザムを発動し背中のＧＮドライブから勢いよくＧＮ粒子が放出され僕を押し返してきた。キュリオスと同じく赤い光を纏ったデュナメス、お互い本気になったって事だ!。
『やっと本気になったね、ライル・ディランディ!!!』
『あぁ、お陰様でな!!』
　デュナメスはキュリオスの腹に蹴りを入れ、そこから離脱すると両手のアメイジング

ＧＮピストルを構える。
『乱れ撃つぜ!!』
　ガンカメラモードに切り替え頭部のＶ字アンテナが下へ下がった。するとアクロバティックな動きでアメイジングＧＮピストルを撃ち始めた、その一つ一つの粒子ビームが確実に僕を捉えていた。直撃は何とか避けてはいるが装甲の彼方此方をかすっている。さっきよりも命中率が上がっている!。
『くっ!』
『そろそろ終わりにしようぜッ!!!』
　デュナメスは今度は自分からキュリオスへ高速で近づいてきた、何!?狙撃タイプのデュナメスが自分から接近戦を!!?彼は一体何を考えてるんだ!?。
『俺をそこいらの臆病な奴らと一緒にするなよ?』
　奴らとは恐らく狙撃手達の事だろう、狙撃手とは自分から前に出ようとはしない。いや、ないだろう。だが彼は自ら前に出てきた、狙撃が得意な彼が前に。するとアメイジングＧＮピストルで僕の顔を殴り蹴りを入れると、アメイジングＧＮピストルの引き金を引いてキュリオスのシールドエネルギーを削っていく。けど。
『まだだっ!!!』
『ちぃっ!!』

僕は負けじとＧＮビームサーベルで左手に持っていたアメイジングＧＮピストルを切り落とした。デュナメスは切り落とされたピストルを捨て右手に持っていたピストルをホルスターに収納し代わりにアメイジングＧＮスナイパーライフルを持った、空いた左手には先程使っていたＧＮビームサーベルを持ち僕のＧＮビームサーベルを受け止める。

『はぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!!』

『でぇぇぇぇやァァァ!!!!』

そして等々顔と顔をぶつけ合いお互いのツインアイがお互いを睨み合った、その時。

『そこまでよ』

『『っ!?』』

トランザムと途中で停止させ僕たちは咄嗟に離れ地上に着地した、何だ今のは!?僕たちは上を見上げるとそこにいたのは

『ダーク…マター……?』

エクシアの2号機『ガンダムエクシアダークマター』が眩しい太陽をバックにしてそこに浮遊していた。ダークマターはゆっくりと僕たちの前に降りてきた。

『さて、あなたたち。此処で何をしてたのかしら?』

この声は…女性か?。

『お前の知り合いか?』

ライル・ディランディがプライベートチャネルで通信を入れてきた。

『いや、あの機体を作ったの僕じゃない。あれは篠ノ乃束が僕の親友が開発した一号機のデータを元に開発した機体なんだ』

『あの天災が作った機体!?』

ライル・ディランディはそれを聞くとアメイジングGNスナイパーライフルを構える。

『まさかダークマターやエクシア以外にも太陽炉搭載機があったとは思わなかったわ』

『僕こそ、まさかダークマターが此処の来るなんて思いもよらなかったよ。』

『スコールよ、スコール・ミューゼル』
『そうか……ならスコール――――どうする？』
　僕もアメイジングＧＮサブマシンガンをライル・ディランディと同じように向ける、目の前のスコール・ミューゼルが篠ノ乃束の手先である可能性がある以上、警戒は弱めるわけにはいかない。僕にとって篠ノ乃束は僕の技術を盗み取った泥棒猫、いやここは泥棒兎といったほうがいいかな。そんな奴の機体を使ってる彼女は。
『私は戦いに来たわけじゃないわ、ただこの子と同じ〝光〟を持ったあなたたちを感じてここに来ただけなのよ』
『じゃあ、さっきの途轍もない殺気はどういう意味だい？スコールさんよ』
『あれでもしないと、あなたたちは戦いを止めなかったでしょう？何で戦ってたのか知らないけど』
『それじゃあ、君は僕たちの敵ではないと？』
『えぇ、少なくともね』
　確かにさっきの殺気は彼女から感じられない、敵意も。確かに少なくとも彼女は僕たちと戦う気はないのだろう。横でアメイジングＧＮスナイパーライフルを構えていたライル・ディランディもライフルを下に向け警戒を解いた。僕も同じようにサブマシンガンを下ろす。

『さてと、急ぎましょう?二人とも。さっきのトランザムの光を見られて今ＩＳ部隊がここに向かってきてるわ』
『……流石に派手に暴れすぎたな、デュノア』
『…そのようだね』
熱くなりすぎたね、僕たち。スコール・ミューゼルは僕たちに背を向けるとそのまま飛翔し、僕たちもＧＮ粒子を放出しダークマターの後ろへ付いていく。
『今から私の隠れ家に連れていくわ、あ、言っておくけど彼方たちに拒否権はないわよ?』
『オーライ、あんたに従うよ』
『仕方ないね、了解した』
『正直な子は好きよ』
彼女はそう言って再び前を向く。僕たちじゃ彼女に傷一つつけられないだろう、あの時本能のわかった。これは戦ってはいけない類に入るモノだ、決して。そう思ってしまっている。ライル・ディランディも今頃僕と同じことを考えてるだろうね。
『行きましょう』
そういって僕たちはダークマターの後に続く様にＧＮ粒子を放出し、アイルランドから離脱した。

第２３話　白と黒

千冬ＳＩＤＥ

「ええとね、千冬がオルコットさんや凰さんに勝てない……というか相打ち、になるのは単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「うっ……い、一応把握してるつもりなんだが」

シャルルが転校してきてから五日が経った。シャルルは一夏兄と同じく兄がいるらしくその兄と一夏兄が友人だったと聞きシャルルとは名前で呼び合うようになった。今日はシャルルにＩＳの実戦におけるレクチャーを受けている。しかも今日は休日ということもあり私たち以外にも実習に来ている生徒も多くいる。

「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。さっき僕と戦った時よりも殆ど間合いを掴めなかったよね？」

「……確かに『瞬間加速』も読まれていたしな」

「千冬の白式は格闘戦闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。軌道予測されて攻撃されちゃうからね」

「うーん」

「千冬は『瞬間加速』した後にフェイントを掛けた攻撃が得意らしいからそれをもっと工夫すれば大抵の相手は倒せると思うよ?、でも零落白夜がある以上余りエネルギーは使えないけど」

確かに。『零落白夜』は自身のエネルギーを引き換えに対象のエネルギーをすべてを消滅させるチートとと言ってもいい『単一仕様能力』。当たれば確実に大ダメージを与えられるが当たらなければエネルギーを無駄に消費してしまうというデメリットもある。一夏兄は雪片と『単一仕様能力』『零落白夜』だけで世界最強の座に君臨した。

「それにしてもシャルルは教え方が上手だな、とても解りやすい」

「そう? ありがとう、千冬」

「……箒たちの教え方は色々と…解るだろう?」

「う、うん……まぁね」

あれはもう教え……ではないな。箒に至っては。

『こう、ずばーっとやってから、がきんっ! どかんっ! という感じだ』

もはや教えではなくただの擬音。

『なんとなくわかるでしょ? 感覚よ感・覚。……はあ? なんでわかんないの!!』

確かに私も感覚で覚える方だが、それでは誰も解らん上、キレられるぞ?。

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

……頭がパンクする。
「千冬の白式って『後付装備』がないんだよね？」
「あぁ。何回か調べてもらったんだが、『拡張領域』が空いてないらしい。だから『量子変換』は無理だと言っていた」
「それは多分『単一仕様能力』に容量を使ってるからだよ」
「『零落白夜』は『拡張領域』を埋め尽くす程のコストがかかってるって事か……」
「そうだね…でもね『単一仕様能力』ってのは普通は『第二形態』してから発現するものなのにそれが『第一形態』から使えるってだけで千冬は凄いよ」
「そ、そうなのか？」
「うん。『第二形態』になっても発現しないことが多かったから、それらの特殊能力を複数の人間が扱える様にしたのが第三世代型ＩＳ。オルコットさんのブルー・ティアーズや凰の衝撃砲がいい例だよ」
『第一形態』からアビリティーが扱える私は前例のないイレギュラーって事なのか？。
「『第一形態』からアビリティーが使えるって時点で異常事態だよ。しかもその能力って織斑先生の――――――初代『ジーク・フリート』が使ってたＩＳと同じなんだよね？」
そう。『零落白夜』は一夏兄が現役時代から使っていた『単一仕様能力』。しかも武器までも同じという何とも因縁がある。

「兄妹という理由でなるってわけではないのだろう？」
「うん。もしそうなら現役だったＩＳ操縦者たちの姉妹が同じ『単一仕様能力』を扱えてもおかしくないしね」
「確かにな」
　するとシャルルはアサルト・ライフル《ヴェント》を展開すると私へ渡してくる。
「兎に角、今日は射撃武器の練習をしてみよう」
「他の武器は扱えないのではないのか？」
「普通はね。でも所有者が『使用承諾』すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。――うん、今千冬と白式に『使用承諾』を発行したから、試しに撃ってみて」
　渡されたアサルト・ライフルを受け取ると、一夏兄を真似てアサルト・ライフルのトリガーを引いた。

　バンッ!!

「うぅ！」
　物凄い火薬の破裂音に驚いてしまった。
「一夏兄が使ってたライフルとは違うな」

「織斑先生のはビーム兵器だからね、至ってこっちは実弾だから反動があるのは当然だよ」
　それはそうだな。火薬を爆発させて弾を放つわけだしな。
「今度はちゃんと構えた状態でやってみよう。センサー・リンクはちゃんと出てる？」
「それが……さっきから探しているんだが見当たらない」
　ターゲットサイトを含む銃撃に必要な情報をＩＳ操縦者に送る為に武器とハイパーセンサーを接続する事に関しては、普通はどのＩＳでも付いてると教科書に書いてあったはずなんだがな……。
「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど……」
「１００％格闘オンリー機だから、ついてないのだろう」
「それじゃあ仕方ないね、じゃあ、しょうがないから目測でやってみよう」
　私の後ろに回ったシャルルが私の動きを誘導してくれる。そしてライフルのトリガーを引こうとしたその時。
「ねえ、ちょっとアレ……」
「ウソっ、ドイツの第三世代型じゃない…」
「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」
　急にアリーナ内がざわつき始め、私とシャルルは撃とうとするのを止め注目の的に視

線を向けた。
「・・・・・・・・・」
そこにいたのはシャルルと同じ転校生である、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒだった。転校初日以来、クラスの誰ともつるもうとしない、ところか会話さえしない。
「おい」
ＩＳのオープンチャネルが開きボーデヴィッヒの声が飛んでくる。
「……なんだ？」
気が進まないが無視するわけにもいかない。取り敢えず返事をボーデヴィッヒへ返すとボーデヴィッヒが飛翔してきた。
「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。――――――私と戦え」
「理由がない」
「貴様にはなくても私にはある」
……前々から感づいてはいたが、ドイツ、一夏兄と来たら思いつくのは一つしかない。あの時のＩＳの世界大会第２回『モンド・グロッソ』の決勝戦の事だろう。……私が一番思い出したくなくそして一夏兄の目を失ったあの忌々しき日。
「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなし右目を失う事などなかったことは容

易に想像できる。だから、私は貴様を――――――貴様の存在を認めない!!!織斑千冬ッ!!」

……確かに私があの時『モンド・グロッソ』に行かなければ益々誘拐されず、一夏兄の右目や優勝を失うことはなかっただろう、だがこれは私と一夏兄の問題だ。部外者がのこのこと口を出すな……ッ！。私は怒りを抑えつつその場を去ろうとする。

「ではな」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

そう言った直後、ボーデヴィッヒは漆黒のＩＳを戦闘状態へとシフトさせる。そして左肩に装備された大型の実弾砲が撃たれた。だがいつの前に私の前に出ていたシャルルが即座にシールドを展開し砲弾を弾いた。

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね」

「フランスの第二世代型ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルーキーよりは動けるだろうからね」

シャルルはアサルト・ライフルとショットガンを同時展開し銃口をボーデヴィッヒへ向ける私も雪片を展開しボーデヴィッヒへ構える。お互いに激しいにらみ合いが続く。

その様子を見ていたのか箒とセシリア、鈴が合流してきた。
「大丈夫か！千冬!?」
「お怪我はありませんこと!?」
「いい度胸じゃない、あのドイツ」
近接ブレード、スターライトＭｋ―Ⅲそして双天牙月を構える三人。それを見たボーデヴィッヒは口を吊り上げる。
「ふん、雑魚が五人か。中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか……データで見た時のほうが強そうであったな……まぁいい――――――――全員捻りつぶしてくれるッ!!」
そういってボーデヴィッヒは右腕の装甲から紫色に光るレーザーブレードを展開し私たちへ切りかかってくる。それを見てセシリアとシャルルはスターライトＭｋ―Ⅲとライフル、ショットガンの引き金を引こうとする。だが。

私たちとボーデヴィッヒの間にいつの前にか黒い人影が佇んでいた。

ガシンッ!!!

「なっ!?」

「「「「っ!?」」」」

「やれやれ、これだからガキは疲れる」

砂煙が風で払われると、そこに立っていたのは何と普段の黒いスタイリッシュスーツを着た一夏兄だった。右手をポケットに入れ左手はボーデヴィッヒのレーザーブレードを〝素手〟で受け止めていた。

「きょ、教官!?」

「「「織斑先生!?」」」

「一夏兄ッ!?」

あのボーデヴィッヒすら一夏兄が素手でレーザーブレードを受け止めているのを見て驚愕していた。私や箒達も一夏兄のその姿を見て驚愕していた。一夏兄はレーザーブレードを受け止めていた左手を離すと私たちやボーデヴィッヒを睨み付けてきた。

「模擬戦をやるのは構わん――――――だが、周りにはお前たち以外にも実習に来ている者たちが来ている。もし生徒に被害が出るとなれば教師として黙認しかねる。こ

の戦いの決着は学年別トーナメントで決着をつけてもらおうか？」
　いつの間にか周りを見れば実習をしていた生徒や観客席に多くの野次馬が集まっていた。
「……教官がそう仰るなら」
　素直に頷き、ボーデヴィッヒはＩＳの装着状態を解除した。私たちも同じようにＩＳを解除する。
「織斑、デュノア、オルコット、凰、篠ノ之。お前たちもそれでいいな？」
「「「は、はい……」」」
「僕もそれで構いません……それよりも織斑先生、あの左手は大丈夫なのですか？」
「安心しろ、あのくらいなら怪我などせん」
　いや、普通は切り落とされてもおかしくないと思うのは私だけだろうか。素手でレーザーブレードを掴むとか一体何をしたら。
「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」
　パンっ！と一夏兄は強く手を叩く。それまるで銃声の様にアリーナ全体に響いた。

千冬ＯＵＴ

第２４話　隣に立つ為に

第三アリーナでのラウラとの騒動から数日が経った、ある日の夜。

「・・・・・・・・」

――――――――貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなし右目を失う事などなかったことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――――――貴様の存在を認めない!!!織斑千冬ッ!!――――――

「ち…っ」

箒の部屋へと移り住んだ千冬は窓際のベットの上で頭を後ろに組んでラウラとの会話の事を思い出し舌打ちをする。

「どうしたのだ?」

「……何でもない」

「何でもないわけ、ないだろう。あれからずっとその調子ではないか」

隣のベットで髪を梳いている箒は千冬にそう言ってくるが、不機嫌と言わんばかりの

顔で千冬はそんな顔を窓の外へ向ける。あれから千冬はこの通り不機嫌極まりない調子で他の生徒達と話す機会がなくなっている。
「……モンド・グロッソの時の事は…政府の人間から聞いた。だがあれはお前の所為ではない、だからお前が責任を感じる必要など」
「いや…ボーデヴィッヒが言ってる事は正論だ。……私が弱かったから一夏兄は大会二連覇を成し遂げられず挙句に一夏兄の右目を奪う結果になった」
「だが、お前は」
「箒は私より強かったからそう言えるんだ、それだけの力を持っているし覚悟もある。……だが、昔の私はそうじゃなかった」
上半身だけをお越し千冬は窓の外から見える月の光に照らされた海を見つめる。
「弱虫で臆病でおまけに……隣に一夏兄がいなければ何も出来なかった。一人じゃ何一つ出来ず、何時もたった一人の家族に甘えていた」
「いいではないか、家族に甘える事だって大事だ。それに妹なら兄に甘えるのはどの家庭にもあることだ」
「お前が家族に甘える様な場面は見た事ないがな」
「うっ…」
「……まぁ、中学になってからは少しずつだが男らしく強くならろうと努力した。だが

やっぱり……一夏兄がいないと私は何も出来ない…そんな女なんだよ」
「千冬……」
　若干体が震えている千冬を見た箒はベットから立ち上がり、千冬の傍に寄る。
「一年前の夏休み、休暇で帰って来た一夏兄と一緒に篠ノ之神社で夏祭りがあったんだ」
「そう言えば、夏祭りがあったな……」
「一夏兄と一緒に手を繋いで歩いていたのだが、人混みの所為ではぐれてな…少し休憩しようと人が余りいないところに行ったんだ」
「何故一夏さんと連絡しなかった?」
「その時丁度電源が切れてて連絡が出来なかったんだ」
　何やってるんだお前はっと箒は手を頭に置いてそう呟く。
「それで、近くの木に体を寄せて休憩していた時だった。突然何者かに体を抱き着かれたんだ」
「っ!?」
「箒も解るだろう?誰よりも発育が早かった私の体を見て、興奮したんだろう。無論抵抗しようとした。だが抵抗する前に恐怖心が溢れ出して怖くて抵抗出来なくなった。私を押し倒し着物に手を伸ばされ脱がされそうになったその時に一夏兄が駆けつけてくれたおかげで何とか助かったがな……」

「…そんな事があったのか……」
　両手で自身を包む様に顔を下に向けると、震えた声を漏らし始めた。
「何も…できなかったんだ……あの時と同じで…私一人では……何もッ！何時も一夏兄に迷惑を掛けて…ばっかりなんだ……ッ!!」
「・・・・・・・」
「だから、私は強くならなきゃいけないんだッ！……一夏兄の後ろをついて生きていくんじゃなく、一夏兄の隣に立って生きていくとッ!!」
　ベットのシーツを強く握りしめ、涙を浮かべる。箒はただ黙って千冬の話を聞く事しか出来なかった。千冬の弱さという悲しみと一夏に迷惑を掛けたくないという苦しみを。そして千冬は顔を上げ更にシーツを強く握りしめる。
「……すまない、少し熱くなりすぎた…」
「千冬……」
「明日は学年別トーナメントだ、私はもう寝る」
「……そうだな、もう寝よう」
　そう言い千冬は布団を被りそれ以上何も言わなくなった。箒もそれを見て自身もベットに入り布団を被った。だが箒達の部屋の外の壁に背中を預けて二人の話を聞いていた者がいた。

「・・・・・・・・」

いつもの黒いスーツを着て右目に黒い眼帯を着けた一夏だった。目を閉じて部屋の外で二人の会話を聞いていたのだ。

「……どうすればいいのだろうな」

「織斑先生」

するとそこに両手に前に出して組んで山田先生がやって来た、ニコニコとした表情で一夏の所へ歩いて来る。

「女の子同士のお話を盗み聞きするのは良くないですよ?」

「…そうだな……すまないな、山田先生」

「ふふ♪それじゃあ、行きましょう?」

「あぁ…」

一夏は壁から離れると山田先生と共に寮の廊下の先へ去って行った。

その頃、第三アリーナのピッドの上に一つの人影が一つあった。

「・・・・・・・・」

いつ頃からこうなったのかもう覚えていない。ただ、生まれた時からもう闇の暗さを知っていた。人は生まれて初めて光を見ると言うが、彼女は違った。闇の中で育まれ、影の中で生まれた。そしてそれは今も変わりない。その赤い右目は鋭く鈍く光を放っていた。ラウラ・ボーデヴィッヒ、それが彼女の名前だと知っているが、同時にそれが何の意味も持たない事を彼女は知っている。

「あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、私の存在理由……」

それは暗闇に照らされた〝たった一筋の光〟、暗闇にしか居場所がなかった彼女に照らされたその光に出会ったときに一日でその光の強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に。体が熱くなりそして、願った。

ああ、私もあの光になりたい――――――

空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれが全てとなった。自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿。唯一自らを重ね合わせてみたいと感じた存在。

「織斑千冬――――――。教官に汚点を残させた女……」

あの女の存在を認めない。
「排除する。どの様な手段を使ってでも……」
暗い闘志に火を付け、ラウラ・ボーデヴィッヒは静かに右腕を部分展開し紫に輝く光の剣をアリーナを照らす月へ突き付ける。
「私を照らし、私を理想の光……その光を汚す者は誰だろうと排除する…ッ！」
ラウラ・ボーデヴィッヒは眼帯を外しその眼帯に隠された赤い目とは別の金色の目にも暗い闘志に冷たい火を付けた。

※報告

４年ぶりとなる活動を致します。作品を楽しみにして下さった方々、誠に申し訳ありませんでした。この度、夢の翼の投稿した作品の内のお気に入り数の多い作品だけ残し後の作品を消去しようという決断に決めました。中学から投稿を始めたこのハーメルンさんでの活動で色々な事が沢山ありました。応援して下さる方々、作品を楽しみにして下さった方々、誤字を教えて下った方々、本当にありがとうございました。現在の作品のお気に入り数は・・・

Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓ　～白き龍騎士と海を掛ける少女達～　５５８件

ハイスクールＤ×Ｄ　赤き龍帝を守護せし神殺しの聖なる槍　８９７件

ハイスクールＶＶＶ　革命の神憑きは異世界へ　４６４件

インフィニット・ストラトス　花の道を進みし白い騎士　５９３件
インフィニット・ストラトス　世界最強の天使　７４６件
ハイスクールＬ×Ｓ　邪ノ道と花ノ道を歩む者《凍結中》　１９５件
ハイスクールＤ×Ｄ　優しい光と闇を持つ者　６８０件

となっております。なので、一番お気に入り数の多い作品の〝聖なる槍〟と〝世界最強の天使〟を残し後は消去しようかと思います。フォロワーの皆様誠にこんな決断に至ってしまい申し訳ありませんでした。自分自身、こんなにも多くの思いついた作品を書き続けて途中でネタが思い浮かばなくなり放置してしまい、メールも着ていたのにも関わらず返事を送れず、すみませんでした。締め切りは２月２０日には消去していこうと思います。何かありましたらコメントお願いします。ｐｉｘｉｖの方にも同じ報告を記載しておきます。

すみません。残して欲しいという意見が数件ありましたので投票という形で各作品の『消さないで残して欲しい』というアンケートを追加しておきます。残して欲しい作品を一位～四位まで投票をお願いします。

Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓ　～白き龍騎士と海を掛ける少女達～　お気に入り数５５８件

ハイスクールＤ×Ｄ　赤き龍帝を守護せし神殺しの聖なる槍　お気に入り数８９７件

ハイスクールＶＶＶ　革命の神憑きは異世界へ　お気に入り数４６４件

インフィニット・ストラトス　花の道を進みし白い騎士　お気に入り数５９３件

インフィニット・ストラトス　世界最強の天使　お気に入り数７４６件

ハイスクールＬ×Ｓ　邪ノ道と花ノ道を歩む者《凍結中》　お気に入り数１９５件

ハイスクールＤ×Ｄ　優しい光と闇を持つ者　お気に入り数６８０件

期限まで後、３日。お手数かけますが皆さんの投票をお願いします。